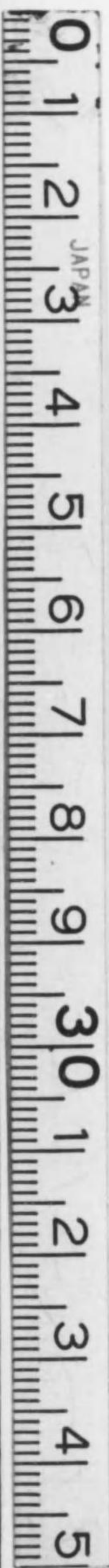


F23

G69



始



KI9R-94



F 23, 9R-94
G 69



文學博士 尾上柴舟 譯

西遊記

堀書店發行



題字 尾上柴舟
装幀 石山太柏



序

西遊記が四大奇書の一として喧傳せられて居るのは、今更云ふを要しない。これが意譯の下に、繪本西遊記となつてから、殆んど、玄奘法師（三藏）、孫悟空、猪八戒、沙悟淨の名を知らぬものはない。ことに近年に到つては映畫の幕にまで上されるやうになつた。

従來名著には、必ずそれに續くものが現はれて居る。三國志、水滸傳、金瓶梅、各々その後篇となつたものがある。従つて西遊記にもそれがあるのは當然である。

後西遊記はすなはち西遊記に續くものである。三藏法師の後たるべき大頭（半偈）、悟空の裔の孫履眞（小行者）、猪八戒の子の猪守拙（八戒）、沙悟淨の弟子の沙致和（沙彌）が、各々の職分を守つて活躍する事、全くその師、その祖、その親のした如くであつて、更に別様の性癖と技倆とを發揮して居る。その故に、後西遊記は西遊記に比して、一種特有の趣致を持つて居る。

今この後西遊記を國字に翻して見た。が、逐字譯はむづかしくて且冗漫に失する。自由譯は樂であるが、原文と離れ過ぎる。で、繪本西遊記者のなした如く、務めて大體を捕捉するに留めた。もし、これを本として原書を讀まれたならば、失望せられることが多いであらう。

後西遊記は寓言である。深遠な教旨哲理を、仙、佛、神、僧、獸、魔を假りて吐露したのであること、全く西遊記と同様である。たゞ後西遊記は西遊記の後を擴げ、或はその外に出ようとするこゝに著者の手腕が存するのである。讀者はよくこれを見られねばならぬ。

後西遊記は全部四十卷である。西遊記の百回に比すれば、その半にも足らぬ。これは、眞經は繁多、眞解は直截なるに基因する。玄奘の得た眞經は三十五部、馬馱し、人擔つた。大願の求めた眞解は二小包、二人一包を捧げるに止まる、従つて、遍歴の年月も、玄奘は十五年、大願は五年、周匝と明快と、此くの如くにして異なると著者は説くのである。これまた讀者の了解せらるべき處である。

以上の四十卷、次を追うて譯したのであるが、たゞ、不老婆々の兩回は、風教を損ふことが多いのを恐れて省略に附した。従つてこゝでは三十八で終りとなつた。讀者は、またこれを諒せられたい。

猶、本書は、乾隆癸卯年新鐫、金閨書業堂梓行、天花才子評點の重鐫繡像後西遊記を本とした。

昭和二十二年秋

柴舟識

後西遊記



東勝神州に傲來國と云ふのがある。その中に花果山と云ふ山がある。そこに天然自然に産れ出た石猴の孫悟空と云ふのがあつた。その石猴は、唐の高僧の玄奘三蔵を保護して天竺に行つて、經を取つて中國に歸つて來た。その功德で佛となつて、極樂世界に登つて、影もなく形もなく、眼も鼻も舌も耳も髪も毛も無く、全身が金剛の體になつた。故郷の花果山は、破れた履の様に棄てゝしまつて、顧りみもしなかつた。人は棄てゝしまつても、天地陰陽は變る事はない。月日は經つたが、花果山は青い峰が黛を凝らし、緑の山が天に聳だつて、全く昔の通りに、仙境であり、福地である。そこに、残つてゐた猿猴は、子を産んだり、孫を産んだりして、千匹から万匹までにもなつて居る。それらが、列を組み、群をつくつて、毎日毎日花を探し、果物を探つて遊び廻つた。

ある日、猿猴どもが、例の通り遊んでゐながら、ふと見ると、山の絶頂に、珍らしい光が、千條とも、万條とも分らぬ位立ち上つてゐる。みんな驚いて、「不思議な事だ。」「奇怪な事だ。」と口々に云ひ囃して見て居たが、それが、一日ばかりではなく、翌日も見え、翌々日も消えず、たうとう四十九日までになつた。その日は、丁度冬至に當つて、一陽來復の時であつたが、俄に空

中に雷の如き大音響が起つた。猿猴どもはびつくりして、東に隠れ、西に逃れて、ちり／＼ばらばらになつたが、音響が止むと、あたりは本の通りひつそりした。猿猴どもは、あちらから、こちらからと首を伸ばして様子を伺ひながら出て来て見ると、山の上の光は消えて、二條の金の色ばかりが光つて居る。「どうしたのだらう。」「行つて見ようか。」と云つたが、氣味が悪いので、「おれが行かう。」と云ふものもない。その中で、一匹膽の太いのが、そつと山の上に這ひ上つて見ると、驚く事には、大きな石が真中から裂けて、一つの石の卵を生み出して居る。そののみならず、その石の卵は、風のまに／＼廻り廻つて居たが、忽ち強く高い響を立て、また半分に分れてしまつた。すると、そこから、一匹の石猴が現はれた。小さいが、身体はすつかり出来上つてゐて、手足もみんな備はつて居る。その足を動かして、早や歩いたり、走つたりした。二條の金色の光は、その石猴の眼からさし出たものであつた。猿猴は驚いて、

「生命もない石から、活きた猴が出るとはどうしたのだらう。不思議だ。不思議だ。」と云つたが、何だか嬉しい氣持がするので、石猴を連れて、山から下りて、草の上に座らせて、松の花だの、細かい果物だのを採つて来て食べさせた。猿猴の中に觸れ廻すのが好きなのがあつて、飛んで行つて、通臂仙と云ふのに知らせた。

通臂仙と云ふのは、非常に伶俐で、物がよく分るので、をり／＼孫悟空に謀を教へたり、よく

世話をしたりした。で、悟空は大氣に入りで、それを使つて居たから、天上の宮殿を開かして、御酒や仙桃を偷んで來ても、それを分けてやつたりした。それを飲んだり、食べたりしたので長生きをし、遂に死なずに済むやうになつた。従つて、悟空が成佛して天に登つてからも、山の洞の中に獨り残つて生活して居た。こんな事で、過去も現在もよく知つて居るので、猿猴どもは、「仙人。」と云つて尊敬した。

通臂仙は自然に道を悟つて居るので、動くことは好まず、たゞ洞の中に靜かに座つて居た。此處へ猿猴が山の上の事態を通知したので、通臂仙はびつくりした。

「それは不思議だ。老大聖孫悟空は、天が生み、地が育て、石は借物で世に現はれたのだ。それは古い昔の事だ。それなのに今どうして、その嫡流が出て來たか。どりや一つ行つて見よう。」と云つて、洞を出て、山の鼻に來て見ると、猿猴が集まつて一匹の小さい石猴を圍んで、喜んで、笑つたりして居る。通臂仙はそれを分けて、小石猴をよく／＼見ると、その跳ねさま、躍りさまが尋常でなく、天來の靈性を含んで居る。で、大喜びに喜んで、

「花果山水簾洞に、又主人が出來た。」と云つて、猿猴どもに、

「この猴には見込みがある。これからはするやうにさせて置け。邪魔をすな。入らぬ世話をして

慾心でも起されたら、天地をかき亂すやうになつて始末がつかんぞ。」
と云ふ。猿猴どもは變な事を云ふ、と思つたが、通臂仙の云ふ事だからと、それから石猴の好きなやうにして遊ばせて置いた。

石猴は毎日、自由自在に遊ばれるので、花を探るか、木の果を探るかして、時を過して、心配もなければ、煩ひもなく、春も夏も秋も冬も殆んど知らない有様で楽しんで居た。しかし、時の経つのは早いもので、忽ちの間に幾年か過ぎた。それとともに石猴は智慧が明らかになり、氣が強くなつて、「いゝ物を喫べようとするには、いゝ場所を探さねばならぬ。」と思ひついて、晴天になると、山中此處彼處と歩き廻つて、探して居た。

山も平穩ばかりではなかつた。をり／＼大風が吹き、大雨が降つた。と、石猴は何處へも出る事が出来ないで、洞の中に籠つたが、洞は陰氣なので、愁の氣持が何處からともなく湧いて來る。これに仲間が一處に居て、たまには輕蔑もするので、それから苦しみ惱みも生じて來た。

ある日、仲間の年取つた猿猴が一匹死んだ。石猴はそれを見て思はず悲しみの涙をこぼした。
「昨日まで一所に、飲んだり、食べたりして居たのに、どうして、今日は動かなくなつたのだらう。」

「長く生きて居たのだから、血が枯れてかうなつたのだ。」

石猴は驚いた。

「さうすると、自分らも後にはかうなるのだらうか。」

「そんな事はあたりまへだ。」

「これがあたり前なのか。」と石猴は歎息して、それからは楽しい氣分を失つてしまつた。

で、をり／＼他の猿猴に、

「どうかして死ぬと云ふ事がない様にならないものか。」

と問ふと、

「死ぬまいと思ふなら、仙道修行をするより外はない。」

「そんな事があるのか。それなら、みんなさうしたらよかりさうなものだ？」

猿猴どもは笑つた。

「仙道修行は大變な事だ。」

「どうして大變なのだ。」

「仙道修行と言へば一口だが、とても一通りや二通りでは出來ない事だ。」

「どうして出來ない？」

「仙道修行にはその根器がなくてはならないし、福分がなくてはいけない。又いゝ先生に遇はな

ければいけないし、仙道といふものをよく知らなければいけない。こんないろ／＼の難かしい事がある。若し誰でも出来れば、みんな修行をして死なないで済むのだから！」

石猴は何とも云はなかつた。が、仙道といふものを修行してみようといふ心持が起つて、暗々裡にその事を考へて居た。

ある日、風雨が烈しく起つた。山の上に行つて遊ぶことが出来ないで、洞の中で睡つて居ると、正午頃、歌を歌ふ聲が後の洞から響いて來た。「變だ。誰だらう。」とこつそり起き上つて近寄つて聞くと、

「頭頂乾兮脚踏坤、萬千秋又萬千秋、自餐御酒仙桃味、留得長生不老身。」

と歌つて居る。よく見ると、通臂仙が石床の上に寝そべつて長々と歌つて居るのである。石猴は、「あれをみんな仙と云つて居るから、きつと仙道の心得があるのだらう。この語を聞くと、何か、そんな様な氣がする。自分が探し廻らうと思つて居る仙人は、思ひの外目の前に居るのかも知れぬ。」と思つたが、「無闇にそんな事を聞くのも具合がわるい。」とも考へたので、そつと離れて洞へ歸つた。

その中に天氣も直つた。石猴は山の上に出て、珍らしい花や、うまい果物を集めて、盆に盛つて、両手で捧げて後の洞に入つて、通臂仙に捧げた。で跪いて、

「謹んでさし上げます。」

と云ふと、通臂仙は喜んだ。

「はあ御前か。御前は毎日遊び廻つて、いたづらばかりして居るが、今日はどうしたと云ふのだ？」

「いたづらはいたづらですが、眞面目にもなります。どうか分らぬことは御教へ下さい。」
通臂仙は點頭いた。

「御前には些か根器があると思つたが、外のものと違つて、この心持が起つたのは感心なことだ。だが、おれはおれ、御前は御前だ。おれに聞いたつて、何の益もないぞ。」
と云はれても石猴は止めない。

「私は聞いて居りますが、神仙は道を傳へるし、佛菩薩は衆生を濟度しようと思はれる。あなたは仙だから伺つたら分りませう。益のない事はありますまい。」

「いや、御前はまだ知らないのだ。神仙には幾通りもある。一等最上のは、大悟徹底して天地の間の大事にも参加出来るものだ。これは玉帝も一目置かれ、佛も遠慮せられるほどだ。これには人も世も濟ふ事の出来る力がある。その次の一等は、自由自在に遊び歩いて、朝北海地方に居るかと思ふと、暮には蒼梧に行つて居る。凡人から聖人にもなれるし、鐵をも金にする

ことも出来る。これらの仙八になると、傳へるべき道もあり、教もある。おれたちの下等の仙人は、天上から仙薬を偷んだり、仙桃を盗つたりして命をつないで、草木とおなじ様に年を重ねるばかりだ。何の秘密もなければ、日中天に昇る様な手練もない。だから、聞いたつて益がないと云つたのだ。」

「あなたは下等とおつしやいますが、でも仙薬を偷んだり、仙桃を盗つたりする手練があるではありませんか。」

「いや、仙薬を偷んだり、仙桃を盗つたりするのだつて、幾通もある。太上老君の竈を倒したり、西王母の桃の苗を摘んだりするのも、天地の事に通じる程度でなければならぬ。おれたちの様な餘りの桃をかじつたり、雞や、犬の嘗めた残りの薬を食べたりする類は、こぼれ幸を受けたもので、よその御蔭で、自分の事をする手合だ。何の手練があるものか。」

と云ふが、石猴は止めず續けて、

「あなたは何でそんな意氣地のない御話をなさる。天地の間に、仙道修行の道がなければしやうがありません。が、もし實際太上老君の處に仙薬があり、西王母の處に仙桃があれば、手練がなくても偷んだり、盗つたりしようではありませんか。」

通臂仙はこゝろ笑つた。

「一體經を取つて佛になつた孫悟空大聖が、天地の靈氣は竭きる時がない。何百年か後に變つた奴が出て、おれの跡を續ぐのがある。」と云はれたが、御前の大きな心持は、大聖の語に間違のない證據だ。」

石猴は不審に思つた。

「一體、經を取つて佛になつた大聖とは誰の事ですか？」

通臂仙は起き直つて、

「話せば長いし、また迂濶には話されない大事のことだ。御前のいたづら氣持がすっかり直つた時に、精しく話して聞かせてやらう。」

石猴は悟つて、

「御話は分りました。」

と云つて、其處を出て、山に登つて遊び廻つた。

石猴は仙道修行を早くして見たい。が、通臂仙にうるさく云ふと叱られさうなので、辛抱に辛抱を重ねて居た。ところがある日、天氣が勝れて、風が和ぎ日が暖かで鳥が歌ひ、花も果物も山に一杯になつて、紅かつたり、青かつたりして、美しい景色となつた。石猴はこれに催されて堪へ切れず、後の洞に行つて、跪いて通臂仙に、

「今日は山の景色が大變麗はしいのですから、御遊に御出でになつてはどうでせう？」
と云ふと、通臂仙は、

「いや、深切に有難い。行かう。行かう。」

と云つて氣作に立ち上つて、石猴と一所に洞を出て頂上の石の上に座つた。石猴は樹を繞つたり枝に上つたりして、澤山の旨い果物を集めて来て捧げた。通臂仙はいくつか食べて、

「御前は何處から生れて來たか、知つて居るのか。」

と云ふと石猴は、

「私は生來愚かで、前の事は知りません。が、仲間のものは「この石の中から生れて來たものだ。」と云ひますが、本當とも思はれません。父も母もなくつて、どうして石の中から生まれられるのですか。一體、何處からなのですか。」

通臂仙は云ふ。

「それは大事な事だ。御前がさう聞くなれば、おれは黙つても居られまい。全體天地に四大部洲がある。東にあるのが東勝神州、西にあるのが西牛賀洲、南のが南瞻部洲、北のが北鉅盧洲だ。

こゝはその東勝神州の中で、この國は傲來國と云ひ、この山は花果山と云ふのだが、これは十洲の祖おやで清いものが天、濁つたものが地となつた時から立つて居る。乃ち天地開闢の時からあ

る譯だ。この石は、天の周りは三百六十五度だから、高さが三丈六尺五寸、曆に二十四氣あるのだから、周りが二丈四尺、九宮によつて、九つの穴、八卦によつて八つの孔があつて、天地の秀氣を含んで居り、外から月日の光を受けて居る。だから、こゝから秀れたものを産み出すのだ。」

と云ふと、石猴は喜んで、

「そんな具合で、石から生れたのですか。まさか嘘ではありませんまいな。」

「嘘であるものか。經を取つて來た大聖も石から生れたのだ、おれはちゃんと知つて居る。」

「は、あ、それでは大聖はさうして生れたのですか。では御尋ねしますが、その大聖はどう云ふ修業をして、どうして佛になられたのですか。どうか御教へ下さい。」

通臂仙は答へた。

「その大聖は御前と同じ様に、本は小さい小猴であつた。が、伶俐りつりでもあり、手練うでまもあるから、源もとへ源もとへと廻つて、此處の水簾洞を探し當て仲間と一處に居たのだが、他のものが、尊んで主人と仰いだのだ。ところがふと、無常迅速乃ち死と云ふことに思ひ當つた。そこで死といふものを無くする方法は何かと考へて、遂に仙道修行に限ると思つたので、方々に行つて師匠を探し廻つて二三十年もかゝつた。が、たうとういゝ師匠を尋ね當て、仙道を會得した。それから

雲に乗ることも出来る様になり、一飛に十万八千里も飛べるし、七十二様の變化も出来た。で、この山から見える四方の山の妖魔は、みんな恐れ入つて降参して来た。が、それだけでは足らず、水晶宮に行つて、龍王から武器武器を貰ひ受け、森羅殿にも這入つて、猿猴どもの名前を死の帳面から除いてしまつたりした。この事が天に聞えたので、玉皇大帝は驚かれて天兵を十万も出して、この山を圍んで大聖を捕へようとせられたが、大聖は一本の鐵の棒を縦横無盡に振り廻して戦ふので、天兵は東に逃げ、西に隠れて、やつと天に逃げ歸つた。その勇ましかつた様と云つたら、そりやあ、立派とも、何とも云ひ様のない事だつたぞ。」

石猴は喜んで、耳を抓んだり、腮を揉んだりして、

「大した腕前、痛快、痛快。」

とつゞけて云つた。

「が、その様な英雄が、後にどうして和尚になつて經を取りに行つたのでせう。」

「それはかうだ。大聖が天兵を撃退したので、玉帝は仕方がないので、太白金星を使にして、「大聖に許してやるから来い。官職を授ける。」と云つて、招き寄せて、弼馬温といふ馬養の役につけられた。ところが、大聖は「役が低過ぎる。」と云つて天宮から下りてしまつた。で、また仕方がないので、齊天大聖とせられたので、やつと満足した。が、またそこでじつとしては居ら

ず、蟠桃の御酒を偷んで飲んだり、西王母の會を騒がしたり、また御酒を洞の山に持つて来て飲ませたりした。自分も大聖の御氣に入りであつたので、それを澤山飲ませて貰つたので、今まで死なずに居る次第だ。しかし玉帝は大層怒られた。二郎小聖に云ひつけて、梅山の七兄弟を連れて、天の羅、地の羅を布いて大聖を捕へさせようと、御自分も南天門まで御出まして、戦の様子を見られた。

大聖は例の鐵棒を振り廻して、多勢を相手に戦つたので、天地も暗くなり、日月も光がないほどの大戦争となつた。が、李老君がこつそりと金剛琢を抛げ下したので、それに引つかゝつて、大聖は躓かれた。そこを二郎小聖が押へつけたので、大聖はたうとう捕へられた。「いゝ具合だ。」と云ふので、みんなで引つ張つて斬妖臺まで連れて行つて、刀で研つたり斧で打つたりした。が、不思議な事には大聖は傷も受けない。「では」と云ふので、雷に打たせたり、火で焼いたりしたが、何の事もない。で、李老君が「自分に御任せなさい。」と云つて、八卦爐の中に入れて七七四十九日焼いて、「もういゝだらう。」と思ふて爐を開けると、大聖はちやんと生きて居て走り出した。玉帝はもう法が無いので、佛如來に「どうかしてくれ。」と頼まれた。

如來はそれで出て來られて、自分の五つの指を金木水火土の五行山として、大聖を捕へて、

その山の下に壓しつけられた。それも短い間ではない。五百年といふ永い間だ。で、その間に、悪業を悔い改め、善根を重ねさせるやうにされた。ところへ丁度、観音菩薩が出て勸化せられたので、三藏法師に救はれて徒弟となり、その伴をして西方に向つて行つて、眞經を取る助けをした。その途中で、澤山の妖怪どもを降参させて、万千の功行を積んだので、その御蔭で成道して、闘戦勝佛となつて、西方の極樂世界に居られるのだ。これは大聖の法力が大きいからでもあるが、またこの山の石の精氣が強かつたからでもあるのだ。ところが思ひがけなく、今またこの石が、御前を生み出して來たのだ。御前はまさに大聖の嫡流に當る譯だ。大したものだぞ。」

と云ふと石猴は、

「いや、さうは行きませぬまい。この山の精氣がいくら盛んであつても、大聖の時に出盡して、今私が出て來ても、贅疣位のもの。決して大したものではありませんまい。」

「そんな事を云ふ。御前は知らないのだ。天には前後といふものがある。道は續かぬ事はない。大聖はさきの天の氣を受けなので、千百年の前に現はれたのだ。御前は後の天の氣を得たので、千百年の後の今生れたのだ。決して卑下する事はない。」

石猴はすつかり喜んだ。

「あなたの御話によると、確かに私は大聖の後です。が、大聖は名は何といはれたのですか。」

「大聖は姓は『孫』、名は『悟空』。經を取りに行く時、俗名を『行者』と云はれた。また自分で

『齊天大聖』とも云はれた。」

「大聖が姓が『孫』であれば、私も『孫』です。大聖が『悟空』と云はれたのは、靈妙の意味があるのでせう。が、私は愚鈍ですから、さうは行きません。地上でいろ／＼と考へるばかりですから『孫履眞』と申しませう。私は和尚となつて、經を取りにも行きませんから、俗名を用ひるにも及びませんので、それは附けますまい、また大聖が齊天大聖と云はれたのでせうが、私はそれと比べものになりませんから、一等下で、『齊天小聖』と云はうと思ひますが、いかがでせうか。」

通臂仙は笑つた。

「自分でつけた名も理屈がある。しかし、それらは外面的の事だ。大聖の心持、働き様は、よくよく考へて置くべきだ。それでなくては後とは云はれない。」

「ほんとにさうです。『赤からうとすれば朱に近づく。黒からうとすれば、墨に近づく。』ですから、大聖の後を繼がうとすれば、その風を受けなくてはなりません。大聖は仙となり佛となつて、何處かに居られるのでせう。どうか御教へ下さい。行つて御目にかゝりたいのです。」

「それは道理だ。が、仙佛になつた方が凡夫と會はれるものか。」

「仙も佛も人と會はなければ、死んだも同様です。仙や佛になつたところが、何にもならんでは
ありませんか。」

「いや、さうではない。人と會はんといふのではない。凡夫は根器が浅いから、會へないのだ。

御前が本當に大聖に會ひたいといふのは、根本に返るといふ心持だ。それは至極よろしい。が、
まだく早い。その中に時節到來して會ふ事が出来るだらう。」

石猴は大喜びで、繰り返し辭儀をして、

「どうか、早く會へる様にして下さい。」
と頼み込んだ。

一一

石猴が「大聖に會はせてくれ。」と頻りに頼むので、通臂仙はその眞實さを感じて、

「さう云ふならば、いゝ事がある。大聖には急に會へないが、その代りになるべきものがあるか
ら教へよう。前に話した様に大聖が天宮を關がしてから、西天に行つて路々妖怪どもを退治し
たのは、全く一條の如意金箍棒の御蔭だ。が、成道してからは用がないので、後の山の上に置
いて、山を鎮める寶としてある。先づ其處へ連れて行つて、金箍棒を拜ませてやらう。」

「さういふものがあるのですか。はやく言つて下さればいゝのに。」

「いや、まだ晩くはない。」

と通臂仙は云つて、

「さあ行かう。」

立ち上つた。石猴はそれについて行くと、洞の後の山に來た。山はそんなに高くはない。路は四
方から通じては居るが、奥深い處があつて、容易く人には窺へないやうになつて居る。其處へ連
れられて仰ぐと、一條の鐵棒が石の柱の様にすつくと立つて、山の頂の眞中にある。大體二丈位、

それに叶つた碗ほどの太さで、きらと光が出て居る。まことに仙佛の使ふもので凡夫の持つべきものでない氣がする。で、傍まで登つて謹み畏んで、何遍も頭を下げて、また立ち上つて詳しく見た。

「いゝ寶物ですな。一體どの位の重さがあるのです?。」

「それは大變な重みだ。が大聖はこれを燈心草の様に振り廻はされた。だから、天でも地でも叶ふものがなかつたのだ。今御前が大聖の後を繼がうと云ふのだから、これを十分に使ふ氣力がなくてはならない。どうだ動くか、動かぬか、一つやつて見ないか。」

石猴は走り寄つた。両手で棒を抱へ込んで、動かさうとするが、一寸も動かない。有る限りの力を出して、顔を眞赤にして揺つて見たが、やはり動かない。驚いて、

「あゝむづかしい。むづかしい。出来ない。出来ない。これでは神仙にはなれさうにない。」

通臂仙は笑つた。

「あんまり性急だぞ。大聖は永年の修練で動かしたのだ。御前は生れたばかりだ。筋も骨も軟かいのだ。とても今は何も出来ない。急ぐな、急ぐな。ゆつくり修練に修練を重ねろ。時が來ればうまく行く。」

石猴は點頭いて、

「仰せの通りです。修練しませう。」

と云つて、通臂仙に挨拶をして一所に洞に歸つた。

この事があつてから、石猴は遊び廻る事を止めて、たゞ「鐵棒を動かさう。」といふ一心で、氣力の養成に務めたが、鐵棒はその位の力では揺れもしない。「これでは仕方がない。」と思つて、方法を換へて、大きな石をあらへ動かし、こちらへ轉がして、幾度も幾度もやつて、力を養つて見た。

しかし、力は依然として加はらないので、石猴はすっかり失望して、ぼんやりとして、起きて居ても睡つて居る様な心持になつた。通臂仙はそれを見て、

「こりや、どうしたものだ。何と云ふなまけ方だ?。」

と叱ると、石猴は跪いた。

「なまけて居るのではありません。力が出ませんから、ぼんやりして居るのです。」

「馬鹿な事を云ふな。力と云ふものは使はうと思へば出るものだ。力の足らんことはないのだ。

孔子もさう云つて居られる。」

石猴は黙つて居たが、暫くして、

「仰せの通りです。」

と云つたが、何の考へも出なかつた。仕方がないので、また鐵棒の處に行つて、それを摩つて居たが、突然、

「あゝこれだ。これだ。この棒は天地の間の寶だ。大聖は仙人に成つたので、よく使はれたのだ。自分は一つの凡夫に過ぎない。だから動かす事も出来ないのだ。淵に臨んで魚を羨むよりは、退いて網を結ぶ方がいゝ。今は大聖の眞似をして、方々を歩き巡つて、仙道を修行するのが一番だ。さうすればきつといゝ結果があるだらう。さうしよう。さうしよう。」

と考へついたので、後の洞に行つて、通臂仙に、

「私は、これから仙道修行に出ようと思ひます。」

と云ふと、通臂仙は笑つて、

「それはいゝ。留めはしない。が、一度出ると、道は様々だ。間違ない様に本當の道を歩け。」

「私は歩ける方に歩かうと思ひます。が、間違はない積りです。」

「それもいゝ。しかしちゃんど歸つて來い。」

「行く路があれば歸る道がある筈です。きつと歸りますから、それは御安心下さい。しかし、世間にはどんな道があるのでせう。」

通臂仙は云ふ。

「世間には三つの教がある。儒、釋、道がそれだ。儒は孔仲尼の世を治める教だ。この理窟はいが、些か迂濶だ。「天地の間にある人には、生があると共に、きつと死がある。これに従ふのが正當だ。長生不死と云ふのは、天理に逆らふものだ。」と云ふ。その人々は詩書を學んで、文を作つて、外面は仁義であるが、内實は奸惡で貪慾だ。これでは仙道に道入れる譯はない。だからこの道ではいけない。どうしても外に求めなければならぬ。それは釋道二教の外はない。」

「では、外の二教に就いて學びましょう。」

と云つて、通臂仙に禮を云つて出て來た。

石猴いしこうはこれから大聖の故事に倣つて、木を集めて筏を作つた。竹を伐つて竿にして、仲の好い猿どもをな夾んで、海の中まで押し出して貰ひ、また大聖の時分に持つて居た舊い著物や冠を取り出して、著たり冠つたりした。また果物や乾した糧食を身に著けた。で、改めて通臂仙や、他の猿どもに別を告げて、筏に乗つて、風のまにまに水面を走つた。その中に思ひがけなく東南の風が強く吹き出した。數月たぬ中に北鉦蘆洲に筏は吹き寄せられた。この洲は非常に寒い處で獸も稀れだし、棲む人も少ないし、一番貴い帝王も禽とりの形、獸けものの様で怪物同様である。石猴いしこうはまだ何處だか知らなかつたが、ともかくも筏を汀につけて、陸に上つて二十里ばかり行つて見たが、城も人もない。途中入らしいものに逢つたが、妖物まじものだか、鬼だか分らない。話しかけても話も通

じない。「こんな處では、仙も佛もありはしまい。とんだ處へ来たものだ。外を探さなければいけない。」と思つたので、また汀に歸つて筏に乗つたが、今度は東北の風が出て来たので、それに吹かれて居ると、西牛賀洲に著いた。

西牛賀洲は、文化的な處で、中國同様の有様だ。岸に上つて見ると、人家も多く、町も繁華だ。喜んで、「こゝにはきつと神仙が居るだらう。」と思つて、其處彼處と探し廻つて居ると、逢つた人が、「仙人を御探したさるか。こゝから西南へ六十里に青龍山といふのがある。その山の上に、白虎洞といふのがある。その參同觀に悟真祖と云ふのが居る。『道法が高い。』と云はれて居る。これが仙人といふものだらう。そこへ行つて尋ねて見るがいゝ。」と云つたので、大喜びで、

「仕合はせ、仕合はせ、たうとう尋ね當てた。」

と眞直に六十里行くと、果して一座の山がある。峯と峯とが廻りあひ、樹と樹とが茂り合つて、一條の蒼い龍が蟠つた様である。山の上に登り著いて見おろすと白い石がある。その一方が高く、一方が低く、ちようつと一匹の白い虎が蹲つて居る様である。「こゝが白虎洞だな。」と思つて、上から降つて、白い石の前に行つて看ると、洞の門がある。その中には一つの宮殿があつて、高い臺、彩色した棟、甚だ立派だ。

そばに行つて見ると、「參同觀」の三字が横に書いてある。

「うまく来た。」

門の扉は開いて居るが、始めてだから、うつかり這入りも出来ない。暫く待つて居たが、出て来る人もない。で、そろり／＼と這入つて見ると、また山門にぶつつかつた。丁度其處へ一人の道士が出て来た。

道士は石猴を見た。

「御前はどうしたものだ。こゝに何か用があるのか。」

石猴は急いで、禮をして、

「私は仙道を志して居るもので御座います。『悟真祖師が今の神仙であられる。』と聞きましたので、万里もあちらから慕つて参りました。どうぞ御弟子にして戴きたう存じます。」

と云ふと、道士は見上げ見下して、

「仙道を修行するには、天性聰明でなければならぬ。御前はまだ獸の形をして居る。どうして修行などをしようと思つたのか。」

「いや、猴と人とは違ひますが、天性の聰明さには、變りはありません。どうか悟真祖師に御逢はせ下さい。そこで申上げたい事がございます。」

道士は笑つた。

「何處から來た田舎者だ。とんだ性急な奴だ。祖師は菩提園に心を靜めて性を養つて居られる。國王が、二度も三度も頼まれても中々逢はれない。逢はれても一度位のものだ。御前が修行の志があれば、入門してそれからの事だ。」

石猴がすぐ云ふ。

「ではどうすれば、いゝのですか。」

「初めて入門するものは、先づ定心堂に這入つて心を靜めなければならぬ。それから養氣堂に移つて息を調へなければならぬ。それですつかり修行をして、精神が上から下まで衝き通すやうになつて、始めて祖師に御逢ひが出来るのだ。この時には、妄想などといふものはすつかりなくなつて居るのだ。」

「すぐ仙道を成就するのが本意でございますが、さう出来なければゆつくりでもよろしうございます。が、定心堂と申すのは、何處でございます。どうか御教へ下さい。そこで定心致しませうから。」

「それならば、おれについて來い。」

と云つて先に立つ。石猴はそれについて行きながら、多分廊下か部屋か小屋位であらうと思つて

居ると、意外にも、大殿の眞中、靈臺の上で、八寶で造り上げた立派な宮殿だ。道士が歩み寄つて、門を開けて這入り込んだので、石猴も立派さに驚きつゝ進んで行くのを見て、道士は手早く門を締めてしまつた。

石猴は、暗くはなつたが、「何處にか窓か、戸があるであらう。」と考へて見廻すが、堂にはすこしの孔もなく隙もない。眞暗で方角も分らない。探つて見ると、ぐるりは壁ばかりで、なにも手に當らない。出ようとするが、門のある處も知れない。どうもかうも法がないので、床に座つて考へてみる。「堂が定心といふのだから、却つて眞暗にしてあるのだらう。自分もこゝで定心してみよう。一念を清めて少しの塵のない様にしてみよう。明い暗いは、何の關はるべきでない。」と思つて、じつと眼を閉ちて息をこらすと、暫くして心がすつかり靜まつた。で、眼を開けて見ると、部屋中が明るくなつた。石猴は喜んで顔を摩でつゝ、

「こんな光が心の中にあつたのだ。古語に、『虛室白を生ず。』と云つて居るが、まさにその通りだ。」

と思つた。が、そればかりでなく、時が猶經つと、光の中に靈氣があつて、何でも彼でもすべて見える様になつた。

石猴はいよゝゝ喜んで居ると、一聲響いて門の扉が開いた。道士が外から、

「どうだ、困つたか。」

石猴はゆつくりと歩いて出て来て、

「ちつとも困りませんでした。」

「中は眞暗だつたか。」

「心が明るいのですから、暗くはありませんでした。」

「さうか。さう心が定まつたら、養氣堂に來い。」

「参ります。参ります。」

と道士について行く。

養氣堂は山の上にある。見ると一間の家であるが、中は重なつたり、曲つたりして、道も分らない様だ。急いでふりかへつた時には、すでに道士は出てしまつて、大門は確かりと締つて居て、たゞ門の上の二つの大孔ばかりがあいて居る。

石猴は、もはや定心が出來て居るので、そこへ座つて居ると、陰と陽とが、棧のやうに、出たり這入つたりする。子、午、卯、酉の四時になると、陰陽往來の中に、上氣が下り、下氣が昇る。その中に思はず全身がゆるやかに、快くなり、軽々となつて來た。ところへ、道士が門を開けた。

「どうだ。もう出て來い。」

石猴は、にこ／＼して出て來た。

「いゝ氣持です。どうして出るのですか。」

「こゝで氣は十分調へられる。もう養はなくてもいゝ。」

石猴は云ふ。

「それならば、もう祖師に御導き下さつてもいゝではございませんか。」

道士は、初めは定心と養氣とをさせて見た。「難しい事だから、とても出來ない。」と思つて居たところが、それを容易く仕遂げたので、妬ましい氣持が急に起つて來た。

「御前は來て長くなつたが、何處から來たとも聞かんだ。一體何といふ姓で、何といふ名だ。」石猴は答へて、

「私は東勝神洲の傲來國花果山のものでございまして、姓は孫、名は履眞、昔、天宮を闢がしました齊天大聖孫悟空の嫡流でございます。悟空は道行が高くて、今は成道して戰鬥勝佛となつて居ます。私はその名を落すのが心配でございますから、仙道を修行して、家を繼がうと思ふのでございます。」

道士は、石猴が自分よりもえらくなりさうなので、妬ましくなつて堪らなくなつた。

「御前は變な形をして居るが、聞けば、來歴のあるものだ。祖師から親しく道法を聞いたらすぐ悟れるだらう。が、今祖師は嬰兒産育の事にかゝつて、人には逢はれない。よく辛抱して居れば、自然逢へる時が來るだらう。」

「それは有難い事でございます。何時までも辛抱して御待ち致します。」
と石猴は答へて、時の來るのを待った。

石猴は祖師には逢へず、また様子も分らずに幾日も居たのであつたが、ある日、山の上で、あちこち見わたすと、後の花園の中に年寄りの女が、若い女を連れて花を見て遊んで居る。紅いもの、碧いものを著て、しやなり／＼と歩くさまはまことに美しい。石猴は驚いて、「出家のところに、どうしてこんなものが居るのだらう。」と思ひつゝ、山から廻つて、花園の門の外まで來て窺ふと、一人の小僧が溪の水で菜を洗つて居る。それに聲をかけて、

「もしもし御小僧さん。この花園の中に女が居るが、誰の家の方ですか。」
小僧は笑つた。

「御前さん。道教修行をして居ながら、そんな事が分らないのかね。」

「いや、始めての事ですから何も分りません。」

「仙道修行の家では、嬰兒の事が大切なのだ。」

と云つて菜を提げて行つてしまつた。

石猴はそれを聞いて、「これは變だ。人に逢はない様にして、女を養つて居る。正當の仙道ではあるまい。邪道であらう。そつと窺つてやれ。」と夜が更けてから、輕々と牆を越した。それは猿の元來の手なみで何でもない事であつた。屋の上から傳はつて奥殿の菩提閣まで行つて、窓の間から、そつとのぞくと、燭臺が二つあつて、紅い蠟燭がともされて居る。そこに瘦せた老道士が、若い女を傍に寄せて酒を飲んで居る。その傍に一人の老婆が居て、何か冗談を云つて居る。石猴はすつかり驚いた。「思つた通り邪道だ。こんな處で骨を折つたのは飛んだ事だつた。すぐ逃げよう。」と決心した。夜が明けると、道士には挨拶もせず、山を下つてしまつた。

石猴は道々、「この祖師はこんな有名なのに、飛んだ贖物だつた。この外のものも云ふに足るまい。こんな處に居るよりは、外の國に行つて探してみよう。」と思ひつゝ海岸に出て、また本の通りに筏を組んで、それに乗つたところが、丁度西北の風が吹いたので、南贍部洲に着いた。

石猴は參同觀で、定心養氣は出來たので、前の如くぐす／＼せず、さつさといゝ氣持で、州を過ぎ、縣を通つて、仙道の人を探し廻つた。

元來、南贍部洲は、孔夫子の教によつて、よく治まつて居るが、どういふものか珍しいものが好きで、却つて佛教を信仰して、有名な山や景色のいゝ處にはきつと佛寺があり、黒い著物を

「これは不思議。」と思ふと、口では云はぬが仙道の秘訣が、神髓が、機密が、甘露が注ぐ如くしみく、と身に泌み通りつゝ傳はつて来る。まことに一寸の間に、石猴いしざるは凡夫から離れて聖人の域に這入る様な氣持になつたと思ふと、年寄の猿は、つと身に逼つた刹那、全く自分と一つになつた。

石猴いしざるは大いに悟つて、

「あゝ本當の師匠は心の中にあつたのだ。方々駆け廻つたが、全くつまらない事をした。あゝ有難い。」

と云つたが、この時、身體は軽くなり、氣力も加はつて、七十二の變化も出来る様な氣がして、心持の朗らかさは、何とも云へない。

「これはかうしては居られない。出て行つて、實際力があるか無いか、試めしてみよう。」と一飛びすると、身は樂々と洞の中から外に出て居た。

二二

石猴いしざるは無漏洞の中で、自分の心の中の本當の師匠から仙道の傳授を得たので、神通力を使つて、洞の外に飛び出した。この時はちやうど、明方で、太陽が紅く昇り初めて居た。石猴いしざるは勇んで鐵棒の前に立つて、兩袖を捲くり上げて、口の中で、

「大聖さま、どうか、私のために、一臂の力を御貸し下さい。もう一度花果山の威光を輝かし、水簾洞の事業を擴げようと思ひますから。」

と云ひ終つて、兩手で鐵棒を握つて擧げようとする、不思議な事には、動きさうにもなかつた鐵棒が、軽々と手に随つて擧がつて来るではないか。

石猴いしざるは大喜びで、取り擧げた鐵棒を、左に五遍、右に五遍、力を込めて振り廻はして見た。初めは馴れないので、ぎこちない處があつたが、段々熟して来ると、極めて樂々と使へた。

しかし、山は低い上に、邪魔物があるので、十分に使へない。そこで雲に乗る秘訣を出して、脚で地を蹴上げると、身體はすでに中天にあつた。そこで鐵棒を取り直して、縦横十文字に振り廻はす。あたりに遮るものがないので、振れるだけ振り、廻はせるだけ廻はす。ちやうど一條の

龍が天上で、くるくるとうねりつゝ遊ぶ様である。

山の猿猴どもは、石猴が鐵棒を廻はして居るとは思ひも懸けず、たゞ「中天に霞が凝つて一團となつて、光を發しつゝ廻るのだ。」と考へたので、「これは不思議だ。」と通臂仙の處へ知らせに行く。通臂仙もまた不思議に思つて、一處になつて見物に來た。

「何だらう。」

「どうしたのだらう。」

と、みんな云ひ合つたが分らない。

「大方、神仙が御通りになるのだらう。」

と云ひつゝ永い間見て居たところへ、石猴は上から見下しつゝ降つて來る。しかも鐵棒を振り廻はしながら來るので、猿猴どもはびつくりして、

「あゝ孫小聖が棒を振廻はして居たのだ。驚いた。驚いた。」

と云ふと、石猴は得意になつて、棒の手を止めて、山の前に立つた。が、先づ通臂仙に屈んで辭儀をして、

「どうです。私の棒の廻はし具合は。大聖のと比べてどうですか。」

と云ふと、通臂仙は、急いで起きさせた。

「御前はもはや仙道を得たのだ。そんなに叮嚀に禮をするに及ばない。」

「いや、これは全くあなたの御蔭です。決して忘れはしません。」

「いや、すつかり驚いた。御前は何處で修行をして來たのだ？ 御前の棒の使ひ方は、大聖と全く同じだ。」

石猴はにくくした。

「あなたの御眼は高い。私のこの棒法は、洞の中で、心から心に大聖が傳へられたのです。」

と聞くと、通臂仙は、

「さうだらう。さうだらう。この山は大聖が成佛されてから、主となるものがない。子孫は大勢居るが、取締りがついてない。御前は大聖から傳授を受けたのだから、御前がこの山の王となるべきだ。」

石猴は驚いた。

「いや、あなたがいらつしやるのだ。私がどうして、そんなものになれるのですか。」

「そりやいかん。御前に限る。おれは、御前も知つて居る通り、世を離れたものだ。どうして王になれるものか。御前に限る。謙遜するには及ばない。」

と通臂仙は云つて、猿猴どもに、

「新大王に御挨拶を申上げろ。」

と云ふと、猿猴どもは鐵棒の使ひ具合で、神通力のあることを知つたので、敬服しないものはない。で、こゝで始めて臣下としての禮を行つて、石猴を君と仰ぐこととした。

禮が済むと、猿猴どもは散々になつて、果物を摘み酒を備へて、王のために祝の宴會を開いた。

これで、石猴は新王となつたのであるが、通臂仙は客分として、尊敬した。酒宴が酣になつた時、通臂仙は云ふ。

「大王、この鐵棒は手におへますか。」

石猴は答へて、

「使ひ具合は至極よろしい。が、收まりがつかないのが缺點です。」

通臂仙は云ふ。

「大王はまだ御存じありますまいが、この鐵棒は、大禹が天河の底を極めた時に使つた神珍鐵で、一名を如意金箍棒と云ふものです。ですから、大きくしようと思へば大きくなり、小さくしようとすれば小さくもなるものです。大聖は繡縫針のやうに小さくして、耳の中にしまつて置かれて、用のある時「大きくなれ。」といふと急に大きくなつて、その一條の金箍棒となつたのです。」

石猴は嬉しくつて堪らず、通臂仙に繰返し辭儀をして、

「御教へ、まことに、まことに、有り難うございます。」と云つた。

山はこれから無事であつた。石猴は鐵棒を提げては各處を巡つた。ある日巡つて東の海岸に出て來た。見ると、大濤が湧き起つて、魚や龍が出たり隠れたりして遊んで居る。

「佛家では龍を鉢の中で養ふ。それを『拳龍』と云ふと聞いて居る。また英雄豪傑は『力能く龍を屠つて、その肝で馳走をつくる。』と聞いて居る。自分は道法を得て居るのだから、捕へて鉢の中で飼つてみよう。」

と金箍棒に向つて、

「變れ。」

といふと、一本の釣竿となり、万丈の釣糸となつた。そこで、自分の毛を一本抜いて氣を吹きかけて見ると、一つの大きな珠となつた。それを糸の尖につけて、輕々と波の中に投げ込んだ。

珠が水の中に這入ると、その光がきら／＼とあたりを照すので、珠を好む小龍子や龍孫が、群がつかけて來て、吞まうとし、奪はうとして、大騒ぎをする。それをすぐに釣り上げた。巡水夜叉がそれを見て、慌て、水晶宮に駆け込んだ。

「大王、大王、大變です。」

老龍王は驚いて、

「『大變』とは何だ。」

「いや、海岸に一人の仙人が、何處から來たか、龍を釣つて居るんです。大殿下、小殿下、七八匹釣り上げられました。」

「そりや大變だ。どんな奴だ。何處から來たか。」

「何處からか分りませんが、顔は雷のやう、目は火のやう、瞳は金色で、あの前年兵器を借りに來た孫大聖とよく似て居て、それで若いのです。珠を餌にしてどしどし釣り上げるんです。」

老龍王は色を失つた。

「こりやあ、どうしたらよからう。」

「鯉將軍に、蝦兵蟹將を率ゐさせて、大波を立たせて溺れさせたらいいでせう。」

老龍王は考へた。

「さうは行くまい。別の奴ならばいいが、あの雷の口、火の目、金の瞳の孫大聖に似た奴なら、

とても手には合ふまい。出て行つてなだめるより外に仕方があるまい。」

と云つて、多数の水兵を連れて雲の浪の中に居ながら、岸に近づいて、

「何處の仙人か、御名前を伺ひたい。」

といふと、石猴はにこ／＼した。

「云はなければ分らない。自分は昔、東勝神州傲來國花果山水簾洞に居つて、天宮を鬧がし、玉帝から弼馬溫に封じられ、後に齊天大聖になり、今は成佛して鬪戰勝佛になつた孫悟空の後で、新に成道して、まだ職は受けないが、家は續いで、『齊天小聖孫履眞』といふものだ。」

「齊天大聖の後と云はれ、ば、自分は昔、大聖と一面の交があつた。大聖に自分は一條の天河の底を定める神珍鐵、又の名如意金箍棒を贈つたが、大聖成佛の後、この寶はどうなつたか。」

石猴は笑つた。

「あなたは疑深いと見える。自分は贗物ではない。確かに悟空の後だ。その證據は今、御語の棒だ。」

と云つて、釣竿釣糸を取り收めると、もとの通りの一條の金箍棒となつた。それを握りかへして振り廻はし、打ち返して、老龍王の面前に衝き出して、

「この棒が金箍棒であるか、ないか。」

と云ふと、老龍王はびつくりして、思はずあとじさりをして、恭々しく、

「確かに金箍棒。それに違ひはありません。どうぞ御收め下さい。で私の處へ御出下さい。茶を

差上げたうございます。」

石猴は、

「伺ひます。失禮は御許し下さい。」

と釣つたのを返すと、老龍王は前に立つて水路を開かしめる。鯉將軍も、蝦兵も、蟹將も残らず驚いて案内する。石猴は鐵棒を提げて、意氣揚々と水晶宮に入り込んだ。

老龍王は酒を出して饗應する。その中に珍らしい馳走の品々が前に並び、美妙な音楽も聞えて来る。西南北の龍王を迎へにやつたので、皆集まつて来て相手をする。龍王の一人一人が、

「もとの大聖は私とは舊縁があります。今後もよろしく願ひます。」

「私は大聖と親交があります。何か寶が御入用ならば差上げます。」

と云つて機嫌を取るので、石猴はすつかり喜んで、

「舊縁があり、親交がおありになる上に、また自分に厚情を賜はることはまことに忝ない。以後よろしく願ひ上げます。しかしまた来て、御邪魔は致しません。」

と云つて立ち上つて、海から出て、花果山に歸つて來た。龍王たちは、驚いたり、喜んだりした。老龍王は、

「もしあれと戦つたものなら、大變な事になつただらう。」

と云つて、これから時々進物を贈つた。

石猴は龍王に勝つたのであつたが、猶考へて見ると、「海では龍王が王だが、山では虎が君だ。龍は考があるから、自分をよく待遇して交を結んだが、虎はたゞ亂暴で、人に逢へばすぐ喫はうとする。それに山の中に居る。山は自分らの仲間が出たり這入つたりする處だ。これを處分しなければ、こちらのものが食はれてしまう。さうなると、自分の威光はなくなり、體面は丸つぶれになる。どうしてもやつつけなければならぬ。」と思つて、鐵棒を提げて西の山に這入つて虎を探し廻つた。

全體虎は惡人と同様で、禮儀などは全く知らない。柔らかさうな人が居ればいくらでも喫う。たゞ虎を打つた馮婦だとか、虎を射つた李廣などのやうなものは怖がるが、他のものは何とも思つて居ない。ところへ石猴が通りかゝつた。饑ゑた虎は大喜びで、「今日は何と云ふ日だ？ 十分に食へる。」と思つて忙いで林の中に隠れてねらつて居る前を、石猴は、威勢を見せつゝ鐵棒を持つて、あちらこちらと虎を求めて歩いて來る。虎は智慧はないが、しかし死ぬるのは怖い。石猴の威風に推されて身を現はし得ない。ぐずぐずして居たが、たうとう穴に逃げ歸つて、外の虎どもに、

「山にやつて來る人があるぞ。」

と云ふと、他のものは、

「やつて来たら食つたらいいではないか。一々云ひに来なくてもいい。」
と云ふ。

「いや、さうは行かない。變な顔付をして居るから、普通の奴ではない。食へさうにない奴だ。」
と尾を搖がしつゝ云ふ。

「どんな奴にしろ、自分らの目にかゝつたからには、許されるものか。」

と七八匹の虎が、一齊に咆えたつて飛び出した。石猴はそれを見て喜んで、

「畜生奴、出て来たか。探がして居た處だ。」

と鐵棒を振り上げる。虎は牙を張り爪を舞はして、四面から飛びかゝつて来る。

「畜生、打ち殺すぞ。」

すばやく身をかはしながら、風車の様に鐵棒を振り廻はすと、虎どもは避け兼ねて、牙は砕け、爪は割け、骨は折れ、皮は破れて、東に西に逃げ散つた。その中に腮おこを打たれて動けなくなつた年の寄つた黄なのが一匹居る。石猴が鐵棒を打ち下ろさうとするのを見て、地に伏さり首を動かして「許してくれ。」といふ様子をする。石猴は打ち下し兼ねて、

「畜生、生命が惜しいか。」

と云ふと虎は點頭うなづく。

「生命が惜しければ、花果山に來い。その右の山に隙間があるから、人が來て物を偷ぬすまない様に番をしろ。」

一本の毛を抜いて鐵の鎖に變せさせて、虎の頭にしばりつけ、羊を牽張る様に牽いて山に歸つて來て、別の鐵の索なはを出して毛に代へて、大きな石の穴に通して、縛つないで、そこで番をさせた。虎は恐れ入つて云ふ通りになつた。

石猴いしざるは龍を降し、虎を伏してから、毎日いゝ機嫌で居たが、ふと通臂仙に、

「自分は大聖から傳へられた道法で、ともかくも一人の神仙になつた譯だが、神仙と云ふものは陰陽の道に達し、五行の理を明らかにすべきであらうが、自分は全く何も知らない。もし上八洞、中八洞、下八洞の仙人たちが、生死の理を云ひ、善惡の事を論ずる時は一言も返答する事が出來ない。質物ごまかし物として、馬鹿にされるであらう。それが怖ろしいのだ。」

通臂仙は笑つた。

「また謙遜をなさる。一事が萬事です。道理の分らない神仙のある筈はない。あなたは天に通じ、地に徹こほるほどの手並があるから、自然に、過去も未來も見定める見識がある。」

「さうは行かない。いろ／＼の變化は自分には出來るが、深い理窟は全く分らない。」

通臂仙は云ふ。

「分らないのも悪くはない。しかし周囲まわりのものが、彼かれは云ふと都合が悪い。あなたが古今に通じ
る本當の仙人にならうと思はれるならば、生死の問題はよくよく究めねばならぬ事です。」

「自分も、もとからさう思つて居る。だが、誰に尋ねたらいゝか分らない。」

通臂仙は答へて、

「それはむづかしくはありません。木には根がある。水には源がある。善悪や生死の問題は、闍
羅天子に聞くに越した事はない。そこに根があり、源があるのですから。」

石猴いしこうは喜んだ。

「御話ごわは道理だ。早速行つて聞いて見よう。」

と鐵棒を取り出して氣を靜めて、一飛びして冥途に這入つた。と若い鬼が見て、急いで行手に立
ち塞がつた。

「何の妖物あやものだ。むやみに這入つて來るのは。」

石猴いしこうは笑つた。

「譯わけの分らぬ奴やつ。おれが妖物あやものなら、貴様は何だ。まさか善人とは云はれまい。逃げるな、一棒を
食らはすぞ。」

と棒を取り直して一振り振ると、鬼はびつくりして「あつ」と叫ぶと、年寄りの鬼どもが見て、
驚いて急いで森羅殿に駆け込んで、十殿閻君に、

「大變、大變。何千年前かに、來た雷の口火の眼、金の瞳の惡神がまた來ましたぞ。」

秦廣王が、

「馬鹿を云ふな。そんな奴は孫悟空だが、あれは成道して佛の位に上つて居ると云ふ。それが來
て亂暴をする事があるものか。間違ひに相違ない。」

鬼どもが聲を整へて、

「いや、それです。それです。間違つて居ません。間違ひません。」

といふので、十王は譯が分らず。

「ともかくも出て見よう。」

と云つて容かたちを正して殿から出て來た。石猴いしこうは、や階の處まで來て居る。十王は、

「さあ、御通り下さい。」

と云つて、殿上に上らして主客の席を定めて座すわると、秦廣王が先づ口を開いて、

「あなたの御顔は、昔の齊天大聖と違ひませんが、大聖はもはや西方極樂に佛となつて居られる
と聞いて居りますのに、どんな御用でわざわざ此處まで御出になりました。」

石猴は云ふ。

「御眼力のほど恐れ入ります。佛に成つた齊天大聖は私の祖で、私はその嫡流。私の名は「履眞」と申します。祖の教を受けることが出来ず。家の名を墜してはと存じまして、勉強して仙道を些か學んで、生命を保つて居るばかりでございませぬ。全く師もなく、友もないので、分らぬ事が胸に満ちて居ります。どうか祖の顔を立てると思召して、些か教へて戴きたいと存じて参りました。」

十王は一齊に云ふ。

「それは御間違です。道の至極は造化の秘するところで、今まで、仙人も聖人も、まだ發明して居りませぬ。佛は花を拈つて微笑されましたが、全く謎同様で、よくは分りませぬ。況んや、われ／＼冥官どもは、氣が淺薄ですから、たゞ帳簿の上の事ばかり扱つて居ます。どうして御教へなど出来るものですか。」

石猴は云ふ。

「あなた方はあまりに御謙遜なさる。俗に「聃す事は僕に同へ。織る事は婢に問へ。」と云つて居ります。外はどうかは知りませんが、生死はあなた方の掌つて居られる事、善惡もまたあなた方の分たれる事ですから、これに就いて御尋ね致したいのです。が、どうでせうか。先づ、そ

れで御尋ねしたいのは、第一に顔回の様な賢人が若死をし、盜賊の如き惡人が長生をするのはどう云ふ譯でせうか。」

秦廣王が答へて、

「あなたが、わざ／＼御尋ね下さるので、憚らず愚見を申し上げますが、大體を云ひますと、長生と若死とは、善と惡とに本づきます。乃ち、善人は長生をし、惡人は若死をします。が細かに申しますと、長命と短命とは一々違つて居ます。身體が丈夫であるから長命で、反對に弱ければ、短命であります。不養生をするから短命で、養生をするから長命である事もあります。また天の惠を受けるから長命で、天の罰を受けるので短命なものもあります。顔回が若死をし、盜賊が長生をしたのは體質にもよります。後の世にいゝ名を流すのと、悪い名を残すといふ善惡もあります。幸運に乗ずると、不運で苦しむといふ善惡もあります。顔回はいゝ名を流し、盜賊は悪い名を残して居るのはそれです。ですから、こゝでは一面ばかりではなく、他面をいろ／＼と考へて判斷して居ります。」

石猴は云ふ。

「大體と細部との御話はよく分りました。乃ち、常法と變法とあることも了解しました。この變法は一々別ですから、まあこれはさし措いて、常法の方を御尋ねいたしますが、人の長命と短

命と、その人の行の善悪に本づくのでせうか、それともあなた方が臨時にその善悪を斟酌して、
「これは長命、これは短命。」と御極めになるのでせうか。または、前以て善悪を御存じで、
善だから長命、悪だから短命と御定めになるのでせうか。」

秦廣王が答へて、

「いや、人の生命は、南斗北斗の星に關係します。南斗星は生きる方、北斗星は死ぬ方を定めま
す。こゝでは、その年月を考へて、その時々、その人々を招き寄せて、その通りに扱ふに過ぎ
ません。決して、時を間違へたり、臨時に斟酌することは致しません。」

石猴は云ふ。

「さう承りますと、人の生死は、皆極まつた数があるのですね。善をすれば長命、悪をすれば短
命とは云ひながら、さう極まつて居るところから考へると、長命、短命、善悪が全く轉倒して、
善をしたつて、悪をしたつて、長命にも、短命にもならない結果となりますね。さうすれば、
善人だつて敬ふにも足らず、悪人だつて懲らすにも當らない譯となりますね。が、生死の事が
ちやんとわかつてをれば、役人一人、帳簿に照らし合せて、死ぬ人をこゝに招き寄せれば十
分で、あなた方のやうな方々が、骨を折つて判断なさるにも及びますまし、また罪人に極刑
を施して、應報の恐ろしさを見せるにも當りますまい。」

と云ふと、十王は各々顔を見合はして言ふべき語がない。思はず賛嘆して、

「あなたの御論は、古今未發で、私どもはたゞ慙ぢ入るばかりです。上帝の御定めにもまだ足り
ない處がある譯です。」

「では、これは置きますが、今の世間の官吏どもは、貪慾なものが多く、清廉なものが少なく
仕方がありません。こゝでは、これらの裁判もさねるのでせうが、世間のやうにいろいろな弊
害はありますまいな。」

十王は云ふ。

「私たちはこの位地に居りますから、私事は一切致しません。しかし、才も力も足りませんから、
或は誤があるかも知れませんが、御迷惑かも知れませんが、こゝにいろいろ事件があります。こ
れをあなた一つ判決して見て下さいませんか。もし私どもに間違があれば、指摘して戴きます
といふ幸で、改めますから。」

石猴は斷らずに、

「あなた方が御任せになれば、不十分でせうが、一つやつて見ませう。」

十王が避けると、その眞中の席に石猴は座り込んだ。十王は兩側に居る部下に命じて、いろい
ろの文書を取り出させて机の上に置いた。石猴は初からは開けず、中途の一本を抜き出して見る

と、水族の生死の帳簿であつた。手に任せて真中から抜き出すと、「大唐の貞觀十三年の涇河の龍王が、唐の太宗が『救けてやらう。』と云ひながら、反つて自分を殺したのは不當だ。」といふ訟狀であつた。それは龍王が雨を降らす時を間違へたので、斬られ様としたのを、太宗が『許して貰つてやらう。』と請けあひながら、臣下の魏徵に誤つて殺させたと云ふ事件である。が、その後には判決文があつて、

「龍王がむやみに雨を降らすべき時を改め、且つ雨の量を減じたのは、その罪まさに誅すべきである。唐の太宗が夢中で『救つてやらう。』と許したのに、臣下の首斬役人の魏徵が殺したのは上帝の命を奉じたからだ。この事は太宗は全く知られなかつたのだ。それをどうして死なせる事が出来よう？ 全體、龍王に就いては、北斗星がちやんと『首斬役人の魏徵の手で死ぬ。』と書いて居る。さうすれば、殺されたつて當然ではないか。妄りに訴へるのは間違つて居る。」

太宗は陽間に歸すべきである。」と書いてある。石猴はこれを見て、

「この一案のあなた方の判決は、まさに情理に適つて居る。が、たゞ一つ感服しない事がある。」と云ふ。

以前、唐の太宗の時に、長安に袁守誠といふ賣卜者が居た。これが晴雨を卜ふのが上手で、漁

師はこの人の教によつて、魚を取つて居た。龍王の手下がそれを聞いて龍王に訴へると、龍王は「それでは、おれの眷屬がみんな捉へられてしまふ。」と怒つて、袁守誠の處へ行つて明日の天氣を問ふと、袁守誠は、

「辰に雲が出る。巳に雷が鳴る。午に雨が降る。未に止む。雨量は三尺三寸零四十八點だ。」と云ふ。龍王は驚いて、歸つて部下を集めた。

「あの賣卜者は大變だ。よく知つて居る。あれを間違はしてやれ。」

と云ふ。この時、玉帝から龍王に「雨を降せ。」と云ふ使令があつたが、袁守誠の云つた通りであつた。龍王はこれをわざと間違はせて、巳に雲を布き、午に雷を鳴らせ、未に雨を降らせ、申に止ませて、雨量を三尺零四十點とした。玉帝は怒られた。

「龍王は飛んだ奴だ。魏徵に斬らせろ。」

と云はれる。龍王は太宗皇帝の夢に現はれて、

「私はあなたの臣下の魏徵に斬られます。どうぞ御救け下さい。」と頼むと、太宗はすぐ承知された。で、太宗は魏徵を外に出さぬ様にと、朝廷に出たのを留めて、養を打たれる。と、魏徵は不意に居睡を初めた。「變だな。」と思つて居られる處へ、一人の役人が龍の頭を持つて來た。

「今この首が空から落ちました。不思議ですから、御覽に入れます。」と奏する。魏徴は眠から醒めて、それを見て、

「玉帝の命令で、龍を今の間に夢で斬つて参りました。これはその首でございます。」と言上するので、太宗はびつくりされた。

その夜、龍王が夢に現はれて、太宗に、

「約束をして置きながら、救けて下されないのは、どう云ふ事です？ 閻魔の處へ行つて、理非の裁判をして貰ひませう。」

と引立てると思ふと、太宗は崩去されんとした。その時、魏徴は、

「これを判官の崔珏に御渡し下さい。きつと御救け申し上げますから。」と云つて手紙を出した。

太宗は冥途に行かれた。と閻魔は、

「龍王は魏徴の手にかゝると、こちらの帳面にありますから、斬られるのは當然です。龍王がいゝるゝ訟へるものですから、御迎へした次第です。」と云ふ。

「しかし、御壽命はどうか。」

と崔珏を呼んで檢べさせる。と、「二十三年」となつて居る。崔珏は、太宗からすでに魏徴の手紙を貰つて居るので、驚いて、帳面の上の字に、二畫を加へて「三」として「三十三年」として、王に見せると、

「では御歸り下さい。」

と云つて、崔珏等に送らせると思ふと、蘇へられたのであつた。その時の龍王の訟狀が出、また今その判決文が現はれたのだ。

十王は石猴の語を聞いて、

「それはどんな事でせうか。」

石猴は云ふ。

「善悪は皆心で造ると云ふ。この龍王は生れない時に、善悪は何もして居ない。それなのに北斗星は前以て、「首斬役人の手で死ぬ。」と書いたのはどう云ふ事だ？ 龍王が上帝から命じられた時間をわざと間違へ、また雨量を減じたのは、悪には相違ないが、これは北斗星の極めた事で、龍王は犯さなければならぬ様になつて居る。上帝は生を御好みになつて居られぬに、北斗星は、どうして龍王を死ぬことに決めたのであらう。これは自分の服し難い處だ。」

十王は呆れて居たが、暫くして、

「或は、龍王が前世に悪事をしたので、北斗は、それを今の世で報を受ける様にしたのでせうか。」
石猴は云ふ。

「若し、今世で罪がないのに刑罰に逢うて『前世の罪の報だ。』と云ふのでは、善惡の理が明らかにならない。若し今世で、罪を犯して罰を蒙るとすれば善惡の報に間違はない。それでは前世の報が消え盡さぬ事となつて甚だ不道理となる。その前世の前に前世があり、後世の後に後世があるのであるから、この様に前後が關はり合ふ事となると、賢い子孫でも、終身悪い祖先の遺した罰を受け、悪い子孫でも、一生賢い祖先の遺した福を享ける事となる。始の善惡の報は爽はないが、後の善惡は、報があるかないか分らぬやうになり、中には、飛んだ罰を受けて、無實の罪が晴らせられない様なものも出来る譯だ。こんな事では、是か非か確かりと極る處がない。これでは文を舞はしたり、法を玩んだりする端を開く様に成るではないか。」
と論じると、十王は一處に手を拱いて、

「仰の通りです。確かな御論です。私どもはこれから筆を擱いて、判断は下されません。」
と賞め揚げるので、石猴は笑つて、

「なんだか混沌して居るが、あなた方の罪ではない。」

と云つて、又手に任かせて一本を取り出して見ると、これは、萬國帝王の壽命を書いたのであつ

た。勝手に一枚を掲つて見ると、「南瞻部洲大唐太宗皇帝李世民」と書いてあつて、その下に

「章國三十三年」と注してある。石猴は、

「その皇帝は、貞觀の太平の政治を取つた人で、まことに有道の帝王だ。その人が三十三年といふのは永いとは云はれない。」

と云つて詳しく見ると、一つの「三」の字が一手でない。下の三字の三畫と、上の三字の三畫とは筆法が違つて居る。下の三畫は間が一樣であるが、上の三字の三畫は間が迫つて上にある。一寸不審に思つてよくよく見ると、上の二筆の墨の色は下の二筆よりも濃い。「小細工がしてあるな。」

「二十三年」を「三十三年」としたのだな。」と思つたので、十王に出して、

「この『三』字は何だか變なところがある。」

と云ふと、十王は見て、びつくりして、

「これは確かに書き添へたものだ。」

と判官を呼んだ。

「誰がこんな事をしたのだ？」

と云ふが、「自分だ。」といふ者はない。で秦廣王が云ふ。

「こんな事をそのままにする譯にはいかん。業の鏡で照して見よう。」

と云つて鏡で照らし出すと、「判官の中の崔珏がした事だ。」とすぐ分つた。

崔珏は罪跡が現はれたので、地に伏さつてあやまり入つた。

「とんだ事をしたものだ。唐の國運は二百八十九年と定まつて居る。太宗の名の下に二十年を加へると三百〇九年となる。それでは天の數に悖るではないか。御前が死んでも足りない罰を受けるにしろ、自分達十人がまた大罪を犯した事となる。上帝の御前に引張つて行つて、御處分を願はなければならぬ。」

と十王は怒り立つた。崔判官はたゞ頭ばかり下げて居る。石猴はそれを見て、

「崔判官。君はどうして、こんな事をしたのだ？」

崔珏は云ふ。

「唐の太宗は、實は私の昔の主君です。又魏徵からの手紙があつたので、ついこんな事をしてしまつたのです。」

石猴は十王を勧めた。

「いや、もう済んだ事だ。仕方がない。今あなた方が、崔判官を上帝の御前に引張つて行かれると、事が面倒になる。それよりも、唐家の運勢を、前を多くし後を少なくして平均にしたらどうだらう。」

「仰ば御道理です。が、どうしたらいいでせう。」

石猴は云ふ。

「それは何でもない。全體、唐家は今は何帝になつて居る？」

「憲宗になつて居ります。」

「それならば、その憲宗は何年の壽命がある？」

「在位は三十五年、壽命は六十三歳です。」

「さうすると、在位は十五年、壽命は四十三歳としたらよからう。」

十王は喜んだ。

「いろ／＼の御配慮、辱うございます。しかし、憲宗は四十三歳では精力が衰へられません。どうして此方へ御招きませう？」

石猴が云ふ。

「それは何でもない。この皇帝は神仙が好きだ。崔判官が勝手に太宗の壽命を延ばしたのだから、罰して方士にして丹藥を献上させ、その藥力で、皇帝の壽命を縮める様にしたらよからう。崔判官は刑罰に附すべきだが、忠義の念からした事だから、さういふ事にして、この一案を了るとしよう。」

十王は禮をして、

「細かい處まで御注意下さつて、まことに申し様のない事です。」

と云つて、すぐ崔判官を罰して、柳と云ふ家に生れ出る事にし、名は柳泌とし、仕事は済むと、またこゝに來て職務を取る事とした。

石猴はまた一本を取り出して見ると、これは天下百姓の生死簿であつた。これを手に任せて振つて見る。そこには「銅臺府地靈縣善士寇洪。」と書いてあつて、その下に、「壽命六十四歳。」と注してある。が、それを朱で消して「七十六歳」としてある。石猴は不思議に思つて、十王に見せつゝ、

「これはどうした事だ。」

と云ふと、十王は、

「これは本人の壽命は六十四歳であるのですが、地藏菩薩が、本人は善行があるから、一めぐり加へて七十六歳とされたのです。」

石猴は大笑ひに笑つた。

「こんな事なら、生死は賞罰から起る私事なのだ。『北斗星が死を注す。』と云ふが、をかしなものだ。畢竟、北斗星の筆は、春秋の鐵筆の様に確かなものではないのだ。冥途の理窟はこ

んなものか。他の書類は見るに及ばん。」

と云つて、それらを推し遣つて立ち上つて、

「失禮、失禮。」と云ひつゝ、宮殿を下りてしまつて、と見ると、柱に對聯がかけてある。それには、

「是_{トシ}是_{トスル}非_{トスル}非_{トスル}地、

明_{トシ}明_{トスル}白_{トスル}白_{トスル}天、

と書いてある。石猴は笑つて、

「こんな大きな宮殿に、たゞ五字の對聯では寂しいではないですか。何字か加へてもいいですか。」

と云ふと、十王は、

「結構です。」

と答へたので、石猴は机の上の大筆を取り上げ、墨を十分に含ませて、兩方に六字を書き加へて、

「是_{トシ}是_{トスル}非_{トスル}非_{トスル}地、畢竟誰_{トスル}是_{トスル}誰_{トスル}非_{トスル}、

明_{トシ}明_{トスル}白_{トスル}白_{トスル}天、到底不_{トスル}明_{トスル}不_{トスル}白_{トスル}、

として、筆を捨て、大笑ひに笑つて、鐵棒を引の提げて花果山に歸つた。

石猴は冥途に行つて生死と善惡との理を論じて、十王を説服せしめたが、また雲に乗つて花果山に歸つて來た。通臂仙は、猿猴どもを引き連れて迎へに出た。

「御歸りなさい。大層いゝ御顔附ですが、冥途で、生死善惡を十分に御究めなつたからですか。」

「究めたとは云ひ難い。が、道理を述べて十王を困らしてやりました。」

「では、あなたの學力は、『生知』と云つて生れながらですな。」

石猴は笑つた。

「私には分らない。生れながらだか、あとからだか。しかし、もし自分のを『生知』とすると、

鬼王どもは、確かに『死知』ですね。」

通臂仙は云ふ。

「鬼王どもは下界のものです。私は考へるのに、『理は無上に參す。』と云ひますから、本當の理を求めるのには、天上でなくてはなりません。」

「いや、自分も天上に行かうと思つて居る。今あなたから言はれるのは、時期が來た爲でせう。」

明日私は天に上つて見よう。」

猿猴どもはそれを聞いて、一齊に跪いて、

「大聖は以前上天せられて御歸りになりました時、神通力で、仙桃や、仙丹や、さまざま持つて來て、御土産に私どもに賜はりました。あなたの御力も大聖に變りますまいから、どうぞ、又、

仙酒や、仙桃や、仙丹を御持ち歸りになつて、私どもに賜はります様、御願ひ申し上げます。」

と願ふと、石猴はにこ／＼した。

「よろしい。持つて歸つて遣る。」

猿猴どもは喜んで、急いで新しい果物を摘み集め、醸して置いた酒を出して饞別をした。

翌日、石猴は通臂仙どもに分れて、雲に乗りつゝ、中天まで上つた。が、天の門は何處にあるかさつぱり分らない。通るものがあれば聞かうとするが、誰れも來ない。「困つたものだ。」と思つたが、南の方にあると聞いたのを考へ出して、雲を飛ばして南の方を探して見てもやはり分らない。氣が焦るがしかたがない。が、又「天は上にある。自分の位地が低いから尋ねあてないのだらう。」と思つたので、身を跳ね上げて九天まで上つて一望すると、金の御殿、玉の宮居、高く美しく輝やかに見えわたり、數多の星がその周りに光つて、威儀甚だ盛んだ。

石猴はそれに近づいて見ると、大門がすつかり開いて居る。大喜びで、内に這入り込むのを見

て、増長天王が數多の部下を引き連れ、鎗刀を閃めかして路を遮つた。

「御前は何と云ふ怪物だ。人の様で人でもなく、獸の様で獸でもない。それが無闇にこゝに這入り込むとは、どうしたことだ。」

石猴は大聲に、

「海は濶いから魚を勝手に泳がせる。天は廣いから鳥の飛ぶに任かせる。上帝の御心は大きいのに、御前たちが、行く手を阻むとは何事だ。」

と云ふと、増長天王は、

「門外の馬鹿者奴。こゝを何と心得る。こゝは天宮といふ事を知らんか。何の縁があつて、這入らうとする？」

石猴は笑つた。

「おれは今は門外漢だが、一度這入れれば主人公だぞ。この門番の惡神たち奴。」

と云ふので、神たちは大變怒つて、鎗や、刀や、劍や、戟を一齊に動かして來る。石猴は慌て、避けつゝ、「これではとても這入れない。」と思つたが、また思ひかへして、「門があるからには這入れないと云ふことはない。」と考へて居る處へ、遠方から放牧した一群の天馬が、走りつゝ歸つて來る。「これはいゝ具合だ。この機會に這入つて見よう。」と身體を一搖りすると、一匹の馬と

なれた。で、馬の中に紛れ込んで、どんく走つて門内に駆け入つた。門番の神たちも、馬を掌る神たちも、見定める間もなく、走りに走つて既に著いた。馬はこゝから一々分れて、自分自分の處に歸るのであつたが、石猴は發見されては都合が悪いので、こゝで本身を現はして、堂の中に這入つて坐り込んだ。

堂の中の役人は驚いて、新任の馬飼の役人に知らせた。

「何處から來たか、變な奴が堂に居ます。頬に毛が生えて、口が雷のやうな恐しい奴が、何にも云はず、あちらこちら見廻して居ます。」

馬飼の役人も驚いた。

「一體誰だ。御前知つて居ないのか。」

もとから居る役人が云ふ。

「顔付から云ふと、前の馬飼の孫大聖に似て居ます。前の緣故を辿つて無心に來たのではないでせうか。」

新馬飼の役人は考へたが分らないので、止むを得ず出て來た。

「もしもし、あなたは前任の孫大聖の御一統ではありませんか。」

石猴は云ふ。

「御察しの通りです。孫大聖は私の祖ですが、あなたはどのようにして御存じです？」

「御顔付が似て居らつしやるので、推察したのです。して今日は何の御用で入らつしやいました？」

「何の用と云ふのでもありませんが、下界に居て閑なものですから、こゝに遊びに来た序に御尋ねした次第です。」

「分りました。前任の方の御親類であり、またわざわざ御出を戴いたのですから應分の事を致しますべきですが、私は御存じの通り、官も卑く、給料も少いものですから、何か差上げたくても、どうも仕方がありません。」

「御金の事を云ふではありません。別に給料から頂戴致さうとは存じません。もし願はれれば、仙酒、仙桃、仙丹を戴いて、饑渴を凌ぎたいと存じます。」

新馬飼は笑つた。

「あゝさうですか。しかしこゝにあるものは水草の類ばかりです。これが御入用なれば差上げも致しますが……、仙酒や、仙桃や、仙丹は、上仙上聖が用ひられるもので、私たち卑い役人どもが、どうともせられないのですから、差上げる譯には参りません。どうか悪しからず……。」

石猴は聞いて、

「いや、有りませんければ仕方がありませんが、祖は在任の時に、それらを持つては、今私どもの居ます洞の中に歸つて来て、みんなに飲ませたり、食べさせたりしましたが……。」

と云ふと、新馬飼は答へた。

「私は後任で、前任の大聖とは関係がありませんから、分かりません。」

「どうして関係がないのです。」

「それはかうです。齊天大聖の居られた役所は、蟠桃園の右手にありました。後に聞いた事ですが、大聖は、その傍の蟠桃園をも監督されましたから、そんな事もあつたのでせう。」

石猴は分つた。

「あゝさうですか。それでは、その蟠桃園は何處に當ります？」

と問ふと、

「蟠桃園ですか。こゝから東南へ十里あまり、木の繁つたところがそれです。」

「いや、こゝに『何もない』と仰つしやれば仕方がありません。そこへ尋ねて参りませう。」

と石猴は云つて、堂を下りて一跳すると、もはや姿も見えない。新馬飼の役人はびつくりして、

「あの人の手並は大したものだ。確かに孫大聖の子孫だ。が、眞直な氣持で、人の云ふ事を聞き入れたからいゝやうなものゝ、ぐすく云つて『仙酒や仙桃や仙丹を寄せ』と坐り込まれたら

迷惑な目に合ふ處だつた。いゝ具合に行つてくれた。」と安心した。

石猴は東南に飛んで行く。孫悟空の役所はすぐ眼の前にあつた。久しく使はないと見えて、家はすつかり仆れて、門から内は草だらけで、道も埋もれて居る。元來此處は、孫悟空のために建てられたのだから、その人が居なくなれば、修繕する必要もないので、自然荒れたのである。石猴は歎息して、

「富貴も榮華も、永續きはしないものだなあ。」

と云つて、また飛んで蟠桃園の前に来て見た。

園の前から後を見ると、不思議な事には、三千本あまりの桃の木は盡く枯木になつて居て、半分の實もないのみでなく、一つの花も、一つの葉も見えはしない。驚いて、

「これは變だ。路を間違へたのかも知れん。」

と躊躇つて居る處を、土地の神が見つけた。

土地の神は、樹を直したり、水を運んだり、掃除したりする力士等と、石猴を見て、孫悟空と間違へた。で、急いで出て来て、禮をして、

「や、これは御珍らしい。久しく御目に懸りませんでしたな。今日は何の御用で？」

石猴は「間違へて居るな。」と曉つたが、素知らぬ顔で、

「ほんとにさうだ。西天で遊んで居るが、仲間の佛達に、桃を少し持つて行つて禮にしようと思つてやつて來たのだ。が、さつぱりないではないか。」

土地の神は答へた。

「もう御忘れですか。この桃は三千年に中熟、六千年に大熟で、極大のものは九千年でやつと熟します。これはもとかから御承知と存じて居りましたが……あなたがこれを偷んで召上つたり、また蟠桃會を御開がせになつたりしたものですから、西王母様は御怒りになつて、みんな摘んで御しまひになりました。ですから、今まだ千年になりませんから、葉も出ず、花も咲きません。どうして實があるのですか。」

と云ふのは、孫悟空が花果山に生れて修業して、強い力を受けて龍宮に行つて、金箍棒を取り出した。で龍王は怒つて上帝に訴へた。上帝は太白星に悟空を召させられた。悟空はそれで天に上つたが、上帝は「此奴は、一筋縄では行かない奴だ。まづ官職を授けて使つてみよう。」と考へられて、弼馬溫といふ馬飼の職に任ぜられた。悟空は職が卑しいので怒つて花果山に逃げ歸つた。上帝は天兵を遣はして捕へさせられたが、悟空が強いので、天兵も敵はずしてみんな逃げ散つた。上帝はしかたがないので、悟空を陞して齊天大聖とされて、蟠桃園の管理を命じられた。で、

悟空はその樹に登つて實を食ひ食つた。それを仙女等が見つけたが、どうとも出来ない。

悟空は食つてしまつてから王母殿に行つて見ると、丁度蟠桃會の當日で、澤山の酒肴が用意されて居る。これを端から飲んだり、食つたり、餘りを盗んで、花果山に歸つたのであつた。

石猴は云ふ。

「さうだ。さうだ。よくそれは知つて居る。が、いくつか收つたのがあるだらう。」

「不思議な果物ですから、收つては置けません。また收へるとしても、西王母の御手許にはあるかも知れませんが、此處にはありません。」

石猴は喜んで、

「さうか、さうか。おれは西王母を尋ねて仙酒を飲まうと思つて居る處だ。いゝ序だ。桃の事を聞いて見よう。一體、西王母の御殿の瑤池は何處だ。」

土地の神は笑つた。

「冗談云つてはいけません。瑤池は、あなたが、日々遊んでいらつしやつた處ではありませんか。

どうして御忘れです？ こゝから真西で、立派な御殿のあるところが、それですよ。」

石猴は笑つて、

「どうして忘れるものか。からかつたのだよ。」

と、また一跳ねすると、ちやんと瑤池の邊に来て居る。

西王母の宮殿は金の門、玉の階、畫いた棟、丹の臺、めでたい霧がかゝり、五色の雲が漂つて、立派さ美しさを極めて居る。石猴は喜んで、

「いゝところだ。いゝところだ。こゝで欺待されるのは、一生の思出だ。」

と云ひつゝ門に入りかけると、門番が遮つた。

「こゝは瑤池仙府だ。お前は何處の者だ。無禮な奴だ。」

石猴は笑つて、

「仙人となつたからには、誰彼の家の區別はない。用があつて、西王母に逢ひに来たのだ。咎められる筈がない。」

と、どし／＼這入つて行くので、門番はあつけに取られた。

石猴は宮殿に上り込んで、

「はやく西王母に、自分の來たことを通じろ。」

と云ふと、役人たちは、

「どこの家でも規則といふものがある。まして、王母様は深く籠つて居られる。どうしてすぐ通じられる様な輕はづみの事が出来るものか。」

といふと、石猴は、

「御前たちと口で云ひあつてもしやうがない。一つ手並を見せてやらう。」
と云つて、耳から繡花針を取り出して、一振り振ると、變じて一條の金箍棒となつた。それを手にして、

「これで御前をなぐりつけても、玉帝は何とも仰つしやらない。却つて御前たちが叱られるばかりだ早く通じろ。通じないか。」

と云ふと、役人たちはふるへ上つて、

「通じます。通じます。」

と云つて慌て、奥へ駆け入つて、磬をしきりに叩く。と、仙女が出て來た。

「何かあるのですか。そんなに慌て……。」

「いや、毛臉で、雷の口をした悪神が、御殿に上り込んで、『王母に御目にかゝらう。はやく通じろ』と申します。私たちが、聞き入れませんと、大鐵棒を振り廻して、危なくてしやうがありません。ですから、止むなく申し上げます。」

と云ふと、仙女は内に這入つたが、暫くして出て來て、

「王母は、『名は何と云ふ。こゝに何しに來たか問へ。』と仰つしやいます。」

と云ふので、役人はまた出て來て、

「あなたの御名前は何と仰しやいます。何の御用で御出になりました？」

石猴は喜んで、

「自分は昔、天宮を鬧がした孫悟空の後で、小聖と云ふものだ。こゝに仙酒や、仙桃や、仙丹があつて、大層旨いと云ふことを聞いたので、閑にまかせて、出て來たのだ。たゞ一度食べさせたり、酔はせたりして戴けばそれで十分だ。王母の御情に預りたいものだ。」

と云ふと、役人は這入つて、また出て來て、

「王母様の仰を申します。折角こゝまで御出で下さいましたから、仙桃、仙酒をも差上ぐべきですが、相憎時期がよくありません。今は桃は花も咲かず、酒はやつと米を下したばかりです。まことに濟みませんが、今日は御歸りになつて、桃が熟し、酒が出來た頃、再び御出を願ひたい。」

石猴は聞いて、

「酒も無し、桃も無しではしかたがない。しかし、仙丹はあるだらう。それをすこし食べさせて貰へまいか。」

と云ふと役人は答へる。

「仙丹と仰しやいますが、それは太上老君の煉られる寶で、こゝにどうしてあるのですか。」

「あれもこれもみんな無いと云ふのは、客を馬鹿にした様にも當る。では歸るとしようが、この鐵棒が手ぶらでは歸るまい。」

と云つて鐵棒を取り上げて、縦横に振り廻はす。役人は驚いた。

「まあまあ待つて下さい。も一度、王母様に申し上げますから。」

「早くしろ。辛抱強いから、待つには待つが……。」

役人は急いで、奥に行つて、仙女に、

「王母様に申上げて下さい。この孫小聖といふ奴は、食しんぼうで、亂暴者です。鐵棒を振り廻はして食べる事ばかり喚き散らします。この御殿は壞されもしますまいが、傷はつきませう。何でもいゝから、食べさせて、早く歸しましたら……。」

仙女は一々王母に云ふと、王母は、「孫悟空の一家のものなら、きつと頑惡な奴だ。昔、蟠桃會を鬧がしたから、大勢の軍兵を動かして捕へに行つたが捕へられないので、佛祖を頼んで、その法力でやつと征服したのであつた。今、飲食の小事で大事を惹き起しては、天上人の度量の寛いのを狭く見せる様なものだ。」と考へられたので、厨の者に、四品の馳走を用意させ、徳利の仙酒と、乾した仙桃と捧げて前殿に出し、玉の机に置いて、

「さあ召上れ。」

と云ふと、石猴は大喜びで笑ひつゝ、

「禮には合はないが、却つて俗を脱して居てよろしい。不意に來た客だから。この位で十分だ。」と大いに食ひ、大いに飲んで、忽ちすっかり空にしてしまつて、料理人に、

「肴は入らない。酒をも一徳利持つて來い。」

と云ふと、料理人は異存も云へないので、また一徳利持つて來た。それも飲み干して少し酔が廻つたので、

「王母の御手許には仙女が多いと聞いて居る。その中に、聲がよくつて、歌が上手なのがある筈だ。」

王母の御情で、一つ聞かせて貰ひたいものだ。」

役人どもはあまりの事に、いづれも返事もしない。が、一人これを王母に告げに行つたものがある。王母は怒つて、

「何と云ふ猴奴だ。とんだ無禮な奴だ。」

と人を遣つて、玉帝に申し上げさせた。玉帝も怒られて、

「昔の孫悟空は無禮で亂暴者ではあつた。が、これは桃や酒を偷んだので、盜賊の所行をしたのだ。今度の小猴奴は神通力を恃んで、王母を輕蔑して、坐ながら仙酒や仙桃を強請つて、威張つて居る。憎い奴だ。」

と云はれて、上、中、下の三界の靈神や、金、木、水、火、土五行の星官に、
「早く、天兵を引連れて瑤池に行つて、猴奴を擒にして、王母を守れ。」
と命じられた。

石猴はそれとは知らず、猶桃と酒とを強請つて居たが、役人どもは、

「あなたが來た時は、『一寸酔はしてくれ、ばい。』と云はれたではないか。もはや酔はれた
のだから早く御歸りなさい。」

と云ふと、石猴は、

「本當の事を云ふと、自分はこゝに來る前に、手下の猿どもに、『仙桃や仙酒を土産にする。』と
云つたのだ。もはや酔つたから歸るべきだが、何も持たずに出る譯には行かない。王母に申し
上げて、些かでも土産になるものを賜はりたい。賜はれば歸つて分けてやる。賜はらねば、死
んでもこゝを動かない。」

と云ふので、役人どもは仕方がなく、王母に無理に申し上げて、二徳利の酒と一盤の仙桃とを出
して持つて歸らせ様とした。石猴は満悦して、仕度をして宮殿を出て來ると、忽ち金鼓の聲が天
に響き、喊の聲が地を震はして、五行星官の軍兵が既に到着して、王母の御殿を取り圍んだ。

「猴奴を捉へろ。」

と口々に叫ぶ。

石猴はそれを聞きつゝ微笑んで、

「お前たちは酒食でおれをもてなしながら、却つて天兵に捉へさせようとする。ひどい奴等だ。
計策は上手だが、とてもおれは捉へられまいよ。」

と云ひつゝ、毛を二本抜いて二匹の小猿に變じさせ、一匹に仙酒、一匹に仙桃を持たせて、

「おれについて來い。」

と云つて置いて、ふりかへつて役人どもに、

「王母によりしく申し上げてくれ。大變、御喧しい事だつた。」

と云つて、鐵棒を引提げて、どしんと瑤池を走り出した。

見ると、三界靈神と五行星官とが陣を開き、勢を示して道を遮つた。

「猴奴、とんだ無禮をした。死んでも足りない奴だ。大刀や刀の傷を受けるよりも、早く緇にか
かれ。」

「おれは王母を拜みに來たのだ。王母は御情深く自分に馳走された。これはあり來りの禮式だ。
これを無禮と云ふのは飛んでもない。御前たち惡神どもは、何をそんなに騒ぐのか。おれは幾
杯も仙酒を飲んで、酔が出たから歸つて睡らうと思つて居るのだ。早く路を開けて通すばかり

か、家までみんな送つて来い。」

といふと、神々は怒つて鎗、刀、劍、戟を一齊に集めて打つて来る。それを鐵棒で受け留めて、

「お前たち、名を名乗れ。一體何處の惡神どもだ。事情があれば鐵棒の加減をしてやつてもいい。」

「下界の惡物奴。おれらを知らんか。上、中、下三界の靈神と、金、木、水、火、土五行の星官だぞ。」
石猴は大笑ひに笑つた。

「おれは三界の外で、五行の中には居ない。お前ら惡神どもに關係はないのだ。みんな打ち殺してやるぞ。」

と云つて、鐵棒を振り廻す。神たちは、力を并はせて攻めつける。が、鐵棒は泰山の重さで打ち下すので、軽く出來て居る兵器では、とても支へられない。十合ばかりになると、神々は東に避け、西に逃げて一處になれない。その真中で、石猴は左に五つ、右に六つと、棒を振り上げ振り立てる。

「こんなに逃げ散つては、天神と云ふのは羞かしからう。おれは歸りたいから打つちやつて歸るぞ。」

と云つて、二匹の小猴を呼んで、南大門に向つて奔つた。神々はそれと見て、また集まつて、後

を逐つて来る。門番の増長天王等も出て來て遮つた。

「この猴奴。貴様はいつこつそり這入り込んだか。今度は出て來て死なうとするのが。出られるものと思ふな。」

「お前ら惡神ども。貴様たちは本當にしやうない奴だ。おれの來た時にも邪魔をし、今出ようとする。また邪魔をする。これだから、天と人とが立派な道がありながら、往來の出來ない様になつたのだ。しやうのない奴等だ。」

「惡猴奴。出たらめを云ふな。こゝは天帝の御門だぞ。自分らは仰を承つて守つて居るのだ。どうして邪魔ばかりするものか。」

「さう云へば、玉帝の面目上、打つことだけは許してやるが……。」

と石猴は云ひつゝ鐵棒を左右に振ると、天王等は避けるので道が開ける。そこをねらつて、雲に乗り、二匹の小猴を連れて南大門を走り出して、花果山に歸つて來た。

天王等は石猴を逃がして慌てゝ居る處へ、三界靈神や五行官星が駆けつけた。

「彼奴を逃がしてしまつた。どうしたらよからう。」
とみんなで相談した。

「いや、追つ駈けて行かう。」

「もう追つ駈けてもしやうがあるまい。素早い奴だから。」

と云ひ合つて、一同御殿に出て、玉帝に事の次第を申し上げた。

「彼奴は神通力の強い奴でして、昔の孫悟空の十倍の力がありません。私どもは人数も少いので、捕へようとしても捕へられません。南大門から出られてしまいました。まことに申譯のない次第でございます。」

聞かれて玉帝は驚かれた。

「どうしてやらうか。」

と云はれて、托塔天王、哪吒三太子及び、二十八宿、九曜星官等に、十萬の天兵を引率して、石猴を擒にする様命じられた。李天王等は、

「仰によつて、出向はしますが、昔孫悟空が天空を闖がしました時、私どもが随分力を盡しましたのに拘らず、遂に逃げられてしまひました。今度の孫小聖と云ふ奴は、神通力が孫大聖以上だと申します。これを捕へようとして、捕へられぬとなると、天の威光を損することになりませぬ。」

と申し上げると玉帝は、

「御前の云ふ事は道理だ。昔孫悟空を捕へたのは、全く佛如來の力であつた。天將たちが捕へる

ことが出来ぬとすると、また西方から如來を頼んで來なければならぬ。」

と云はれて、使を出さうとされると、列座の中から出て來たのは太白金星だ。

「いや、それには及びますまい。私は一人の力で、悪猴は降参させることが出来ると思ひます。」と申し上げる。玉帝は、

「それはどういふ事か。」

と云はれると、金星は云ふ、

「悪猴は、『孫大聖の後だ。』と申して居ります。あの顔附と金箍棒とでは、確かに嫡流だと信じられます。『木には本があり、水には源があり、これがよく制し合ふ。』と申しますから、今の鬪戦勝佛孫悟空に勅を御下しになつて、悪猴を説得せしめられますならば、きつと降参するでございますよう。」

玉帝は悦ばれた。

「御前の云ふ事は確かだ。その使には御前が行け。」

と仰せになる。金星はすぐ宮を出て、雲に乗つて西天に向つた。

孫悟空は成佛した後に、西方で永安宮と云ふのを造つて、其處に住まつて居た。毎日閑なので、たゞ旃檀功佛乃ちもとの玄奘法師と佛法の奥儀を話しあつて居た。太白金星が、玉帝の仰を承つ

て来ると云ふことがすぐ分つたので、迎へに出て、一處に宮に來た。で、金星に、

「玉帝からどんな仰があるので、あなたがわざわざ御出下さつたのでございませうか。」

と問ふと、金星は、

「外ではない。あなたが、もと居られた花果山にある石が、天地の氣を受けて、また一人の小猴を生み出した。」

と云つて、石猴乃ち孫小聖の天宮で亂暴した始末、それを静めに自分が使として頼みに來たことを逃べると、大聖は答へて、

「よく分りました。まことに物の根は絶えないもの、妄念はそこから出來ると見えます。あなたの御推舉で玉帝の仰を承りました上は、きつと骨を折つて御覽に入れます。」

と云つて、金星と一處に雲に乗つて花果山に向つた。

石猴は、天兵を打ち破つて桃やら酒やら持つて歸つて、洞の中で猿どもに分けて、さんく自慢をした。通臂仙は聞きつゝ、

「さう仰つしやると、大變天空を鬧がした事になる。すると、その中に、天から攻めて來るに相違ない。」

と心配すると、石猴は、

「心配なさるな。大丈夫、大丈夫。天兵などと云つても、手並の程はよく分つて居る。いくら天を傾けて來たつて、決して恐れる事はない。」

と云つて居る處へ、洞の外に聲があつて、

「孫小聖、早く出て、佛祖に逢へ」

と聞こえる。石猴は不審がつて、忙いで出て來ると、一人の老人の仙骨を帯びたのが、叫んで居るのであつた。

「あなたはどなたです？」

「私は太白金星だ。お前が飛んだ大罪を犯したものだから、玉帝が大勢の天兵を出して攻め寄せられようとせられるのを私が遮つた。が、お前の野心が、抑へられないかと心配して、お前の祖の老大聖を連れて來て、お前を諭して、正道につかせ様とするのだ。」

「さうですか。が、その大聖は何處に居られる？」

金星は指さしをした。

「あの雲に居るのがそれだ。」

「では行つて見ませう。」

と云つて身を跳ねさせて雲に上つて見ると、毛臉ではあるが慈悲の姿があり、金の腫であるが智

慧の光を含んで居る。雷の様な口も佛力で平になり、猴の様な腮も神通力でふつくらして居る。眼を合はせ、眉を低れ、口も閉ぢて物も言はない。以前天宮で大騒ぎを起した様子は少しもない。石猴はよく見て、どうも不審が晴れない。

聞いて居る處では、老大聖は無敵の英雄で、近よるものがない程であつたといふ。それであるのに、こんなに穩やかでおとなしいのはどうした事だ。或はこれは贗物であるかも知れない。一つ試してやらう。と思つて、耳の中から金箍棒を取り出し、手に提げて一回振り廻して、

「あなたが、我が祖の大神で入らつしやいますならば、この鐵棒を今も御使ひになれますか。」と云ふと、大神は微笑して、何も言はず、たゞ手で一招きすると、覺えず知らぬ中に、鐵棒は石猴の手から大神の手に飛んで、次第次第に一つの繡花針となり、見る見る中に、耳の中に這入つてしまつた。石猴はびつくりして、慌て、雲の中に跪いて、

「眞の佛祖！眞の佛祖！どうか私の失禮を御許し下さい。」と云ふと、大神は、口を開いて、

「御前はこの一條の棒を恃みにして亂暴をしたが、棒がなくなつても、やはり亂暴をするか。」石猴はしきりに禮をして、

「棒がなければ亂暴は致しません。然し、他から馬鹿にされると、棒がなくても致しますかとも知

れません。どうか御返し下さい。山の洞の守と致しますから。」と云ふと、大神は笑つて、

「返すと、また亂暴するだらう。さうだらう。」と云つて返さぬので、石猴は續けて禮をした。

「致しません。決して致しません。」

「それならば返してやらうが、またこゝに一つ金箍兒といふものがある。これも御前にやることにする。」

と云つて袖の中から取り出して、だしぬけに投げるのを、石猴は手で受け留めようとする時、それはちやんと自分の頭の上にかぶさつた。石猴はそれが何であるか分らなかつたが、喜んでしきりに禮を云つて、

「有難うございます。が、これは何の役に立つのでございませう。」と云ふと、大神は、

「いや、このものは大いに役に立つ。以前自分に大いに役に立つてくれた。が、今日からは御前の頭にあつて役に立つ。人が御前を尋ねる時がある。それが御前が道に入る時だ。安心して養生しろ。自分は歸るぞ。」

と云ふので、石猴は、慌て、衣を引き止めて、

「いゝ具合で御目にかゝつたのに、どうして直ぐ御歸りになるのです？ どうぞ、もう少し御出で下さい。また鐵棒を御返し下さい。またこれからの事を御示し下さい。」
と云ふと、大聖は、

「偈が一つある。よく覚えて置け。」

「頑力有限、慧勇無邊、不成正果、終屬野仙。」

石猴は聞いて、

「辱うございます。よく覚えて置きます。しかし、これからどういふ修業をしたら、いゝでございませう。」

「いや、自分のした事が、すぐ御前の身の上になる。因縁の日が来ると、招かれる處がある。これは今は察されない。」

「承りました。が鐵棒は御返し下さい。」

「ちやんとお前の耳の中にある。もう何も返すものはない。」

と笑つて、金星と一處に雲に乗つて、玉帝の御殿に御返事に行つた。

五

孫小聖は孫大聖の教を受けたので、妄心も邪心もすつかり消えたが、鐵棒がないので、落付かない處があつた。が、孫大聖は歸る時、「御前の耳にある。」と云つたが、虚言の様でもあり、本當の様でもあり、どうもをかしいので、耳に手をやつて探して見ると、ちやんと一本の繡花針がある。それでも訝かしいので、取り出して振ると、もとの通りの金箍棒となつた。小聖は大喜び、いゝ氣分で、

「老祖の神通力はこんなであつたのだ。とすると、それを服従させた佛如來の法力はどんなのだらう？。この棒一つを恃みにして天宮までも打つて行つたのは、まことに飛んだ事をしたものだ。禍はきつと来る處であつた。危ない事だつた。」

と後悔もした。また考へて、「大聖は正果を得る様に勤めなければ、野仙にとゞまる。」と云はれ、「また自分のした事が、すぐ御前の身の上となる。」とも云はれたが、自分も經を取りに行く様な事になるかも知れん。それが正果を修める事になるのではないか、と思つた。また「金箍兒を戴かせてもらつたが、これはこれは何の爲か知らん。一寸取り下して見よう。」と思つて、手で取ら

うとするが、根が生えたようで、動かうともしない。びつくりして、「これはきつと寶物だ。後になると、役に立つだらう。」と思つた。

これから小大聖は氣儘に遊び歩いて、邪念は起らなかつた。洞の中に居ても、すつかり落ち付いて修養する事が出来た。

孫悟空は金星と一處に天宮に行つて、玉帝に事の始末を申し上げて、永安宮に歸つて、三藏に、花果山にまた石猴が生れて、鐵棒を持つて暴れ廻つた話をした。三藏は驚いて、

「佛が、大乘妙法眞經を造られ、自分に千山万水を通つて求めさせて、中國に持つて來させて、人々に善果を得る様にせられたのであつた。それから今は二百年あまりも經つて居るから、教がすつかり行き渡つて、人も天も一つになるといふ妙境に達して居る筈なのに、どうして、石が合點せず、また物が生じたのだらう。それは世間に過があるからに相違ない。もしさうであつて、そのもとは佛法の効能がないからだ、といふ様な事になると、自分らの骨折は、無駄になつてしまふではないか。」

と嘆くと、悟空は、

「經を傳へたのは、佛の御慈悲からであります。墮落するのは衆生の罪が深いからです。物の原因はなくならないものですから、何時何時迄も續いて行きます。衆生の過はなくならない

でせう。でも、佛法の無効とは云はれますまい。」

三藏は考へて、

「道に迷つたものがあるのは、教へ方が悪かつたからである。お前と自分とこゝで氣樂にして居る時ではあるまい。長安の都に行つて、眞經が、どの位行はれて居るかを探つて見ようではないか。」

と云ふと悟空は、

「それはあなたの御慈悲から起る事、道理の次第です。だが、どう云ふ風にして、参りませう？」
「かうしたらどうだらう。あの昔、觀世音菩薩が、長安で經を求める人を尋ねられたが、疥癩坊主の風をして居られた。どうだ、二人でその様にしたら。」

「仰の通り。結構です。御伴をして参りませう。」

と二人は雲に乗つて、眞直に南贍部洲大唐國界に行つて、雲から下りて見ると、こゝは鳳翔の地方であつた。二人はこゝで疥癩坊主と變じて、一人は師匠、一人は弟子の形をして、師匠は「大壯師父」、弟子は「吾心侍者」と云ふことに決めた。で、二人は城内に這入つてあちこち見て歩いた。

大唐は、太宗の貞觀年間に、三藏が眞經を持つて歸つてから、人々は佛教を信仰して、處々に

寺を立て、家々で經を誦んで、財を捨てれば福が得られる、布施をすれば命が延びると思つて居る。そのため、從來、先王が世を治められた君臣父子の道も、仁義も禮樂も捨て、しまつて、願みもしない有様であつた。この時は丁度元和十四年で、憲宗皇帝の御代であつた。この皇帝は考へがしつかりして決斷がよく、高崇文を遣つて、蜀の劉闢を擒にし、裴度や、李愬を使つて淮蔡を削つて、吳元濟を虜にし、威令がよく行はれて、唐朝一代の英主と云はれた。が、佞人どもを信用し、神仙の話を好まれた。又佛教を崇べられた。

しかし、この佛教は清淨無爲の教であることを知らず、世を善くし、民を治める理屈のあることを思はず、たゞ禍を福とし、善因を積んで善果を得ることを大事として、財を捨て、寺を造り、像を拵へて表を立派にし、愚民どもを感心させて、佛教の正道を軽く視てしまはれた。これがために、見識のある大臣や君子は、「佛法は邪道だ。僧侶は邪法者だ。」と云つた。

三藏は孫悟空と鳳翔門に進んで觀ると、さすがに中華の大國で、人も多いし、物も豊かで、町は大變賑やかだ。で、到る處に菴があり、寺がある。法門寺といふのが一番大きいので、二人はそこに這入つた。先づその山門には「勅建法門禪寺」といふ金字の横額が懸つて居る。兩側に、松や檜が、龍や虬の様に茂つて、その中に大殿の屋根が、千尺も高く聳えて居る。法座も白玉が臺となり、階も金の様。鐘樓と鼓樓とから傳はる音は春の雷かと疑はれる。案の前には多

勢の男女が群がり、庭には士大夫の車や馬が陳間もない。そこに法を説く僧達の袈裟の鮮やかさ輝かしさは、全く富貴を示して居る。二人が大殿に行かうとすると、接待役の僧が早くも見つけた。

「御二人は何の御用で？」

「行脚してこゝに参りました。」

「齋のためですか。」

「齋は入用ません。」

「齋が入らないのに、こゝに來られるとは、どうした事です？」

「御寺が御立派で、御僧たちも大勢入られませう。ことに高德の方があらせられるので、こんなに御繁昌なのでせうと思つて参りました譯です。」

「あなた方は、遠方の方としては、御考へがいゝ。ほんとにこの寺の大法師は、外とは一處にされない大した來歴のある方だ。」

「佛法は平等と聞いて居ります。大した來歴とはどう云ふ事でせう。」

僧は答へて、

「では云ふから、よく御聞きなさい。我が大唐の國を聞かれた太宗皇帝がお崩れになつて、冥途に行つて歸られた。そこで善惡應報の事を御覽になつて、水陸の大會を建て、死者の超度をな

された。それを觀世音菩薩が感じられて、親しく法壇に出て云はれるのに、「この小乗の法では、死者の魂の超度は出來ない。佛如來に大乘妙法眞經三藏がある。德行のある高僧があれば、それを遣つて持つて歸らしたならば、死者も昇天するだらう。」と仰せられた。太宗皇帝は喜ばれて、高僧の陳玄奘法師に御命じになつた。で、この法師は万水をわたり千山を越して、十四年経つてから、三藏眞經を手に入れて歸つて來られた。これから佛教は一日一日と盛んになつたのだ。」

と云ふと、三藏は孫悟空と顔を見せて笑つた。

「その玄奘法師は、その後どうしましたか。」

「その法師は、その功德で、佛果を得て、入定の後、此寺に佛骨佛牙を遺されて居る。それを今でも塔に納めて居て、三十年毎に一度開く事をする。と、その年は豊年で、國は太平だ。丁度今年は三十年目だから、皇帝陛下は、長安の御殿に迎へ入れて御覽になるのだ。勅令は下つたから、只目を決めるばかりになつて居る處だ。」

あまりの事に三藏は嘆息した。

「その玄奘といふのは私は存じて居ます。どうして、入定して骨や牙をこの塔に残すものですか。誰れがこんな嘘を造つて人を迷はすのでせう？」

「出たらめを云ふな。玄奘法師は今を去ること二百年あまり前だ。御前がこれを知る道理がない。それが嘘といふものだ。佛骨佛牙はちやんとここに在るから、證據は歴然として居るのだ。どうして、人を迷はしたりなどするものか。お前はさういふ大きな話をして、田舎の愚民どもは哄されようが、こんな大寺の大法師の前で、そんな事を言つたつて何にもならんぞ。」

三藏は云ふ。

「まあこの事は止めに行ませう。が、大法師の御名前は何と申されます。又どんな法力を御持ちでせうか。」

案内の僧が答へる。

「我が大法師は諱は無中、號は生有、陳玄奘法師の六代目を繼いで居られる。玄奘の持つて來られた眞經は残らず通じて、壇に上つて説教される時には、天から花が亂れて墜ちるし、地から金蓮が湧き出す。重臣どもは皆地下で拜されるし、天子もしきりに點頭れる。だから錢が山と積まれ、米穀は河と集まる。すべての財寶は物屑とも思はれず、綾も錦も何でもない程の喜捨だ。高德でなくては、こんな事はあるまい。どうだ！」

「では、その方の説かれるのはどんな御經です？」

「小乗ではない。三藏眞經だ。」

「いつ御登壇になりますか。」

「明日はちやうとその日だ。お前は人中に雜つて聞いたらよからう。さうすればちやんと分る。」

「それならば、さう致しませう。」

と云つて出て来て、孫悟空と一處に歎息して、

「お前と一處に求めて來た經が、あれらの、罪造りの種となつて居るとはどうした事だ！」

「いや、俗僧どもが佛法を知らずに、世間的に舉動つて居るのは苦々しい事です。まあ、明日生有法師がどんな説教をするか、聞いた上で何とか致しませう。」

「では、さういふ事にしよう。」

と云ひ合つて、小さな庵を見つけて、そこを宿とした。

翌日になると、昨日の様に法門寺に二人來て見ると、堂の中は、鐘や磬の聲が喧しく響いて、香の烟が立ち上つて居る。そこで大勢の僧たちが經を誦んで居る。眞中に壇が出來、その上に法座があつて大變立派だ。そこへ講義を聞かうとするものが押し合つて來る。紳士も、學士も、公子も、富豪も、商人も、農人も、工人も、都の娘も、村の女もごちや／＼と一堂に集まつて生有法師の壇に上るのを待つて居る。その中正午近くなると、幡が見え、寶蓋が見え、太鼓や、鐃鉢や、さまざまの音が響く中に、生有法師は八寶の袈裟を著、九環の錫杖を持ち、毘盧帽を頂き、

菩提珠の數珠をかけて、靜々と壇に上つた。

法師はまづ神呪を誦してから、法華經を読み上げ讀みつけて、一字一字講義をし初めた。漸くしてそれが済むと、餘文を述べて、

「前生の因を知らうと思へば、今生の果を見れば分る。來世の果を知らうと思へば、今世の因を見れば分る。佛經は千言萬語であるが、人が善をし、修行をするのが主となつて居る。禍にあつたり、福にあつたりするのは、皆自分が作り、自分が受けるのである。何が善かと云へば、布施がその根である。何が修行かと云へば、信佛がその本である。もし善男善女があつて、布施をし、信佛をするならば、立派な出世もするし、福も多く命も長い。今貧乏であつたり、禍にかゝつたり、早死をしたりするのは、皆布施、信佛を知らんからの過である。親、眷屬は仇と同じで、富貴功名は泡と一樣だ。みんなよく／＼考へて置け。無常は直ぐ來る。その時になつて慌てゝはならん。」

と云つて、みんなに念佛を同音に唱へさせ、壇を下りて、また幢幡や、寶蓋や、音樂に取り圍まれて奥に這入つた。聞いて居た者は、一人として讚めないものはない。

「大層な御方だ。御講義がよく分つた。有難い事だ。」

と云つて、金銀を置いたり、寄進簿に書いたりして、喜びあつて歸つて行つた。

三藏と孫悟空とは覺えず歎息した。

「我が佛が世人を濟度しようとしてられたものが、却つて愚僧のためにかやうに敗られて居る。自分が經を求めて來たのは、世を濟ふためであつたが、今では世を害する事となつた。自分を現はして、こんなな魔物を掃つてやらうか。」

と三藏が云ふと、悟空は答へる。

「それはまだ早いでせう。この寺は大寺ではありませんが、畢竟、田舎寺に過ぎません。都は都の事ですから、また高僧があるでせう。長安まで參つて見ようではありませんか。さうしたら、よく分りませうから。」

「それもよからう。」

二人はまた雲に乗つて長安まで來た。

朝廷には出ず、眞先に洪福寺に這入つた。この寺は三藏が成佛した後に「活佛が出た處」と云ふので、有名になつた寺だ。で、參詣人の絶間もなく、大層な繁昌だ。二人は殿上に行つて見ると、大勢の僧たちが、左官や大工を連れて、倒れた塔や、階を直させたり、落ちた壁を塗らせたり、糊めた彩色をつくるはしたり、佛像に金を添へさせたりして、二人にはちつとも構つてくれない。何だか譯が分らないで居ると、たゞ一人、老和尚が手隙で立つて居るのが見えたので、

其處に寄つた。

「和尚さん。どうしてかう急がしいのです？」

と問ふと、和尚は、

「あなた方は遠方から來た人と見えて、此處の事は存じられまい。只今の皇帝陛下は佛教の深い御信仰者で、鳳翔の法門寺に陳玄奘法師の遺した佛骨と佛牙とが塔に納めてある。それを三十年目に一度開くと豊年になる。今年がそれに當るので開くことになるが、勅令があつて、文武の百官を御引連れになつて、ここに迎へて御覽になると云ふ次第だ。この陳玄奘法師はこの寺の出身だから、迎へて來ればこゝに置くのが當然。それで、かやうに準備をして居る處だ。」

三藏は聞いて、

「今上が佛法を御好みになるならば、正道を御信仰になりさうなもの。どうして、一人も高僧が御導き申し上げず、邪道に御這入りなるのを御留め申さないのです？」

と云ふと、老和尚は不審顔だ。

「皇帝が佛骨を御迎へになるのは、佛門中の第一の善事だ。それをどうして邪道と云ふのか。自分が聞いたからいゝ様なものゝ、他人に云つたら大變になるぞ。二人とも語を慎んで、早く外

へ行つてしまへ。こゝに居ると、いゝ事はないぞ。」

三藏は何も言はず、悟空と一處に寺を出て來た。

「經を求めたのは、世尊の御旨を受けたからだ。今、善が悪になつた。世尊の御心持とは全く反對だ。しかたがない。また靈鷲山に行つて、世尊に申し上げて救けて戴かう。さうすれば、禍を後世に流さない様になるだらう。」

と云ふと、悟空は、

「仰の通りです。」

と答へるので、二人とも本の身になつて、雲に乗つて靈鷲山に行つた。

三藏は如來の弟子だ。成佛はしても、時々こゝに來て、講説を聞いて居るから、案内なしに佛の蓮座の前に行つた。で、掌を合はせて禮をして、

「御願があつて参りました。昔、私は眞經を戴きまして、東の國に持つて行つて、そこで衆生の過も罪もなくしようと思ひがけなく、僧人は貪つたり、詐つたりして、眞經の意義をわざと間違へ、佛骨佛牙など云ふ、飛んだものを作り上げて、上は帝王を愚に、下は臣民を迷はして居ます。經を御造りになつた御心持、私の經を求めました苦辛は、すべて詐り者、騙り者の、悪用の道具となつて居る始末です。ですから儒教の人からは「佛教は異端

だ。」などとも云はれます。これでは、佛門を打ち壞はす結果となりますから、どうかこれを御救ひ下さる様御願ひ致します。」

と訟へると、世尊は答へて、

「三藏眞經は、意味が微妙であるから、愚かなものには分るまい。必ず眞實の解釋が入用なのだ。

それがあれば、愚かなものでも悟が開けるだらう。惜しい事には、以前經を傳へる時、時日が切迫したものだから、御前に眞經を一處に傳へさせなかつた。だから、訛あやまりから訛あやまり、偽いつはりから偽いつはり、眞實の事は分らなくなつたのだ。これも、東方の衆生の罪業が深いためののだ。」

と云はれる。三藏はまた掌を合はせて禮をして、

「さやうでございますか。眞解が御有りになれば、私に御傳へ下さい。さう致しますと、また以前の様に、長安まで持つて参つて、經を求めた仕事を完全に果します。」

と願ふと、世尊は、

「東方の人は疑が多くて、信心が少ないから、教へたつて心からは分らない。もし眞解を輕々しく送つてやると、「あゝこんな物か。」と輕蔑して、却つて、譯わけの分らない結果になる。それよりも、經を求める熱心な求道者を探がし、それに、天子に奏問させて、また千山を越え、万水を渡らして、此處に來させ、眞解を持たせて歸らせたならば、邪魔邪道をも、正道に歸せしめ

る事になる。これが山よりも高く、海よりも深い福因、善果となるのだ。以前、観世音菩薩が御前を探がして来られた。今度は御前が東方に行つて、適當な求道者を見つけて、この事を仕遂げさせたらいいだらう。」

「仰は承りました。不束ですが、仰の通りに致します。が、こゝを出てから、いゝ求道者に逢ふ因縁がありませんか。」

「心配はない。御前がこゝに来たのも因縁があつたからだ。御前の行くのも因縁があるからだ。」三藏は悟つて、また掌を合はせ、禮をして、

「仰の程、よく分りました。」

と云つたが、また、跪いて、

「以前の時には、観世音菩薩が廣大な神通力で、世尊の御心持の通りに、事毎に御救け下さいました。私の法力は十分ではありませんから、此處を出てから、どうしていいか分かりません。どうか御教へ下さる。」

と云ふと、世尊は、

「まだ心配するか。御前が通つた途はよく知つて居るから、又云ふ必要はない。今度来る者をよく導いてやらなければならぬ。解を求めるのは、經を求めるのとは違ふ。經は文字があれこれ

と纏はつて居るものだから、求めるについても、むづかしい事も多かつた。解はさうではない。

直ぐに分り、忽ち解ける様でなくてはならぬ。求めるに就いても同様だ。以前に觀世音が長安に行く時、五つの寶を與へて置いた。それは知つて居る通り、一つは錦襦の袈裟、二つは九環の錫杖であつた。これを持つた者は、輪廻に墮ちず、害毒にも遭はないのであつた。又、金、緊禁三つの籬兒があつた。これで妖物どもを壓へたのであつた。が、今度はそれらを止めて、ただ一條の木棒を授ける。これで一喝すれば、妖物でも、野狐でも形を消すのだ。」

と云つて、阿難迦葉に取り出させて、三藏に與へられた。三藏は辱くこれを受取つて、孫悟空に持たせ、また掌を合はせ禮をして退いた。

三藏等が出て山の下まで来ると、金頂大仙が待ち構へて居た。

「御前は、長安に行つて眞解を取る人を尋ねるさうだが、尋ねあてたら早く来る様にして貰ひたい。若し以前のお前の様だと、十年以上も待たねばならぬ。それでは困るから。」

と云ふ。三藏は、

「世尊から、『急げ』と仰がありましたからさう致します。これで失禮します。」と云つて別れて、孫悟空と雲に乗つて長安に向つた。

三藏は世尊の仰を承つて長安に上つて、眞解を西天に取りに行く人を探さうとして、孫悟空と相談した。

「どうだらう。世情がだん／＼悪くなつて、ろくなものは居ない。眞解を求める人は、一體何處に居るだらう。どう探したらいいだらう。」

「仰のやうに、仲々分りませんが、佛門は廣大です。邪道に墮ちるものも多いのですが、何處かにしつかりしたのも居るでせう。よく／＼探したら、きつと尋ねあてます。」

二人はまた疥癩坊主に變じて、師匠は「大壯法師」、徒弟は「吾心侍者」と云つて、毎日長安の市の中を尋ね廻つた。

ある日、正陽門に行くと、そこに朝廷からの張札がある。大勢寄つて争うて見て居るので、二人もその中に交つて見ると、札には、

「釋教を崇信する爲めに、敬しく佛骨を禁裏に迎へて、今上が御覽になつて、國家太平、諸民安樂を御祈り遊ばされる事。密かに考へて見るに、聖王の御宇が太平なのは、政道が明らかであ

るからであるが、また佛が佑けられるからでもある。昔、太宗皇帝は佛を尊ばれて、眞經を求められ、佛道を發揮されたから、歴代太平の福を享けて居る。朕は皇位に居ること十四年であるが、時は和やかに、年は豊かだ。これは皆、佛の慈悲の御蔭だ。今年は三十年目である。鳳翔の法門寺で塔を開ける時である。この機會に、朕は文武百官を遣はし、僧人等を連れて、四月八日に、三藏佛祖の佛龕を禁中に迎へ入れて、親しく拜んで、歸依の念を現し、上には、國の太平を祈り、下には、民の安樂を祈らうと思ふ。文武百官は、朕の命を承けて忽がせにしてはならんぞ。

元和十四年 吉旦

と書いてある。三藏は悟空と見て驚いたが、人から見破られては都合が悪いので、たゞ大勢の行く方について行つて、諸處の寺々を見廻はつた。何處でも、和尚は、皇帝が佛教を好かれるのを恃みとして、勝手に佛法を弄んで、人民の財物を取り上げる事ばかりして居る。これに哄されて、男も女も、老も若きも、金を蒔いたり、簪を出したり、米麥を捧げるのもあり、布施をするのもあり、全く父母の寒いのも構はず、妻子の飢ゑるのも顧みず、今日財を施したら、明日は福を得られると思ふが、何ぞ計らん。これらは皆、俗僧どもの私腹を肥やすばかりで、何の功德にもなつて居ないのであつた。三藏はこれを見て、全くがっかりした。

「こんな大長安に、清淨無慾な和尚一人を探し當てず、佛骨を迎へる事のあるとは飛んだ事だ。」と云つた。

その中、四月八日になると、天子は、早くから大勢の妃嬪等を連れて、端門の樓上に御出ましになつて御覽になる。文武百官は詔を承つて、佛骨佛牙を迎へに行く。城中の人民どもは、すっかり仕事を休んで、香、花、燈燭を連ねて聚つて觀る。辰巳の時になると、幢幡、寶蓋が見えて來、音楽の響が起る。そこへ、八寶で飾つた佛龕がしづくくと進んで來る。

佛骨が著くと、正陽門はすつかり開かれる。そこを、大勢の僧たちが經を誦みつゝ太鼓、鉦鉢を叩きつゝ一齊に這入る。眞直に禁中に入り込むと、天子は樓上から御覽に入つて、「全く一代の盛事だ。」と御感じになる。ぐるぐると廻り廻つてから、佛骨の龕を御殿に供へると、僧たちは退出する。たゞ生有法師一人が伺候して居ると、天子は御出でになつて、うやうやしく開いて御覽になつて、また龕の中に入れて供養なされた。で生有に、

「一寸尋ねるが、成佛した者は死ぬ事はあるまい。それにどうして骨が残る？」と御問ひになると、生有は、

「さやうでございます。佛にはもとより死ぬといふことはございません。涅槃と申しますのは、「盡きた」と云ふ事を示すばかりでございます。従つて骨を残す必要はございません。それであ

るのに骨を残しますは、人と異つて居ることを見せるためでございます。陛下が骨を御覽になつて信を御起しになる。その信から敬が起ります。信と敬とで御代も長く、御壽命も延びて参ります。」

と言上すると、天子は大層喜ばれた。で、便殿で食事を賜はり、また澤山の金や帛を賜はつた。生有は面目を施して退出すると、文武百官が周つて禮拜をする。布施をする。その衣類穀類は山の如く海に似て居る。御門を出ると、城中の人民の香、花、燈燭、太鼓、鉦鉢の、香が、光が、響が圍んで、法師を洪福寺の中まで送り込む。こゝでまた經を誦み、祈禱をし、法事をする。その騒ぎは開の湧き上る様である。禮拜する男女は一杯で、行くことも通ることも出来ない有様である。

三藏と悟空とはこれを見て嘆息に堪へず。三藏が、

「君が佛道を御好みになるのは至極結構だが、惜しい事に、愚僧に迷はされて、こんな不思議な事をなされる。佛の慈悲は人を救ふためであるのに、間違つてこんな悪業になつてしまつた。」と云ふと、悟空はなだめて、

「悪魔どもの盛は一時の事で、決して衰へない譯はありません。暫く御辛抱なさい。きつと何か變つた事がありますから。」

と云つたが、それに違はず、一人の大臣が一通の奏上文を差出した。

その大臣は鄧州南陽の人で、姓は韓、名は愈、字は退之と云ひ、號は昌黎と云ふのである。刑部侍郎であつたが、人となり忠直で、押し切つて物を言ふ。全く聖賢の氣持で、「孔子があられたならば、當然自分は弟子の一人だ。」と人にも言つて居た。天子のなされ方を見て、憤慨に堪へず、

「孔子は異端、孟子は邪説を退けられた。今僧侶の云ふことは異端邪説だ。自分が排斥しなければ誰がする？」

と云つて、懇々と書いた一本を たてまつ 上つた。

「刑部侍郎臣韓愈が佛骨を 熾くすることを願ひ上げます。考へますのに、佛は夷狄の教でございます。後漢の時から中國に流れ入りましたから、その以前にはこのものはありません。昔、黄帝は在位は百年、年は百二十歳、少昊は在位は八十年、年は百歳、顓頊は在位は七十九年、年は九十八歳、帝嚳は在位は七十年、年は百五歳、帝堯は在位は九十八年、年は百十八歳、帝舜と禹とは、年は皆百歳でございますが、この時天下は太平で、百姓は安樂でございます。この時、中國にはまだ佛敎はありませんでした。

その後、殷湯は年は百歳、湯孫大戊は在位は七十五年、武丁は在位は五十九年。歴史には

は年を云つて居りませんが、推算して見ると、また百歳以下ではありません。周の文王は、年は九十七歳、武王は、年は九十三歳、穆王は、在位は百年でございますが、この時、まだ佛法は中國に這入つて居りません。佛の御蔭でさうなつて居るのではございません。

漢の明帝の時になつて、始めて佛敎が這入りました。この明帝の在位は僅かに十八年で、それから亂が繼いで起つて、在位は長くございません。宋、齊、梁、陳、元、魏、佛に事へるところが段々敬々しくなると年代がおひく縮まつて参ります。たゞ梁の武帝が在位四十八年で、三度も捨身せられまして、先祖の祭にも肉を用ひず、一日一食、それも菜だけでございました。かやうに佛敎を奉じられましたのに、侯景を 暹まられで臺城で餓死せられ、國もまた滅びました。佛に事へて福を求めて、それで却つて禍を得られました。これで見ますと、佛は事へるに足りないものだ、と云ふ事がよく分ります。

高祖が始めて隋の禪を受け、即位せられました時、佛は除いてしまはうといふ評議もございましたが、臣下どもの識見が足らず、先王の道を知らず、古今の見透しもないので、仰を承りながら、その弊害を救ふことをせず、そのまゝになつてしまひました。これを私はいつても恨みに思つて居ます。

謹んで考へますのに、今上陛下には、御英明、御賢徳で、數千百年以來類なく入らせられま

す。御即位の初、人民が僧尼、道士となることを御許なく、また寺院を建てることも御止めになりましたから、高祖の御心持は、必ず陛下の御力で遂げさせられることと存じて居ました。が、それをすぐ御行ひにならぬにしろ、それを勝手にさせて、盛ならしめて入らつしやるのは、如何した事でございませうか。

承りますと、陛下には、僧たちに、佛骨を鳳翔から迎へさせ、御樓に御出ましになつて御覽になり、またそれを禁中に入れさせ、また寺々で順々に迎へて供養せしめられます。私は愚者でございますが、陛下が佛に御迷ひにならず、かく崇信をなさるのは、福を御祈りになるのではなく、たゞ年が豊かで人が楽しむので、それに従はれて、都の人々のために、この珍らしい事を見物させて慰みの道具にして御遣りになるのだと存じます。どうして、聖明の君が、眞面目にこんな事を遊ばすのですか。

とは申すものゝ、人民どもは無智でございますから、すぐに迷つて、悟り難いのでございます。今陛下が、かやうに遊ばすのを見ますと、「これは眞實に佛に御事へになるのだ。」と思つて、「天子さへあの通り御事へになる。自分らは身命も惜しむに足らん。」と頂に香を焚いたり、指に火を燃やしたり、集まつて、着物を脱ぎ、錢を出して、朝から晩まで、めい／＼寄進ばかりして、後れない様にと、老人も若者も争ひ走つて、家を捨てる様にもなりませう。

もし御禁止になりませんと、寺々を巡つて、きつと臂を断つたり、身を切つたりして供養をする者もあり、風俗を傷け、風儀を破つて、四方の國から笑はれる事も生じませう。決して小事ではございません。

佛は元來夷狄の國の人で、中國と語は通ぜず、著物も異なり、先王の法は知らず、君臣の道親子の情は存じません。もしその身が生きて今まで居て、その國命で京都に参りますれば、陛下はそれに一度謁見を賜はり、客あつかひをなされ、衣類一重を下され、境まで衛つて出させ、こゝに居て、人民を惑はす様な事は御させになりますまい。まして、佛は死んでよほどになります。その朽ちた骨は、穢なさ極まるもので禁中に入れさせるべきではありません。孔子も「鬼神を敬つてこれを遠ざく。」と申しました。昔の諸侯がその國に弔をするのにも、巫祝に先づ桃茹で祓をさせて、その後に行ひました。今故も無く、朽ちた穢ないものを取り寄せて御覽になるのに、御祓も遊ばさず、臣下もそれに御諫をも申さず、御史も御過ちとも奏しません。私はこれを恥づべき事だ、と存じます。

どうか、役人に仰があつて、此骨を水か火かに投げ込んで、永く根本を絶ち、天下の疑をも、後世の惑をも御無くしになつて、「大聖人の所爲は此の如くだ。」と御知らせになるのは盛ではございませんか、快いではございませんか。佛がもし靈があつて禍をしませうとも、それは

私の身の上に引受けます。私は決して怨みも悔いも致しません。感激の至りに堪へませんので、謹んで申し上げます。」

憲宗は表を見て激しく怒られた。

「韓愈の奴は佛を毀り、君を謗る。死ぬべき奴だ。」

と罪を加へようとされると、臣下は一齊に、辯護して、

「仰ではございますが、韓愈は學問好きな賢臣でございます。佛道を存じませんので御怒に觸れたのでございますが、本心は國の爲めと思つたからでございます。どうか御慈悲を垂れさせられて、御許を戴いて、これから言上する道を御開き下さる様御願ひ致します。」

と申すと、天子は、

「佛を好んで風儀を破ると云ふのは先づいゝとしても、佛を好むと、在位が短かくなると云ふのは、君を謗つたのではないか。」

と云はれる。が臣下はまたいろ／＼と御諫めしたので、「それでは。」と許されたが、降して潮州の刺史として、「すぐ任に赴け。」と命じられた。

韓愈はこれ聞いて大いに嘆いた。

「自分の一身は惜しむに足りないが、堯舜、殷湯から傳はつたこの立派な國が、惡僧のために坊

主の世界となつては、しやうがないではないか。が、仰が降つた以上は、もう訟へる處もない。」と悄然として潮州に向つた。

三藏は韓愈の事を聞いて、孫悟空に、

「わが佛法は世を救ひ、人を濟ふ道である。孔子の道德仁義と同じで裏表になつて居るのだ。布施や喜捨は何でもない。佛骨などは飛んだ事だ。それで人民が駈け廻つて狂人の様なのは驚くべきだ。韓愈は一文のために、天子の御怒に觸れて遠方に行つたのであるが、實は云ふ處確かに理があるから後に残るだらう。梁の武帝の事もあるが、これも佛敎の重大な罪だ。」

悟空は答へて、

「愚僧どもが悪い事をしますので、佛法には何の咎もありません。韓愈の此表は、眞解を求める縁を造つたものです。ゆつくり求道者を探してみませう。きつとありませうから。」と云つて、二人で尋ね廻つた。

韓愈は潮州に著いたが、佛法が厭なので、和尚を見ようと思はず、また和尚も逢ひには來ない。が、ある日、公務で海濱に行つて祭をした。その中、日が暮れたので歸らうとしたが、城から五六十里も離れて居るので、急に歸れない。何處か途中で泊らなければならぬ。「然るべき家があるか。」と見るが、山の中の家は茅葺草葺で、役柄體面上這入る譯には行かない。何處かと探

すと、小さな庵が目に入つた。風雅な有様であるので、役人が韓愈に云ふと、韓愈は、

「不意に泊るのは庵でも構はない。」

と云ふので、乗物をそれに向けて行く。著いて見ると、門に淨因庵と云ふ額がかけてある。雑と
したつくりであるが、品がいゝので這入つて行くと、佛寺の様な飾りはない。佛堂には古佛が一
體あるばかりで、その前に燈がともしてあり、その前の机に香爐があり、その烟があたりを匂は
して居る。鐘も磬も經文の類も全く見えない。東側に禪床が一つあり、その上に蒲團を敷いて、
そこに半老人の僧が一人坐つて居る。枯木の様な寂しさ、灰の如き冷たさであるが、中に活氣を
含み、暖氣を帯びて居る。身には破れた衣を著、古い帽子を戴いて居る。

韓愈が這入つて來るのを見て、僧は急いで起ち上つて迎へた。

「よく御出で下さいました。御出迎もしませんで、失禮致しました。」

「いや、御邪魔をします。海邊で祭をしたので、城まで歸れない。で、こゝを御借りして一夜を
過したいと思ひます。」

「こゝは粗末なものばかりで、貴方の御泊りになる様な處ではありません。それに何のろくな精
進料理の用意もないものですから。」

と云つて、侍者に齋を出させた。それが済むと、僧は韓愈を東側の禪床の上に休ませ、自分は西

側の蒲團の上に坐つた。韓愈は佛骨表を上つてから、和尚は憎らしいので、語もかけないが、
僧の様子を見ると、すつかり黙つて坐つて、動かうともしない。

「和尚には随分送つたが、大抵機嫌取りをするか、佛を種に人を騙すばかりだつた。が、この和
尚はそんな事を一切しない。いゝ處がありさうだ。知らん顔も出来ない。」

と思つて禪床から下りて、燈の前のところをゆつくり歩いた。和尚はそれを見て、立ち上つて前
に來た。韓愈は聲をかけた。

「あなたの名は何と云はれる？」

「大顛と申します。」

韓愈は微笑した。

「あなたは大いに氣が静まつて居られる。「大定」といふべきでせう。どうして狂つた人のやう
に「大顛」と云はれる？」

大顛は答へて、

「いや、世間で氣の狂つたものどもは、氣が静まつたと思つて居ます。としますと、私の氣の靜
まつて居るのは、反對に狂つたとなる譯です。畢竟「大顛」ではございませんか。」
と聞いて韓愈は驚いた。

「さういふ話はまだ聞いた事がない。」

と云つて、また、

「あなたは佛弟子でありながら、經も鐘も磬も、置かれないのでですか？」

と問ふと、

「鐘や磬を鳴らすと、外が喧しい。佛があれば經は入りませんから。」

と答へるので、韓愈は喜んだ。

「御語は甚だ面白い。佛の心持もよく分る。天下の高僧が皆あなたの様でしたら、私、韓愈、佛骨の一文は出さなくてもよかつた。」

と云ふと、「韓愈」と聞いて、今度は大顛が驚いた。

「では、あなたは昌黎大人で入らつしやいますか。」

「さうです、韓愈です。が、あなたは山中の高僧で、私は俗吏です。名などはどうでもいゝでせう。」

大顛は云ふ。

「いや、さうではありません。韓大人は世間から重んぜられて、孔子の直傳とも云ふべき海内一人の御方です。私は僧侶ではありませんが、實は心を大道に寄せて居ます。一代の偉人のあなた

を、どうして慕はずに居られませう！ あなたは内閣の御役人であらせられるのに、どうしてこんな田舎の役人に御なりになつたのです？ また佛骨と仰しやいましたが、それはどんな事でございますか？」

韓愈は答へて、

「佛骨と云つたのは、佛門を壞す事だから、本當はこゝでは云はれないのだ。あなたは正しい教を持つて、邪道の最負をなされない様だから、御話しても差支はない。實は鳳翔に法門寺といふ寺がある。そこに出たらめだが、陳玄奘法師の遺した佛骨と佛牙が塔に納めてある。それを三十年目に開けると太平豊年になるといふ、それで先般こゝの生有といふ和尚が奏上して、『今年は丁度三十年に當ります。塔を開きますから、御覽戴きたい。』と申し上げたので、今上は御信じになつて、文武百官に鳳翔に行つて佛骨を迎へさせて禁中に入れ、供養して御覽になつた。それで俗僧どもは様々な所業をし、人民は男女と云はず。身分も資財も惜しまず布施して風俗を破り、帝王の面目も地を掃ふ様になつた。私はそれを見兼ねて佛骨を斥けられる様にと表文を奉つた。それが御機嫌に障つて、死罪にもなりかゝつたが、御側のものが取り成してくれたので、役を降されてこゝに來て居る次第です。」

と云ふと、大顛はじつと聞いていたが、

「よく分りました。全くあなたのその表文は、朝廷のためばかりでなく、佛門の邪魔を掃ふことゝ
なり。まだ拜見しませんが、その表の力で、佛教徒が永久に政治を犯さしめない様になる
と思ひます。有難い事でございます。」
と讚美する。

「いや、表に功があるか、罪があるか分らないが、たゞ骨を折つて作つた米麥や品物が、父母を
養はず、親族を惠まず、父もなく、君もなく、耕しもせず、織りもせぬ奴等の腹を肥やして、
あてにもならぬ福を希ふと云ふのは、なんと馬鹿な事ではないか。」

「あなたの御心持は辱ない至りです。が、墮落したものは、ちよつと救ひ上げる譯には参りませ
ん。大聲で呼んでも夢が醒めはしません。御骨折は有難い事ですが……。」

「本當にその通りです。だが、これは一體どうしたらいいでせう？」

と韓愈が云ふと、大顛は答へて、

「私が考へますのに、水を火にかけますと、火の熾負ひいきをするものは、きつと、「水が悪い。」と
云つて非難します。それよりも火で、火の静かな處で、火の動くのを止める方がいゝと思ひま
す。と、火は爐の中で燃えるばかりで、外に焼きつく心配がありませんから。」

と云ふと韓愈は、

「あなたの御話は面白い。が、まだ私はよく分らない。」

と問ふと、大顛は、

「あなたは儒者で入らつしやる。儒で佛を攻めると、佛の熾負ひいきのものは、必ず怒つて、焔を一層
強くします。それよりも正しい佛の法で、佛の悪いところを正しますと、佛の熾負ひいきの物でも、
自然敬服するに相違ありません。」

と述べるので、韓愈は禮をして、

「あなたの語は實に筋道が立つて居る。今の佛法は正しくない。正しいのはあなた一人だ。どう
だ、世の中に御出でにならないか。」

「さう仰しやられると恐れ入るばかりです。御覽の通り、私は氣樂に山の中に這入つて、何もせ
ず久しく住まつて居るのですが、今世の中に惡僧どもが大勢居て、佛法が曲げられ、見識のあ
る方から、非難されて居るのですから、どうしても出なければなりません。」

韓愈は喜んだ。

「あなたが御出でになれば、此の上もありません。」

「出ましても何も出来ずまいが、骨だけは十分折る積りです。」

と大顛は答へる。それから色々話すが、二人氣が合つたので、尊敬しあつた。

その夜はめい／＼寝て、あくる日になると、早く起きて、韓愈は顔を洗ひ櫛を取つた。大顛は侍者に齋を差し出させた。それが済んで、韓愈は城に歸らうとして、大顛の手を取つて、

「昨夕の話は御忘れにならない様に……。」

と云ふと大顛は、

「心から出た語です。心は即ち佛であります。決して虚言は申しません。」

と云ふ。韓愈は喜んで、

「辱ない。歸つたら人を迎へに寄します。」

と云ふと大顛は、

「承知しました。」

と答へる。で、二人は別れた。

韓愈は城中に著くと、すぐに車や馬を出して大顛を迎へて城中に來させた。そこで毎日佛法の講論を共にした。大顛の云ふ處が深いので、韓愈はすつかり氣に入つた。で、一月あまり經つて、韓愈は大顛を長安に送り出した。

七

大顛は韓愈に分れて長安に上つた。適當な庵室が見つかつたらば、そこへ泊らうと思つた。丁度、長安は佛教の流行の時で、方々の寺でも、庵でも、高僧が内に居つて、經を讀んだり、法を説いたりすれば、自然山門が盛になるから、さう云ふ人を求めて居る處であつた。大顛が、人物もよし、語も爽やかなので、「此人に居て貰つたら。」と何處でも懇ろに待遇つた。が、大顛は「繁華と雑沓とでは、佛家の氣分が出ない。」と思つたので、何處にも泊らうとは思はなかつた。

諸方を探して、城の西に來ると、小さな庵がある。半偈庵といふ札がかゝつて居る。門前には流れがあり、松が茂つて風雅の趣が十分にある。で、入り込むと、すつかり荒れて堂の中にも人は一人も居ない。立つて待つて居たが、出て來るものもない。仕方がないので、佛堂の後に行つて、

「誰か御出ですか。」

と云ふと、厨から老和尚が出て來た。大顛を見て、急いで堂の中に案内した。

「何處から御出になりました？ 臺所で煮炊をして居たものですから、失禮しました。」

「とんだ御騒がせをして相済みません。私は潮州から参りましたのですが、宿がありません。この一間を拜借したいと思ひますが、如何でせう。」

老和尚は笑つて、

「寺も、庵も、佛家の弟子ならば何處でも泊つてよろしいのですから、御泊め申す、申さないなど云ふことはありません。が、あなたの様な御立派の方は、洪福寺や化生寺の大寺院に入らつしやりさうなものです。どうしてこんなさびしい處が御好きですか？」

「いや、さびしいのは佛家の習です。賑やかなのはよろしくありません。ですからこゝに参つたのです。」

老和尚は又笑つた。

「そんな事は、私たち不精者の云ふ事です。あなたは、千里もあちらから御出になつてどうしてさう仰しやいます。まあこちらに入らつしやい。」

と云つて、外の部屋に案内して、急いで茶を持つて来る。

茶が済むと、老和尚は問ふ。

「あなたは何と仰せられますか？」

「私は『大願』と云ひます。してあなたは？」

「私は『懶雲』と申します。」

大願は問ふ。

「こちらの寺院はみんな繁昌して居ますのに、こゝはどうしてさびれて居ますか？」

「それです。寺の盛なのは、主僧が御經を講じたり、勸化をするからです。實を申しますと、私は和尚ではありませんが、佛法の事は知りません。その上に怠惰者なまけものですから、勸化にも出ません。また御經の講義も出来ません。従つて、参詣人もありませんから、かうさびれて居るのです。」

大願が問ふ。

「全體今の説教が旨かつたり、勸化の上手な當代第一の人はどなたですか？」

懶雲が答へて、

「それは法門寺の生有法師でせう。この方は人物も立派、辯説も上手で、一度同へば千も答へるといふ位です。今上がすつかり御寵愛で先日、それで佛骨を禁中に御迎になつて僧侶も、俗人も、雑沓して大變な騒ぎでした。で、一人の大臣の韓愈といふのが怒つて、上表して佛を斥けられる様に強く御諫め申し上げました。が、今上はひどい御怒りで、韓愈を潮州の刺史に御降くだしになつたのです。で、生有法師は言上して、『韓愈が佛教を謗りますのは、天下の人がこの教の意味をよく知らないかげです。畢竟、玄奘法師が遙々求めて來た三藏大乘經を知らない

からです。どうぞ、天下の寺院に仰せになつて、高僧を招いて、壇を開いて、經を講説して、佛教の分らないものがない様にして戴きたいものでございます。さうすれば、朝廷でも異議を出す人もございますまい。」と申しました。今上は道理と思召して、勅を下して寺院といふ寺院には、壇を立て、御經の講説を始めさせられます。これも皆、生有法師のせられた事で、佛門には大功徳のある方ですから、その方が第一と云ふのです。」

大頭は問ふ。

「その講説は何時から始まりますか？」

「來年の元旦と云ふ事です。」

「さうですか。そりや有り難う。」

と云つた。それから大頭は半偈庵に泊むことゝなつた。で、考へるのに、「佛教が今盛に流行して居るのに、俗僧どもに經を講説させると、きつと、『布施や寄進が大切だ。』と説くに相違ない。これでは佛の正しい教が、却つて國家の害となるばかりだ。自分が山を出たからには、黙つては居られん。」と思つた。が、「間違があつては。」と考へて、念を入れてあちこち聞き合せる、何處でもみんなさう云つて居る。「これは確かだ。」と思つたので、一通の表文を作つて、自分で御門に行つて、役人に御覽に入れる様に頼んだ。

役人は僧人であるので、受取つて、すぐ御前に出す様にした。

天子は御覽になつて、「これは又經の講説に關する事だ。」と急いで御開きになると、次の様に書いてある。

「湖州府淨因庵の臣大頭が謹んで佛法を正したい事を申し上げます。

竊かに聞いて居りますのに、我佛の教は清淨を本として、世を救ふの旨と致します。

太宗皇帝が三藏經文を御求めになりました御心持も、多分さうであらうと存じます。近頃の僧人どもは愚かで、貪る者が多く、我が佛の清淨の心を知りません。で、たゞ外觀を立派にするのを大事として居ります。佛教信仰の人々もまた、我が佛の世を救ふ道理を知らず、たゞ布施をし、寄進をし、香を焚き、經を誦むのを主として居ります。説法をする者も、經文の深い意味を知らず、たゞ命を延ばし、福を得るといふことで、人を誘つて居ります。

かやうな事が久しく流行して、訛から訛を傳へて、我が佛を、たゞ財を貪り、虚言を好む首とさせますのは飛んだ事でございます。陛下が心から佛を御好みになり、御慈悲深く入らせられますにも拘らず、愚僧どもが、その御心持を宣べることもせず、清淨な法門を騒がしく喧しい場處としてしまつて居りますのは、決して正しい道ではございません。今また承りますと、天下に經を講説する様、勅が下つたよしでございますが、陛下の佛教を御宣へ遊ばす御

心持に違つて、講説が、佛教の奥儀を明らかにせず、たゞ命を延べ、福を得ることを主として居りますと、三藏大乘經は、たゞ小乗となつてしまひます。

我が佛の説いた精神と、太宗皇帝がそれを求めて、中國に傳へられた御氣持とは、こんな物ではございますまい。願ひ奉ります事は、我が佛の正しい教と、陛下の御政道と、中天に輝く様にせしめたい。さう致しますれば、天下の幸でございます。もし、佛教の正道を明らかに説かうとなさいますれば、また勅命で、智慧のある高僧を御求めになつて、それに御させになるのが、然るべきだと存じます。今居る様な俗僧どもでは、いゝことはございますまいと、私大頭は存する次第でございます。」

天子は繰返し御覽になつて、

「自分が佛教を興すことは、すべての和尚が口を整へて讚美して居る。が、この和尚は「清淨を本とせよ。」と云ふ。これも一理ある。」

と思はれて、許され様とされたが、又「年來やつて來た事だ。これをすぐに止めると云ふのはどうであらうか。」とも思はれた。しかし、「どうも云ふ事が本當だ。」とも疑はれて決し兼ねられた。で、ともかくも、大頭には一應退る様にと、役人に命じられたので、大頭は半偈庵に歸つた。

天子は大頭を退らせる一方に、使を遣つて生有法師を召された。生有は參殿すると、天子は座

を賜はつて、

「今一人の僧人が、一通の表をさし出して自分に、「佛の正道は清淨だからさうせよ。」と云ふが、どう云ふものだらう。御前を呼んだのはその相談だ。」

と云つて、大頭の表文を渡して御見せになる。生有は少し見て、思はず顔色を變へたが、またすつかり見てから眞紅になつて、

「これは佛門を壞すものです。御聽入れになつてはいけません。」

「どうして佛門を壞すことになるのだ。」

生有は答へて、

「それはかやうでございます。齊梁など佛を信じたのは古い事でございますから、申し上げません。本朝の太宗皇帝から今日まで二百年あまり、香を焚き經を誦み、佛寺佛像を立派にするのを、善いとしなものがございます。それをこのもの一人が、「清淨でなければならん、飾はいらん。立派な事は入らん。」と云つて、それに反對するのは、佛門を壞すことになるではございませんか。何か計畫するところがあるのでございませう。」

と云つて、表文を細かに見ると、潮州府といふ字がある。

「陛下、御見つけになりましたか。」

「いや、何か。」

生有が云ふ。

「かう云ふ事が見當りました。こゝに『潮州府』とございます。此の僧はそのものでございませう。韓愈が佛骨の事で、其處へ遣はされましたが、そこからこの僧が突然やつて参りました。としますと、二人は組になつて、して居る仕事でございませう。」

と云ふと、天子は考へられたが、暫くして、

「韓愈は儒臣だし、この僧は釋子だし、道が別々だから、二人組んで、その道を傷けることはし
まい。」

と云はれる。

「さうでもございませうが、しかし組んだのでなければ、韓愈がたくらんだのもございませう。

私が御寵愛を載いて居るのを嫉んで、わざと反對の説でひつくり返して、自分の出世の手段とするのでございませう。」

天子は黙頭かれて、

「さうかも知れん。よく檢べて見よう。今日は退れ。」

と云はれるので、生有は退出した。

天子は老成な近臣を召されて、

「御前はあの大顛和尚の行狀をよく取檢べて申し出せ。」

と云はれると、近臣は承つて退出して、檢べに行つた。

生有法師は洪福寺に歸つたが、大顛が自分の説を破らうとするのを、深く恨んだ。どうかして、暗殺でもしてやらうと思つたが、天子が賢明で入らつしやるので、手が出せない。止むなく、幾人かの心腹の弟子に、こつそり云ひ附けて、大顛を誘ひ、又その貪慾な事、淫慾な事がらを探し出さうとした。

大顛は表を上てから、長安の人々はその事を喧しく云ひ傳へて、奇しい談の種とした。「馬鹿な事を云ふ。」とけなしたり、笑つたりするものもあつたが、中には正直な紳士があつて、驚いて、「こんな世の塵に染まない高僧がよく出て來た。」と云つて尋ねに來るものもあつた。が大顛が、静かで慾がなく語も寡ないのを見て又敬服した。

ある日、二三人の若い沙彌がやつて來た。一人は「慧眼」、一人は「聰耳」、一人は「廣舌」と云つたのだが、みんな非常に伶俐な様子である。大顛を拜してから、

「私どもは、あなたの道が高く、徳が重くて入らつしやるし、天子様も御尊敬になると承つたものですから、やつて参りました。どうぞ、御側に置いて教へて戴きたい。」

と云ふと、大頭は、

「心の中に佛はある。自分の處へ来るには及ばない。また自分は何の徳もない。師匠となる事は出来ない。」

と答へると、廣舌は、

「聞きます處では、天子様は、深くあなたを御信じになつて、不日あなたを天下の大都綱として、佛教の總統となされる。とすると、富貴榮華は王侯以上にもなられます。私が御弟子にして戴けば、その御蔭を被ることになりますから、どうぞ御弟子にして戴きたうございます。」

と述べると、大頭は大笑ひに笑つて、

「それは違ふ。僧となつてしまつた以上は、身も無いと同じだから、官職も入らん。富貴も入らん。榮華も入らん。」

と云ふと、廣舌はまた、

「あなたは清淨を本旨となさいますから、富貴は御入りになりますまいが、かやうな荒れた寺にたゞ一人御出でになつては、御寂しくはございませんか。」

と云ふと、大頭はまた笑つて、

「自分は清淨の中で、眼を開けば聖ひじりが見え、眼を閉ぢれば佛が見える。天地萬物が心の中に現は

れて、應接に暇がないほどだ。どうして寂しいものか。」

と云ふと、三人は何とも言ひ様がないので、二度禮をして歸つて行つた。

その中にまた三人來たものがある。一人は「傳虚」、一人は「了言」、一人は「玄言」と云ふのである。せき込んで、

「あなた大變です。法門寺の生有法師が、「あなたが、佛教を御壞こわしになる、韓愈と組み合つて、天子を誘ふ。」と申し上げたので、天子は御怒になつて、近々、あなたに大罰を加へようとなされます。私どもは、あなたが御一人で御存じあるまいと考へまして、御知らせに参りました。何とかなされなければなりませんまい。」

と云ふと、大頭は笑つて、

「死も生も、夢幻と同様と早くから知つて居る。あなた方は御存じないのか。」

傳虚が云ふ。

「それは聞いて居ます。たゞあなたは何の繁累もない御體ですから、早く遁げて、うるさい處を離れて御しまひになるのがいゝと思ひます。」

大頭はまた笑つた。

「自分がもし遁げれば、我が佛は逃走者の親分といふことにならう。」

三人は何と威^きしても大願が動かないので、止むなく歸つた。
化生寺の方からその後、迎の者が來た。

「この庵は小さくて、あなたの御住居になる處ではありません。大きい寺に入らつしやいますれば、體裁もよろしうございますから、御出下さいまし。」
と云ふと、大願は笑つた。

「どこも同じ佛の地だ。大も小もあるものか。」
と云つて斷つた。その中に袈裟や、帽子等を贈つて來るものがあるが、大願は決して受けなかつた。

これらの事を、近臣は一々天子に申し上げた。天子は感心されて、
「これは本當の佛弟子だ。」

と云つて、表文の事を許されようとする、御側の連中は生有法師と懇意になつて居るので、すぐこの事を知らせた。生有は慌てた。方々の寺々の有名な講師ども數十人、又天子御氣入りの大官五六人で、一齊に御殿に上つて、願つて云ふ。

「佛教は清淨を本旨とは致しますが、佛を信仰するものが清淨ばかりでは、教の旨を廣く傳へる譯には参りません。必ず香を焚いたり、經を讀んだり、佛寺や佛像を立派にして、命を延べ、

世を永くすることを祈らなければなりません。經を講じて、さうしなければ奥妙には達しません。畢竟、天下で經を講説させて、互に發明しあつて、それで悟ることが大事でございます。この經をたゞ高い處へしまつて置いたのでは、佛の眞經を無用の物とする様になります。陛下は前々から功德を澤山積んで居らつしやるのを、佛はよく御承知ですから、きつと福^{さいはひ}を御下しになります。今一人のものが、たわけた事を申すからと云つて、それに従つて、前の功德まで無駄になさるには當りません。どうぞ御考へ下さいませ。」

天子は考へて居られたが、そこへ外の大官たちが、
「もう經を講じる事は天下に御觸になつて居られますから、求道者は待ち受けて居ります。御取止めになりますと、信心の望を失ひませう。」

と申し上げる。天子は躊躇されたが、人々の面目をつぶすのも氣の毒で、

「經の講説は前に云つた様にしろ。但し大願に、どこの寺でも監察させよ。もし、佛の氣持に違つた講説をするものがあれば申し出でよ。改めさせる。」

と仰せられるので、生有等は承つて退出した。が、講説がもとの通りであることは喜ばしかつた。たゞ、大願が監察すると云ふのは心配の種であつた。

三藏と悟空とは大願の上表の事を聞き、又講説の監察をすると云ふことを聞いた。喜んで、

「この和尚は何處から来たものか。見識がありさうだ。」

と云つて、人に尋ねて、半偈庵に居ることを知つて、例の通り二人の疥癩坊主となつて、庵に来て見る。大顛はちやうど庵に居て、眼を閉ぢて坐つて居た。二人が見ると、頭には佛光が見え、顔には道があらはれ、體も骨も清く、眉も耳も智慧の色を見せて居る。喜んで「これなら大丈夫だ。」と思つて、前に行つて、大聲で、

「この和尚は何もせず、眠つて居るとは何事だ。」

と云ふと、大顛は雷の落ちた様にびつくりして、急に眼を開いて見ると、二人の疥癩坊主が前に立つて居る。「こりや變だ。」と思つて忙いで起ち上つて、禮をして、

「私は眠つて居たのではありません。が、御二人御出になつたのに、御出迎へも出来ませんで失禮致しました。」

三藏は悟空と顔を見合はして笑つた。

大顛は問うた。

「御二人の御名前は……。何の譯で入らつしやいましたか。」

悟空は答へて、

「此の方は『大壯』、弟子の私は『悟心侍者』と云ふ。譯は御前に逢ふためだ。」

とまた二人見合つて笑つた。大顛は「これは異人だ。」と思つたので、二度禮をして、

「私は佛門に志のあるものでございますが、田舎に居ましていゝ師匠に逢ひませんから、肉體のまゝで、神通力を持つて居ません。幸に今御二人に御目にかゝりました。どうぞ御授け下さいませ。」

と云ふと、三藏はまた笑つて、

「私が授けるよりも、自分で努めたらいゝだらう。」

「いや、努めは致しますが、努める方法がわかりません。どうぞ御授けを……。」

三藏が云ふ。

「わかる。わかる。時が来れば自然にわかる。」

と云つて、悟空と大笑ひに笑つて出て行つた。大顛が急いで留めようとした時には、もはや遠方で追ひかけも出来なかつた。

三藏は、大顛が解を求める資格のある人と見て、心から喜んだが、悟空に、

「人はあつたが、今は經の講説が盛んで、めいゝ自分のが正しいと思つて居るから、誰も眞解を求める氣持があるまい。どうしたらよからうか。」

と云ふと、悟空は答へて、

「それは何でもありません。講説の席に行つて、あなたと私と本の形を現はして、神通力で經卷に封をして、講説しようとしても經が開かない様にし、それから木棒を持つて、一喝してやると、きつと改心して眞解を求める氣になります。」

と云ふと。三藏は喜んだ。

「それがよからう。さうしよう。」
と云つた。

その中に、元和十五年の元旦になつた。「方々の寺で經を講説せよ」と云ふ仰を承つて、法壇を作り、名のある法師を頼んで、争つて講説をした。たゞ洪福寺は、生有法師が、壇に上るために、天子の臨幸があり、百官が聴講するかも知れないからと云ふので、こゝは一層人が多い。全寺の僧侶が、先づ大殿で經を誦んで法事をする。それが済んで、巳の刻にならうとする時、幢や、幡や、鼓や、樂が、生有法師を送つて壇に上らせた。壇の下は聴講の僧人俗人一ぱいで、少しの隙もない。生有法師がそこで口を開かうとすると、突然人込みの中から、

「和尚、いゝ加減の事を云つて、佛の大乗妙法眞經を汚がしてはならんぞ。自分らが遙々持つて來た心持を無駄にしてはならんぞ。」

生有は聽いて驚いた。見ると、二人の疥癩坊主が手に木棒を持つて、壇の下で喚いて居るので、

怒り立つた。

「自分は勅を奉じて經を講じるのだ。御前たちは何處の氣違坊主だ？ 邪魔をするとは不届な奴

等だ。」

一人は云ふ。

「勅を奉じて經を講じると云ふが、その經は何物だ。また何の爲めに講じるのだ？」

「經は佛の靈文だ。講じなければ譯が分らん。善果も出來ない。」

「では、善果は講じなければ出來ないか。講じない前と講じた後と比べると、經は何處にある？ 善果は何處にある？ また三藏の經文は何處から説き起すか、もし一言で済むならば三藏なくともいゝ譯だ。三藏全體を述べなければならぬとなると、今日の講説は不完全至極だ。」

生有は一寸返答に困つた。一人は大聲を上げて、

「妖僧、下りないか。」

と云つて棒を振り上げる。棒は手を離れないのに、覺えず知らず、生有はいきなり打ち下された事となつた。生有は膽も魂も皆失くして忙いで壇から下りて拜伏して、

「致しません。致しません。」

としきりに云ふ。弟子どもはびつくりして、忙いで生有を掻き起して、

「しつかりなさい、しつかりなさい。」

と云ふと生有はやつと起き上る。外の一人が又大聲で喝りつけると、生有はまた地に伏さつて、同じ事を云ひつゞける。大勢の僧たちはしようがないので、大急ぎで天子に奏上した。

「大變でございます。今法師が壇上によつて講説しやうと致しますと、何處から來ましたか二人の疥癩坊主が木棒で法師を打つて、講筵を亂して、仰をないがしろにしました。急いで申し上げます。」

天子は大層怒られた。

「何と云ふ妖僧だ。何たる事をする？ 早く近衛兵に命じすぐ捕へて來させろ。」

と仰になる。役人は大勢僧たちを案内にして洪福寺に來ると、二人の疥癩坊主が居る。寄つてたかつて捕へようとするが、どうした譯か、傍に行くことも出來ない。で聲をかけて、

「仰を承はつて二人のものを捕へに來たのだ。早く御前に出ろ。」

三藏は、

「二人とも、佛の御旨を受けて御前に出ようと思つて居た處だ。」

と云つて、どし／＼禁中に進んで行く。役人どもは遠巻きにしながら御殿に來た。

三藏は掌を合せ、胸に當て、身を一寸控いて、

「御禮を致します。」

と云ふと、天子は怒られて、

「御前は何處から來た坊主どもだ？ 勝手な事をする。」

三藏は云ふ。

「私は、西方の極樂世界から參つたものでございます。」

「西方の佛地から來たものならば、禮儀を知つて居る筈だ。どうして拜をしないのだ。」

「勿論でございます。御前に出れば、拜をするのがあたり前でございますが、私は少し違つて居ます。」

「どう違ふのだ？」

三藏は云ふ。

「私は以前、太宗皇帝から『御弟』と云ふ資格を賜はりました。又眞經を取つて參つた手柄で、

今西方の佛の下に居ます。どうか御許しを願ひます。」

天子は微笑された。

「出たらめを云ふな。『御弟』の名を賜はつて、經を求めに行つたのは、陳玄奘法師だと聞いて居るぞ。それは二百年餘りも前の事だ。その人は入定してから、久しい事だぞ。疥癩坊主ども

自分の事にして、ごまかさうとしても駄目だぞ。玄奘の像は、太宗皇帝が寫させられたのがちやんとしまつてある。持つて來させて、較べて見せよう。どうせ違つて居る。さうすれば、殺されても怨みはないだらう。」

三藏は笑つて、

「眞經は火をも恐れませぬ。本物に間違ありません。持つて來て御くらべになるのは、差支ありません。」

天子が云はれる。

「經は御前が持つて來たとしても、今日此處で、高僧に云ひつけて講説せしめるのは、前人の善果を完くすることだ。それを御前が、何の爲めに來て亂したのだ？」

三藏は云ふ。

「それはかやうでございます。以前が經を作られたのと、太宗皇帝が私に求めに行かせられたとは、皆世を救ふ御心からでございます。ところが經が著きました時、藏數に限りがあり、また如來に御返事をする期限がありましたから、講説をする間もありませんでした。ですから世間に眞經はありますが、人は眞解を識りません。これで愚僧どもが、出放題の事を云つて、大乘妙法は人を欺したり、騙つたりする道具となりました。」

騙られた人民は、身命も惜しまず、いろ／＼愚かな行ばかりして居ます。佛はそれで、私にこの一條の木棒で、天下の邪魔物どもを打ち平らげ、一枚の封皮で、三藏の經文を封じて、衆生の墮落するのを救はうとされるのでございます。」

天子は身を立たせて、

「さうは云ふが、經文は天下に行き亘つて居る。それを一枚の封皮で封じる事が出来るものか。」

「いや、封じて御覽に入れます。」

と云ふ中に、近臣が、三藏の畫像を捧げて來て、殿上に掛けた。天子は手でさして、

「これが陳玄奘の像だ。似て居るか居ないか。よく見ろ。」

と云はれると、三藏は、

「似ん事があるものですか。御覽下さい。」

と云ひつゝ、悟空と本の形を現はした。三藏は毘盧帽を戴き、錦襦の袈裟を著、蓮花を踏んで中天に立つて居る。悟空は火の眼、金の瞳で、木棒を持つて左側に侍つて居る。すつかり畫像の通りである。

天子も驚かれ、文武百官もびつくりした。

三藏は袖の中から一枚の金字の封皮を出して、悟空に授けて、

「早く行つて天下の經文を皆封じてしまへ。」

と云ふと、悟空は身を一跳ねして、もはや行方が分らなかつた。天子は、

「今經を封じて講じないと、經を求めて來た心持と違ふことゝなる。これはどうする？」
と云はれると、三藏は、

「さう云ふ御心があれば、私に御求めになるには及びません。たゞ一人の人を御使はしになつて、私の以前したやうに、靈鷲山に行つて、眞解を御求めさせになればよろしい。その時に再び眞解は解かれて、國も太平に、人民も安樂になりませう。」

と云ふ時に、悟空が飛んで來て、三藏の前に出て、

「仰によつて、天下の經文は皆封じました。」

と云ふ。二人は、

「御身御大切に遊ばしませ。私は、今の事を如來に申し上げに参ります。」

と掌を合はして云ふと、雲に乗つて段々と空高く上つて行つた。

八

憲宗皇帝は、文武百官と、三藏と悟空とが、本身を現はして上天したのを見て、驚喜されたが、以前の佛教の信仰の仕方が間違つて居たのを悟られて、眞解を求める人を得ようとされた。

生有法師は、三藏に打たれて驚いて一時氣絶したが、侍者が、「高僧はもはや雲に乗つて歸られました。」と知らせたので心持は本の様になつたが、氣まりが悪く、面目がないのであつた。が、心を決めて、朝廷に出た。

「此度は思はぬ不思議を見ました。それで人を遣つて眞解を求めると云ふのは、もとよりよろしい事でございますが、仰を承つて經を講説するのは邪道ではございません。洪福寺では、佛の御旨を承はつて、居ますから致しませんが、天下及び長安城中の寺々では、仰によつて講説して居ますから、停めることは出来まいと存じます。それが濟んでから停めるといふことに致しましたら、勅命にも違はない事になるかと存じます。」

と申上げると、天子は、

「さうか、停めることが出来ないとすると、濟んだ後に停めることにしよう。」

と云はれるか、云はれない時に、寺々の講師が朝廷に出て、

「私どもが壇上に上つて口を開かうとしますと、俄に空から、火の眼、金の眼、口のどがつた、肥このしやくつた聖人が、一枚の封皮ふうひを持つて、經文の上に張り付けて、「佛の仰で、經を封する。」と云つて行つてしまひました。で、私どもは經を開かうとしますと、糊でつけた様にくついで、さつぱり開かれませんか。これは一體どうした事でございませう。御取り計らひを願ひ上げます。」

と奏問する。外の寺々からも、同じ様に言上する。天子は驚かれた。

「佛教の不思議はこんな處だ。どうしても經の眞解は求めねばならぬ。」

と、天子は思はれたので、生有に、

「以前、太宗皇帝が經をお求めになつた時、陳玄奘が詔に應じて出て來たので、太宗は喜ばれて、「御弟」といふ資格を賜はつて、出發させられた。今度、自分は經の眞解を求めようと思ふが、信用した人でなくては使にはやられない。自分の信じて居るのは御前だけだが、どうだ。西天まで苦勞して行く氣はないか。あれば、御前を『兄弟』と云ふことにするが。」

と仰せられると、生有はびつくりして、全身に雨の様に汗を出して、慄へながら、

「私は御信任を戴いて居ますから、骨折は何でも致します。が、私はこゝで生れ、ここで大きく

なりまして、外には一足も出たことがございませぬ。外の路は一切存じませぬから、遠方に行くことは全く困ります。」

と云ふと、天子は笑はれた。

「御前は路が分らんと云ふが、それではどうして人を導くか。」

「いや、人には出来ることゝ、出来ない事とがございます。私は遠方に行く事は出来ませんが、

佛前で祈禱をして御壽命を延すことは、他人に負けずに出来るかと存じます。」

天子はまた笑はれた。

「祈禱もよくすれば、解を持つて來るにもまさるだらう。」

御階ごたいの下に居る大勢の僧たちに、

「生有は自分の望通りにしようとはいはないが、御前たちの中で、西天に出かけて行つて、望を叶へるものはないか。」

と云はれると、僧たちは泥か木でつくつた人形の様に、一人として答へるものがない。で、天子は不機嫌になつて黙つて居られた。生有は仕方なく奏上する。

「誰も御受け致しませんので困り入りますが、私は一人然るべき人を御薦めいしたいと存じます。

此人はきつと御望み通りに致します。」

「誰れと云ふのか。」

「外でもありません。先日佛法を正したいと申し、今は講説の監察をする大願でございます。」

「大願なら出来るかと、どうして思ふのか。」

「あのものは、表を上つて、『講説は智慧のある人でなければならん。』と申しました。あれに御命じになりますと、あのものゝ本意に叶ふ譯でございます。あのものは潮州生れで、潮州からこゝまで来るのにも苦勞致して居りますから、こゝから西天まで樂に參るでございます。」

これらの事で、あのものを御薦め致したいと存じます。」

天子は考へて居られたが、

「あの僧が、もしかしたら行くかも知れん。たゞ自分の聞いたのでは、靈鷲山までは十萬八千里の道程があり、その上に、途中に魔物が澤山居て、生きて行かれるかどうかあてにならん。もし自分に忠義なものならば、これをやるかも知れんが、それも自分の威勢に恐れて行くとする、途中で、厭になつてしまつて、遂に成功しないであらう。この大願は潮州から遙々來て、表を差出して佛法を正しくしようと云ふのだから、その志は嘉みすべきだ。が、御前が經を講説しようとして堅く願ふものだから、まだ決定を與へず、講説の監察をさせて居たのだ。この者にすぐこのむづかしい處に出て行けと云ふのは、どうも人情を知らん處置の様に思へる。それをするよ

りも、一般に榜を出して、人を募つた方がいゝと思ふ。大願に志があれば、『すぐに行きたい。』と申し出るだらう。志が無ければそれでよし。それを強ひて遣つたつて、効果はないであらう。」

と云はれたので、生有は承つたまゝで、大勢と一處に退出した。

天子はすぐに、榜を出して眞解を求めに行く人を募る様に命じられた。と幾日も經たぬ中に、方々の寺から經が封じられた事を奏上した。すべて「火の眼、金の瞳の神が降つて封をした。」とあるので、天子はますます信仰心を起された。で、早く榜を出す様に催促されたので、榜は皇城の外の處に張られた。その文は、

「高僧を募つて西天に行つて經の眞解を求めしめる事。聞く處によると、佛法はいつも明らかで、高僧がいつも出て居る。以前、我太宗皇帝が、西天から眞經を取り寄せられてから、世に遍く傳はつて居るが、此度陳玄奘が本身を現はして、『經の眞解はまだ靈鷲山にしまつてあつて、世に頒たれて居ない。』と云つた。自分は、眞經には必ず眞解がなくてはならない。さうでなくては眞の佛教は廣められないと思ふ。前の事の足りないのをその儘にして置くことは出来な

い。こゝで大願を起して、高僧を探して、玄奘の様に靈鷲山に上つて、眞解を請うて來て、足りない處を完くしようとする。もし志のあるものが、奮發して行かうと云ふならば、玄奘の様

に「御弟」の名を賜つて尊信しよう。確かにこの事を云つて置く。

元和十五年正月 日

大顛が監察の仰を承つてから、生有法師は招んで「一處に登壇しよう。」と誘をかけたが、大顛は「方々の寺の監察だから、一處ひとところに居る譯には行かぬ。」と斷つて、大勢の聽衆の中に交つて、こつそり聞いて居た。あの日丁度洪福寺に居つて、生有の舉動をちやんと見た。三藏が姿を現はし、且つ經を封じるのを見た。經を求める人を探がして居ることも知つた。で、上表文を書いて、西天に行くことを願はうとして居た處へ、榜たがひが出されたので、そこへ行つて、その番の役人に、「申し上げますが、私は「勅命を承つて、西天まで行つて、眞解を求めて來たい。」と存じます。どうぞ御取次をして戴きたい。」

と云ふと役人たちは喜んだ。

「御名は何と仰せられますか？」

「私は講説の監察を承つて居ます「大顛」でございます。」

役人は急いで宮に參つて奏聞すると、天子は喜ばれて、

「畢竟、この和尚が適當であつた。」

と、すぐ召し入れられた。大顛は仰を承つて、御階の下に參つて拜禮する。と天子は殿上に召し

上げて坐を賜はつて、

「前日御前は佛法を正しくしようといふ表を差し出したので、自分は悟る處があつた。直すにその通りにしようと思つたが、俄に大勢の僧達が、講説をする様に願ふものだから、許して御前にその監察をさせる事を命じたのだ。處が幸に陳玄奘が、姿を現して、「眞解を求めよ」と云つた。これが丁度御前の説と合つて居るから、御前の深い心持を知ること出来た。が、西天に解を求めるのは、むづかしいので、誰も行かうと云はない。それを御前が奮發して、行かうと云ふ。その氣持は、俗僧どもとは、天地雲泥の差だ。」

と云はれる。大顛は、

「御語有り難う存じます。元來佛弟子たる私が、佛教のために骨を折りますのは當然あたりまへと心得ます。前に申し上げました教を正すのも、眞解を求めに行かうと御願ひ致しますのも、全く一つで、二つではございません。」

と奏すると、天子は、

「御前の心は佛と同じで、骨折りを惜しまないには感服する。が、しかし萬水千山を一人身で往くのはどうだらう。御身は何を恃たみにして行くのか。」

と云はれると、大顛は、

「仰ではございますが、佛法には限りがありません。私は何も恃みとするものはございません。そのございませんのが、恃みとする處でございます。」

と申すと、天子はしきりに黙頭かれて、

「御前の論は結構だ。きつと自分の思ふ通りにしてくれるだらう。」

と云はれて齋を賜はつた。それが済むと、天子は、

「榜文に『行くものがあるならば、玄奘の時の様に御弟の名を遣る』と書いて置いた。今御前が、奮發して行くと云ふのだから、日を決めて、佛前で盟を立て、お前を『御弟』としたいと思ふ。」

と云はれると、大願は、

「思召は辱うございますが、君と臣とは違ひます。君臣の大道を私が亂してはなりません。それを亂しますと、佛の戒に背くことになつて、世尊の御前には出られません。どうか私に不義の罪を被らせない様に願ひ上げます。」

と申すと、天子は感嘆せられて、

「眞に佛種だ。眞に佛種だ。」

と繰り返されて、

「これは自分の失言であつた。しかしどうしたらよからう。」

と云はれて、御側の者に、

「洪福寺の僧たちに、早く香、花、燈、幡、天蓋などを持つて、大願を寺に迎へて、出發の日の決まるまでよくあつかへ。」

と云はれる。大願は慌て、

「そりやあ困り入ります。佛教は清淨を大事と致します。私はこの事を頻りに申しました。ですから賑々しく迎へ送りをされて、立派な寺に入れられますと、邪道に落ちることになります。眞解を求める路もなくなります。」

と云ふ。天子は喜ばれて、

「御前の論を聞いたので、自分の誤を八九分も悔いて居る。お前が『大きな寺に移るのは厭だ。』と云ふのも道理だ。が、一體何處に居ようと云ふのか。」

と問はれると、大願は、

「私はもとから半偈庵に居ます。」

と答へる。天子は御側の者に、

「半偈庵とは？」

と問はれると、御側の者は、

「それは、城の西の隅の方の小さな庵でございます。」

と申すと、天子は笑はれて、

「大寺に住まず小庵に住む。それも『半偈』と云ふ。『心に半偈を持すれば萬縁空し。』だな。『半偈』と號したらよからう。」

と云はれたので、大願は御禮を云つて退出して歩いて半偈庵に歸つた。

大願は「半偈」と云ふ號を賜はつたので、これから人々も「半偈」と呼ぶことになつた。半偈庵の和尚はこれらの事を聞いたので、大願に、

「西天は遠方です。そこまで御出でになるのは大變な御役目です。大きな寺の和尚たちは、毎日朝廷から供養を受けて、美衣美食をして居るのですから、さう云ふ人が遣られさうなものです。それをあなたは どうして御引受になつた？」

と問ふと、大願は、

「眞經が曲解されて居るので、眞解を求めるのは佛教の大事です。私は佛弟子ですから、それを他人まかせにして、骨を折らん譯には行きません。」

と云ふと、和尚は云ふ。

「あなたは田舎の方で、まだ經を求める困難さを御存じないのです。」

「それはどういふ事です？」

「私どもはこの長安城の内で生長したものですから、年寄りたちから、聞いて居ります。西天までの道は、十萬八千里もあり、その中に千妖百怪、恐ろしいものが澤山居ますから、とても通れたものではありません。そこを以前、玄奘法師は、觀世音菩薩の御取りはからひで、三人のもの、乃ち、孫行者、猪八戒、沙和尚を弟子にされました。この弟子達が神通力で、妖怪どもを退治したので、やつと靈鷲山に著いて、眞經を手に入れて歸られたのです。今あなたは一人の弟子もなく、たゞ御一人で、一寸の鐵も持たずに行かれようたつて、行かれるものですか。」

「御忠告は辱い。が、西天に路がある。私にも路がある。一步一步づゝそれを履めば、行かれんことはありません。玄奘法師も出發の時、すぐ三人の弟子があつたのではありますまい。さまざまの妖怪が居ると云つても、私の心の中に佛が居られますから、恐ろしい事はありません。」

「いや、さうでもありません。あなたの御話は迂濶千萬です。その時になつて見れば、さう容易くは参りますまい。」

半偈は云ふ。

「どんな事でも、死ぬと思へば、何でもありません。私は死ぬ覺悟ですから、何だつて困りはし

ません。」

と云ひ了らぬ中に、前の日に來た二人の疥癩坊主が這入つて來て、大聲で、

「いゝ覺悟だ。和尚、難を畏れる事はない。解を求めるのは天のやうに、海のやうに、大きく深い因縁のある仕事だ。しつかりやれ。弟子もきつと三人こしらへてやる。」

と云ふので、見ると、玄井と悟空の變形なので、忙いで地に伏さつて、

「佛祖の御骨折で、解を求める役を遠慮なしに承りました。が。弟子があらば、一人を戴きたいと存じます。」

と云ふと、三藏は、

「有る、有る、有る。立つて來い。一つ咒文があるから傳へよう。これは定心眞言だ。しつかり覚えて、毎日三時に口の中で誦め。さうすると、自然神通力の強い弟子が來て、御前に西に行く助けをするから。」

と云ふ。半偈は大喜びで急いで三藏の膝の前に跪くと、三藏は耳に口をつけて、眞言を傳へ、また悟空から木棒を取つて半偈に授けて、

「これは佛の御寶だ。御前に與へる。もし邪魔外道に逢へば、これを持つて叱りつけろ。きつと征服されるから。」

と云ふ。半偈はまた問はうとすると、三藏と悟空とは中天に在つて、

「しつかりやれ。危ない時には救うてやる。」

と云つて雲の中に這入つてしまつた。半偈はしきりに禮拜した。和尚は驚き反つて、

「活菩薩、活菩薩。かやうに靈を現はされる。あなたは安心して居らつしやれる。私はもう何も申しません。」

と云ふ。半偈は立ち上つて、禮拜をして、

「あなたの御忠告は有り難かつた。御厚意は忘れません。」と云つた。

これから半偈は毎日朝、午、晩の三度づゝ、必ず定心眞言を口の中で十數遍誦んだ。不思議な事は、この眞言は聲もなし音もない。が、その無い一聲一音が、南贍部洲長安城の内から、遙々と傳はつて、東勝神洲、花果山水簾洞の孫履眞の頭に達した。

孫履眞は悟空の教を受けてから、毎日洞の中で修養して成道しようとして居た。心が外に移らないから、自然静かで快くつて、思ふ事がなかつた。ところがある日、朝早く起きると、頭が少し痛み出した。それも半時ばかり経つと止みはしたが、正午時分になると、また俄に痛み出した。その内止んだが、晩方になると、また痛み出した。こんな事が毎日續くので、不審に思つ

て、頭をさすつて見ると、金籬兒がしつかりくつゝいて居て、痛みはその邊から起つて来る。「これはどうした事だらう。この籬は以前、大聖から賜はつたものだが、これが自分に害をするのではないか。」と思つたが、「しかしこの籬は長い間頭に載いて居る。それでちつとも痛むこともなかつたのに、どうして、この頃痛み出したのか。籬の所爲ではないであらう。が、痛むことは痛む。痛くて堪らない。どうしたらよからう。」と通臂仙の處へ来て、この話をする。通臂仙は、「それはかうかも知れん。以前、大聖の頭には金籬兒があつた。それは觀世音菩薩が、三藏法師のために、大聖を取り抑へる法術で賜はつたものだ。大聖が三藏法師の云ふ通りにしないと、法師は咒文を唱へ出す。さうすると、大聖の頭が裂ける様に痛んで堪へられなくなる、と云ふ事だつた。今あなたの頭が、痛むのは、何處かで、人がこつそり眞言を念じて居るのではないでせうか。」

履眞が云ふ。

「もしさうだつたら、どうしたらよからう。」

「さうだとすると、念じる人を探がし當て、念じないやうに頼むより外はありませんまい。」

「誰が念じるのか分りはしない。どうして探し當てるのか。」

通臂仙が云ふ。

「痛みがあれば来る處があり、来る處があれば探がす處がある筈です。」

履眞は悟つて、

「さうだ。さうだ。」

と云つた。それから、朝早く起きて、痛みが起らうとする時に、先づ心を静めて、南に向つて坐つて居る。と、金籬兒のところに変な氣持がしだして、暫くすると、正面の方から痛みが始まつて、兩方に及んで来る。で、「正面から始まる處を見ると、念じるものは南の方に居るに違ひない。」と思つた。が、正午になると、向を換へて、西を正面にして座つて見た。すると、不思議な事には、痛みが頭の東の半から起つて来た。晩になると、今度は東を正面にして座つて見た。と痛みは頭の西の半から起つて来た。喜んで、「念じるものは、きつと南方に居る。」と思つた。で、翌日になるのを待つて、眞直に南に雲に乗つて飛び出した。

履眞は飛んで居る中に、南贍部洲に著いた。で下を見ると、まさに大唐の國界だ。が、頭の痛みは却つて南方からではない。「では西の方だらう。」と、雲を留めて、今度は西に尋ねて来ると、長安城の空に來た。と、痛みは北の方から起つて来る。で、また尋ねて北に來ると、痛みは又東の方から來る。で、尋ねて東に來ると、また痛みは西の方から來る。かやうに尋ね尋ねて二日経つと、ちょうど、城の西の半偈庵に著いた。

此頃は辰巳の時で、履眞の頭の痛まない時分だ。庵の門の前に坐つて見たが、中には何の物音もしない。で起つて、庵の中に這入つて、あちこち見廻すが、何物もない。待つて居て、正午時分になると、内から一人の半老の和尚が出て来て、佛前に座つた。聲は出さないが、經を誦む様子である。と、しばらくすると、履眞の頭は疼々と痛み出した。出て行つて事譚を問はうと思ふが、間違つてはいけないと思つたので、窓の外からこつそり見て居る。中には又一人の和尚が出て来た。一杯の茶を捧げて、座つて居る和尚にさしだした。

「どうぞ一杯召し上げ。」

と云ふと、座つた和尚は、忙いで立つて、茶碗を手に受けて、

「どうも辱ない。」

と云ふ。履眞の頭の痛みは、ふと止んだが、茶を吞んでしまつて、本の様に座つて念じる様子であると、また本の様に痛み出した。履眞は原因が分つたので、堪らず佛堂に這入つて膝を衝いて、「和尚さん。私は、あなたと前世も今世も怨みはなく、仇もありません。どうして私を呪ひなされるのです？」

半老和尚はふりかへつて見ると、腮のしやくつた、猿のやうな人が、両手で頭を抱へて、跪いて居る。驚いて、

「これは何だ。わしは定心眞言を念じて居るので、御前を呪ふのではない。」

「あなたはさうかも知れませんが、私の頭は痛くて堪りません。」

「そんな事がある筈はない。」

「あなたはさう仰しやいますが、も一遍念じて御覽下さい。」

半老和尚が念じ出すと、履眞の頭はすぐ痛み出して、

「どうぞ止めて下さい。止めて下さい。」

と云ふ。

和尚は、「眞言はまことに靈現のあるものだ。弟子が来て助けると云ふ事であつたが、これであらう。もすこし念じて、すつかり服従させてやらう。」と思つて、猶念じると、履眞は、耳を掴み、腮を揉んで床にころがりながら、

「痛い。痛い。あなたはひどい。私は數萬里のあちらから尋ねて来たのです。どうぞ止めて下さい。ひどい。ひどい。」

と云ふ。和尚は念じるのを止めて、

「一體御前は何處から来たのだ。どうして、わしが念じるのを知つたのだ？ 本當の事を云へ。念じないから。」

和尚が念じるのを止めると、履眞は頭が痛まないの、起きたが、猶、跪いて、

「どうして虚言を申しませう。私は東勝神州傲來國花果山の石の中から生れたもので、孫履眞と申します。道法を修めたものですから、西王母の瑤池に這入り込んで仙桃、仙酒を強請りました。それで玉帝は、三界五行の神たちに捕へさせようとせられましたが、その神たちは私の棒で打たれて散つてしまひました。それで南大門を出ましたが、支へるものもありませんでした。玉帝はこまられて、私の祖の、西天で佛となつて居るのを頼んで、私を降伏させられました。私はその命を受けまして、この數年間、山の中で靜かに修養を續けて居ました。その時、祖は金箍兒といふのを私の頭の上にかぶせましたが、これも何の事もなしに過して居りましたところ、數日前から、頭が痛んで來ました。これは祖の話の中に、これで成道するといふやうな事がありましたから、何かあるであらうと思つて、花果山から眞直にこゝに尋ねて參りました。ところが、あなたが呪を念じて入らつしやる。と私の頭が痛み出すと云ふのですから、私の成道は、あなたの御手の中にあると知りました。」

と、長々と述べる。和尚は問ふ。

「御前の祖と云ふのは誰の事だ？」

履眞は答へて、

「外ではありません。私の祖は、唐三藏の弟子の孫悟空と云ふので、今は成道して鬪戦勝佛となつて居るものでございます。」

と云ふと、和尚は大變喜んで、

「佛は御えらい。」

と云つてひたすら黙頭く。感嘆する。履眞は、

「それはまたどうした事です？ 全體この呪文はどうした譯です？ どうして御念じになる？」

またあなたは何と仰しやいます？」

と問ふと、

「それでは話して聞かしてやらう。」

と云つて、につこり笑つた。

孫履眞は、半老和尚に名を尋ねると、和尚は、

「自分は法名を大願と云ふ。しかし、今上が『半偈』といふ號を賜はつたから半偈といふ。潮州の生れだが、佛教が間違つて教へられて居るのを見たから、それを正すやうにと、表文を奉つて、こゝに泊つて居る。ところが、この頃、『方々の寺で、經を講説せよ。』と云ふ勅が下つたので、僧たちが講説して居ると、玄奘佛師と御前の祖とが現はれて、經をみんな封じてしまつて、『間違つた講説をするのは、本當の解釋がないからだ。それを西天まで探しに行け。』と云はれた。今上はそれを聞かれて、自分に、『靈鷲山まで行つて持つて來い。』と命じられた。それで、自分はすぐ行かうとすると、また玄奘佛師と御前の祖とが現はれて、『一人では行くのに困るだらう。氣の毒だ。今念じて居る定心眞言を授ける。日に三度誦め。さうすると、大神通力のある弟子が出て來て、西天に行く助けをする。』と云はれたので、念じ初めてから幾日もかゝらない。それなのに、今日ちやんと御前がやつて來た。佛の御語といふものは、かうも違はないものだ。有難いではないか。』

と云ふと、履眞は喜んだ。

「あゝさう云ふ譯ですか。すつかり分りました。ちやんと祖が作つてくれた仕組であつたのですな。祖は前に『成道を仕遂げなければ野仙で終る。』と申し、また『御前はおれの後を繼げ。』と申し、また『御前の頭が成道のもとになる。』と申しました。よろしうございます。私はあなたの御伴をして西天に参りませう。』

「御前が、心から自分を助けて西天に行つて、眞解を取つてくれるとは有難い。』

「辱うございます。人は『心は金石の如し。』と云ひますが、私は石から産れたものでございませうから、金石同様に堅い心で申すのでございます。決して虚言ではございません。また私は性急でございますから、今すぐあなたを師匠と仰ぎたいのです。』

「よろしい。承知した。』

「もはや、御許を受けたのですから、眞言を唱へる事は御止め下さい。』

「御前が本心から自分を助けてくれれば、そんな事はしない。で、御前は、自分を師匠としたから、御前は佛の弟子となつた譯だ。さうすると、頭を剃らなければならぬのだ。が、いゝ具合に、御前の髪は多くないから、その儘でよろしい。で、御前の名だが、『履眞』と云ふが、この語は、佛門にはよく合つて居るから、それでいゝ。が、外の者が呼ぶのには具合がよくな

い。自分が、何か外に名前を付けてやらうと思ふが、どうだ。」

「いや、私は俗號をつけて居ります。」

「何と云ふのだ？」

「祖が天上を開がしました時、齊天大聖に封じられました。私はその後を繼がうと思つて、『齊天小聖』と申して居ます。」

「そんな大それた號は、僧家では駄目だ。御前の祖が佛門に這入つた時分、孫行者と云つたと云ふ。御前がその嫡流だと云ふと、これから『小行者』と云つたらどうだ。」

履眞は喜んだ。

「結構。結構。至つて結構でございます。前方通臂仙と云ふのがさう申しましたが、經を取りにも行かないのに、そんな名をつけても存じました。今はあなたの御伴をして西天に參るのでございますから、『小行者』と御附け下されるのは、祖を忘れないのと、また、祖を犯さない事にもなります。ちやうどよろしうございます。」

半偈は、履眞の語がさつぱりして居るので喜んで、更に云ふ。

「僧家では、第一に虚言を云ふ事を禁じて居る。御前は東勝神洲の花果山から來たと云つたが、どうも不思議だ。どうしてさう早く來られるのだ。虚言ではないか。」

小行者は笑つた。

「あの下八洞の神仙でも、『朝には北海に、暮には蒼梧に。』と云ふではございませんか。この位のすこしの路は何でもございませぬ。」

半偈はまだ不審な顔をしたが、また、

「明日勅命が下ると、すぐ立つやうになるが、御前は、何か氣にかゝる事でもあるか。」
小行者は笑つた。

「いや、飛んでもありません。あなたの御弟子となつた以上、一所懸命に御伴を致します。何が氣にかゝるものですか。」

半偈は心から喜んだ。で、こゝで共に一夜を明かした。

次の日になると、天子は近侍に澤山の衣、帽子、靴、襪、乾糧等の品物をも賜はせ、また一通の通行手形、世尊から眞解を受ける表文、及び途中の地理の本をも賜はつた。更に一匹のいゝ馬をも賜はり、その上に洪福寺の僧たちの中で、健康なもの二人を從者として賜はつた。で、氣象臺の役人に仰せられて、吉日を選ばせ、その日に出立するやうに命じられた。半偈は御禮を申し上げたが、衣服や帽子などの一つ二つを御受けして、二人の從者は御還しして、

「昨日、一人弟子が出來ましたから、それで十分でございます。二人は御還し致します。路が遠

うございますので、歩いて参るのは困難でございますから、馬は頂戴いたします。」と云つて、小行者に馬は取り收めさせた。近侍には、「すぐ参ります。」と奏上させた。

近侍が歸ると、小行者は馬を牽いて、半偈の前に來た。

「この馬では遠方までは乗つて行かれませんか。」

半偈は訝つた。

「近侍はよく選んで來た。」と云つたのだが、どうして駄目か。」

小行者が手を馬の上に乗せると、馬はばつたり地に伏さつてもがきもしない。半偈は驚いた。

「これではしやうがない。も一度奏聞して取り換へて戴かうか。」

小行者は頭を振つた。

「いや、それには及びません。世間の馬は大抵こんなものです。取り換へてもいゝ事はありません。」

半偈は考へた。

「さう云へば聞いた事がある。八部の天龍が馬になつて、玄奘法師を乗せて行つたので、後に成道したと云ふ。そんな馬でなくては駄目なのだらう。世間の馬ではとても行かれはしまい。しかたがない。どこまでも歩いて行くとしよう。」

「あなたは佛性がおありになつても、神通力を持つて入らつしやいけませんから、どうしても遠方までは御出になれません。」

「自分も、さうは思ふが、世間に龍馬など云ふものはないからな。」

と云つて半偈は眉をひそめた。

「御心配なさいますな。龍馬はないことはありません。」

半偈は驚いた。

「いや、この都の金持が千金で探しても、駿馬も手に入らない。どうして龍馬が何でもないと云ふ？」

小行者は、落ちついて云ふ。

「外のものならば駄目ですが、私なら手に入ります。四海の龍王と私は懇意でございますから、そこで、一匹の龍を受取つて馬にして、ちやんとあなたを御乗せしませう。これが入門の束修と云ふ事になりませうか。」

半偈は顔色を變へた。

「冗談も大概にしろ。佛を拜んで解を求めると云ふのは大事件だぞ。帝王の勅命でする事だぞ。出たらめを云ふのはよせ。」

「いや、出たらめではありません。私は心の底から、あなたの御爲を思うて云ふのです。ちゃんと受取つて参ります。さうすると本當と云ふ事が御分りになりますから。」

と云ふかと思ふと、小行者は身を一跳した。と、もう行方が分からなくなつた。半偈は呆れもしたが、喜びもした。

小行者は、一飛びして東海に來た。こゝはよく知つた路だから、水を分ける秘訣を施して、大波小波の中をさつくと別けて通ると、巡海夜叉が見えた。で、大聲をかけて、

「早く通知しろ。孫小聖履眞が、大王に御目に掛りに出て來たぞ。」

巡海夜叉は急いで水晶宮にかけ込んで、老龍王の教廣の前に出た。

「大王、大變です。あの口の尖つた毛臉の孫小聖がまた參つて、『御目に掛りたい。』と申します。」

老龍王は驚いて、

「何の用でまた來たのか。」

と云つたが、急いで宮中に入れた。

「先般は失禮しました。あの後あなたは老大聖の教で、山の中でおとなしく修養して入らつて承はつて居ましたが、どうして、今日は氣儘を出して、こゝに入らつしやつたのです？」

と問ふと、小行者は笑つて、

「私がおとなしくなつて修養をして居るのを、どうして御存じですか？」

「近邊の事ですから、ちやんと知つて居ります。」

「引込んで修養して居ましたが、よくないので出て來ました。」

老龍王は笑つた。

「これはをかしい。おとなしく修養して居るのは至極いゝ事です。それがどうしてよくないのです？」

「いや、私が我まゝをして居た時には、上は天にも上り、下は地にも這入り、勝手に事が出來たのですが、大聖から教を受けて成道しようと思つてから、却つて面倒な事になりました。」

「どんな事ですか？ 大聖の様に、經を取りに行く、と云ふ様な事でしようか。」

「いゝ御推察です。大聖が三藏佛師と求めて來た經が、世間で間違つて解かれて、邪道に陥つて居るので、三藏法師は憤慨され、本の身を現はして經を皆封じられました。で、『佛の御手許に眞解があるから、人を遣つて求めて來い。』と云はれました。今上はそれを聞かれて、半偈師父を遣はされようされますが、師父も一人では困られたので、法術で私を呼びよせて弟子とせられました。それで事が起つたのです。」

老龍王が云ふ。

「それならば結構ではありませんか。あなたが佛弟子におなりなされて、師父について西天に御出になるのは。それなのに、どう云ふ御暇があつて、方角違ひのこの東海に御出になつたのです？」

小行者が答へて、

「暇で来たのではありません。中々急がしいのです。靈鷲山は遠方ですから、師父は歩いては行かれませんか。しつかりした乗物が入用です。が、國の中の普通の馬では、とても用に立ちません。あなたの處にいゝ馬があれば、一匹御貸し下さいませんか。師父がそれに乗つて靈山まで行つて、眞解を求めて歸られますと、すぐ御還し申し上げます。決して偽りは申しません。」と頼むと、老龍王は答へた。

「そりや違ひます。馬は陸の産物です。海の中に居るものですか。どうしてこゝに取りに御出になつたのです？」

「陸の産物の馬がないから、こゝに参つたのです。」

「いや、海の中に馬は居ません。」

小行者は、

「あなたは又分らない事を仰つしやる。馬はないが、龍はあります。あり餘るほどあります。どうぞ一匹御貸し下さい。それを馬にして乗つたら、ちやうどよろしい。」

と頼むと、老龍王は云ふ。

「それはまた違ひます。一人の人でも志骨のあるものは、墮落して馬になる事は厭がります。私たち龍種が、その人でも厭がる馬になつて、乗り廻はされて堪るものですか。」

小行者は笑つた。

「それは御考違ひです。いゝ前例を自分で壞すと云ふものです。前方、三藏佛師が西天に經を求めに行つた時の白馬は、それ、北海龍王教順の御子さんではありませんか。」

「いや、それは、火をかけて御殿の珠を焼いた罪を、父親に告げられて、玉帝に吊り下げられて斬られようとなりました。それを觀世音菩薩が救うて下さつたので、龍になつて經を負うて罪滅しをしたのです。私どもの龍の子も孫も、皆すなほで、悪事をしませんから、それを馬にする譯には行きません。」

小行者はまた笑つた。

「善いから悪いから、と云ふではありません。馬になつて、經を負うた善い先例があるので、から、善い悪いに拘らず一匹を選つて下されば、それで結構です。」

「それはいけません。眷族は、どれもこれも大切に、たやすく出す譯には行きません。」
小行者は云ふ。

「それならば、あなた御出で下さい。善い事をするのですぞ。」

「飛んでもない事。私は忝なくも八河を總べて治め、雨を司る大龍神です。玉帝の詔を受けて参つて居るものです。馬などになる理屈はすこしありません。」

小行者は聞いて、

「よろしい、よろしい。さう云はれれば、是非がない。すこし手荒な事をしますぞ。」

と云つて耳の中から金箍棒を取り出した。

「これで、一打ち参らうと思ふが、もともとあなたの物だ。それであなたを傷めつけるのは御氣の毒だ。」

と云つて、「變れ。」と呼ぶと、一條の鎖になる。からつと響を立て、それを龍王の首に捲きつけた。龍王は驚いた。

「これは困ります。ゆつくり御相談しませう。」

「もう相談する事はないではないか。」

龍王は弱つて、蝦將龍師を呼んで、鐘太鼓を鳴らして方々の龍王を集めさせた。で、南海龍王教

欽、西海龍王教問、北海龍王教順が一齊にやつて來た。見ると老龍王は鎖につながれて居る。びつくりして、

「どうしたのです?」

と問ふと、老龍王は今までの事を一順述べる。三龍王は顔を見合せた。

「こりや、とても出來ない事です。」

小行者はそれを聞いて、無闇に老龍王を引き立て、外に出ようとする。三龍王は慌て、

「あゝ大變、まあまあ待つて下さい。あなたは一匹の馬が御入用ではありませんか。私どもの兄を、どうしてさうおいぢめなさるのです?」

と云ふ。小行者は答へる。

「いぢめるのではない。自分からいぢめられるのです。二度も三度も頼むのに承知されないから、かうするのです。早く一匹下されればそれでいい。いつまで待たれるものですか。」

南海龍王教欽が老龍王に、

「かうなつては呑んでもしかたがありません。」

と云ふと老龍王は、

「何も呑みはしない。寶が入るならば贈つてもいい。が、龍の眷族を馬にしたのでは、龍宮の體

面がなくなるではないか。」

教欽が云ふ。

「眷族を馬にするのではありません。あれあれ、あの馬の事です。あの伏犠ふくぎの時に、河圖かどを負うて水から出て来た馬、あれならいゝではありませんか。」

老龍王は喜んだ。

「さうだ。忘れて居た。あれがよからう。あれは聖教に手柄のあるものだから、何千年も乗らずに養つて居たのだ。今日自分の性命いのちを救うてくれるとは、勘定に合ふ譯だ。しかし、あの馬は儒教を開いた功臣だから、今もその方では、「龍馬が圖を負ふ。」といふことを大切に居る。それが今自分のために、和尚を乗せて遠方まで行くとなると、自分は教を壞こわる罪人となりはしないか。」

と云ふと、西海龍王教閏が、

「あなたの話は迂遠です。近頃の文人どもは、皆、坊主に御辭儀をして、機嫌を取つて居ますぞ。畜生ですから、和尚を乗せたつて何でもありませんまい。」

教欽、教順ともに、

「全くさうです。」

と云つて、

「では、馬を一匹差し上げます。兄の鎖を解いて下さい。」

と云ふ。

「それならば、早く下さい。」

と云つて小行者が手を振ると、鐵の鎖はすぐ繡花針きゅうかぎとなつて耳の中に藏かくれてしまつた。

老龍王は自由になつたので、海を掌する鱷大使あひだに云ひつけて、河圖を負うた龍馬を牽き出させた。小行者が見ると、竹を削いだやうな耳、鐵のやうに堅い蹄、ゆつたりした體付からだづかひ、全く良い馬だ。小行者は大喜びで、

「早速下さつて辱ない。が、この上に鞍や轡あしづなを下されば猶結構ですが。」

と云ふと老龍王は、

「私どもは海の中を往來して、馬に乗りませんから、そんなものはありません。」

小行者は笑つた。

「そりやをかしい。馬が無いと云はれたがちゃんとなつた。あつたら、鞍や轡が無い譯が無い。

無いと云はれるのは、をかしい。」

と云つて怒り聲になると、南海龍王教欽が、

「いや、御怒りになるな。私の處にちやんとあります。」

「どうしてあります？」

老龍王は驚いた。

「本當にあるのか。」

「あります。以前、周の時、昭王が南方に行かれましたが、楚の奴等が膠の舟で、王を溺らしてしまつた。その時、一匹の御馬も沈みましたが、巡海夜叉が、其處へ行つて、鞍や轡を持つて歸りました。實に立派な御物ですから、私の處へ差し出しました。これが今まで、ちやんとあるのです。」

「では、早く御出し下さい。」

と小行者が云ふと、教欽は急いで取りに遣つて、小行者に差し出した。見ると、鎧、鞍、轡、障泥など皆整うて、鍔めた金銀は目を射る様だ。小行者はすつかり喜んで、それを馬につけると、誂へて作つた様にびつたりはまる。で、禮をして、

「あなた方の御蔭で、師匠の乗物も整ひました。用が済みましたら、すぐ御返し申し上げます。また改めて御禮にも参ります。」

と云つて馬を牽いて、水晶宮を出た。四海龍王が送るのを見て馬に乗つて、「行け。」と云ふと、

馬はよく水を行き、人は雲に騰ることが出来るので、風の響がこうくと響く中に、波を分け雲を踏んで、忽ち長安城に到着した。

半偈は、小行者が姿を消してから、不安心で、庵の前に出て、あちこち見廻はして居ると、俄に小行者が馬に乗つて飛ぶ様に歸つて来るのが見えた。とすぐ前に来て、急いで馬から下りて、「御待遠でした。が、どうです、この馬は。これならば靈山に行きつけませう。」

と云ふ。半偈が見ると、その馬は蹄が高く、脚が強く、普通の馬とは全く別物だ。

「こりや結構。しかし何處から探して来た？」

「虚言ではありません。四海龍王の處からです。」

半偈は訝つた。

「龍宮は水中だ。どうしてこんないゝ馬があるのか。」

「御話しすれば長い事です。この馬は全く普通のものではありません。御存じの伏犠の時、河圖を負うて河から出て、文字の始を作つたあれなのです。さういう手柄があるものですから、龍宮に何もさせずに養つてあつたのですが、私が老龍王をいぢめたものですから、止むを得ず、牽き出して借してくれたのです。」

と聞いて、半偈はよく／＼見て、

「さう云へば、これは上古の龍馬だ。人の乗るものではない。が、この鞍などはどうしたのだ。こんな美しいものが世間にあらうと思へないが。」

小行者は黙頭もくづついて、笑ひつゝ、

「あなたの御眼は流石です。この鞍や轡おびはついて居るものではありません。あの周の昭王が南方に行かれた時、楚の奴等が膠の舟で、王を沈めて殺しましたが、その時、御馬も一處に死にました。その馬具を龍王が取り收めて居たのです。仰つしやる通り、帝王の御使用のもので、普通のものではありません。」

半偈は慌てゝ、天に向つて敬しく禮をして、

「私は一人の平凡な僧人です。どうして大聖人の龍馬に乗り、古の帝王の馬具を使はれませうか。しかし、勅命を奉じて靈山に参つて、眞解を求めますのに、道が遙かで、普通の馬では乗つて行かれません。止むを得ず、龍王の恵を受けましたのでございます。私の勝手氣儘の罪を御許し下さいまし。」

と云ふと、小行者は笑つて、

「馬は畜生です。馬に騎るのが罪になるのなら、人に轡こころまひを擡ひかせると、その罪で死ななければなりません。」

「さうは行かん。心には彼是の分ちはない。」

「さう仰しやると、佛は獅子や象に乗つて居るのは、どうした事になりますか？」

「いや、佛が、獅子や象に乗つて居られるのは、獅子や象が御恵みに潤うるほふからだ。自分が龍馬に乗ると、龍馬は自分のために、骨を折るばかりだ。そこが違ふ。」

小行者は感嘆して、

「あなたの御言は本當に眞解と云ふものです。もうさう分れば、西天まで遙々行かなくてもいい譯わけですな。」

と云ふと半偈は、答へる。

「さうは行かない。御前の云ふ事は東の方だけの事だ。一般には通用しない。どうしても、西天に行つて來なければならん。」

「それなら一刻も早く行きませう。ぐずぐずする譯には行きませぬまい。」

半偈は喜んだ。

「徒弟。御前のその猛勇心では、佛門に入る資格が十分だ。」

と云つて支度に取りかゝる。小行者はその中の木棒を見た。

「こんなものは、どうしたのです？」

半偈が云ふ。

「馬鹿にするな。大切なものだ。佛の御寶だ。魔物に逢へば、これで一喝すると、きつと退散する。」

小行者は笑つた。

「さう云ふものですか。こんなもので打つても痛くもありませんまい。喝りつける位はまあいゝでせう。」

半偈は、朝廷に出て天子に出發を申し上げると、天子は「文武百官及寺々の僧等に、香や燈を持つて送らせよう。」と云はれるのを御斷りして、「佛の道は清淨ですから、それには及びません。」と申し上げたので、天子は悦ばれて、その通りにさせられた。で、半偈は庵に歸つて、和尚に別を告げた。小行者は半偈を助けて馬に上らせ、自分は荷物を肩にして、いそぐと長安城を出て、西へ西へと進んで行つた。

半偈は、天子に御別れを申し上げ、小行者と長安城を離れて西へ西へと進んだが、この邊はまだ中國の土地であるから、何の障りもなく、幾日か經つて、鞏州地方に著いた。日が暮れたので見ると、路に傍うそばうて小さな庵がある。小行者は半偈を馬から下りさせて、荷物を馬の上に置き、率きながら庵に行く。

庵は小さいが、立派に出來て居る。佛堂の處まで二人が行くと、一人の若い和尚が出來て來て、

「御二人はどちらから？」

と問ふ。半偈は、

「私は勅命を承つて西天の大雷音寺に參つて、經の眞解を取りに行くものです。日が暮れたので、場所も分りませんので、御邪魔を致しました。どうぞ、今夜の宿を御貸し下さい。明朝は早く出立しますから。」

と云ふと、

「さやうでございますか。こゝは唐朝の河州衛の中ではありますが、西番の哈沁の中にもなつて

居ります。あなたが、勅命を奉じて入られるならば、天使大法師でありませうが、どうして、さう御伴が少ないのです？」

半偈は答へて、

「佛家は清浄を本とし、淡薄を旨といたしますから、天使と云つて、護衛をつけることを御断りして來ました。」

と云ふと、僧は不審がつて、

「どうしてさう云はれるのです？」

と云ひつゝ、禪堂へ迎へ入れ禮をした。主客ともに座つた。

僧は齋さいを云ひつけた。

「あなたの御名前は？」

「私は『半偈』と申します。これは天子から戴いた名前で、本名は『大願』です。この弟子は『小行者』と申します。」

と云つて、

「あなたの御名前は何と仰せられます。」

と問ふと、僧は、

「私は『慧音』と云つて、天花寺の點石大法師の孫弟子です。」
と云ふ。半偈は、

「その點石大法師は、定めしすぐれた御方なのでございませう。」

と問ふと、慧音は、

「さうです。大法師は西域の方で、道行も辯舌もすぐれて入らつしやいます。御弟子は、皆、定靜、慧の三字を戴いて、大勢居ます。さうです。この河州地方、城内にも、城外にも、このやうな庵が千餘もあります。残らず、天花寺の下に附いて居ります。」

と答へるので、半偈は、訝いぶつた。

「御盛んなものではな。どうしてさう御盛なのでせう？」

「本當の話ですが、この哈沁かぢん地方は、役人でも、人民でも、佛教を信仰しないものはありません。で、最も好きなのは、經の講説を聴くことです。大法師は、前に申したやうに、口が御上手です。因果應報の話が説かれると、すつかり聞き入つて、男も女も禮拜して、活佛いふたけ様と云つて、金錢、財物、米穀類を山のやう、水のやうに喜捨して來ます。それで、こんなに寺は繁昌して居るのです。」

と云ふ時、侍者が齋さいを持つて來た。で、二人はこれを食べしまふと、慧音はまた、

「あなたは唐の天子の勅命で、佛の御前に、經の眞解を御求めに入らつしやると云はれたが、本當の事ですか。」

半偈は答へた。

「本當ですとも。勅書を持つて居ります。虚言は申しません。」

「本當ですと、大變な佛事です。どうして一般に御知らせにならないのです？ 廣く知れます

と、信仰者は一層信心を増して、佛敎の繁昌になる事ですのに。」

と慧音が怪しむので、半偈は答へた。

「佛敎は、清淨無爲を本とします。立派にしたり、奢つたりするのは、魔の所爲です。私が勅命を受けて眞解を求めますのも、この魔を追ひ掃はうと思ふからです。廣く知らせて、盛んにするのには罪に落ちる譯ですから、さう云ふ事は致しません。」

慧音は微笑した。

「冗談を仰しやる。廣く知らせると云ふ事は、佛敎の大事だと思ひます。どうして罪になるのでせう。私は學識が浅いので、よく分かりませんが、これで止めに致しますが、明日、大法師がよく御話を伺はませう。」

と云つて、二人を寢室に案内した。

天花寺の點石法師と云ふのは、西域の生れで、性質がよくない。辯舌に任せて、經の講説をしては、愚人を欺まして金錢財物を集めて居たのであつた。ところが、先頃大勢信者を聚めて、壇に上つて講説しようと思つた時、ちやうど孫悟空に經を封じられたので、開く事が出来ず。譯は分らないが、手持無沙汰になつたので、「急病だから延期する。」と云つて壇から下りた。暫くして、また講説しようとして經に手をかけたが、さつぱり開けない。講説がなくなると、喜捨がなくなり、どの寺でも、すつかり暮しに困るやうになつた。師匠も弟子もどうしたらいいか分らない、と思つて居たところ、慧音のところへ半偈が來た。「勅命で西天に行つて、眞解を求めろのだ。」と云ふ。さては、これに何かいゝ事があるのではないか。と思つたので、慧音は早速點石のところへ通知しに來た。

點石は慧音からの知らせを受けて、「今日經の講説を盛んにやつて居るから、別に解を求める必要がない。求めると云ふのは、何か唐朝で異變があるのではあるまいか。明日その人を呼んで聞いて見れば分るだらう。全體この經の開かないのが不審だ。これも聞いたら、譯が知れるだらう。」と思つた。

慧音は云ふ。

「半偈と云ふ人は實に質素淡泊で、全く和尚の様ではありません。佛敎には功があつても、一般

には無益な人です。こんな人が思ふ通りにする様になると、私ども佛弟子はみんな餓死しなければなりません。あなたは、私どもの爲めに、この人を一つやつつけて戴きたい。」
點石は答へて、

「その人は修行を本とし、自分たちは極樂を教として居る。明日來る時は流派のものをみんな集まらせ、すべてを立派にして見せて、その人の心が動くか、動かないか試して見よう。」

と云ふと、慧音は喜んで、點石の命令を方々に傳へてすつかり準備して庵に歸つて寝た。

次の日になると、半偈は小行者と起き出して、朝飯を早く食べ、荷物をこしらへて、出ようとする、慧音は慌てゝ止めて、

「まあ御待ち下さい。昨夜御話しした通り、點石大法師はこゝでの徳行家です。それなのに、御會ひにならずに、御通りになつてしまふは如何かと思ひます。どうぞ、一度御會ひになつて下さい。」

と云ふと半偈は答へる。

「御目にかゝりませうが、早く西へ行きたいので、時間を取るのには困ります。」

「いや、天花寺はすぐそこです。また御通り路です。御手間は取らせません。」

「順路ならば参りませう。」

と半偈は云つて、小行者に馬を率かせ、慧音と一處に歩いて行くと、すぐ天花寺に著いた。見ると殿堂の屋根が重なつて居て、それが皆金碧で飾つてある。樓閣も澤山あつて、玉の様に光り輝く。鐘樓、鼓樓、僧房など、いづれも手の込み、念の入つた建築である。半偈はこれを見て、這入るまいかと思つたが、慧音がしきりに勧めるので、止むを得ず歩いて山門まで來た。中は一層奇麗なので、小行者に馬をそこで停めさせて、自分ばかり大殿に上つて、佛の御前に禮をして居ると、案内の僧が客堂の中に導いた。で、こゝで茶を出して、

「どうしてこゝまで御出で下さいました？」

と云ふ。半偈は、

「私は唐の天子の勅命で、西天に行つて經の眞解を求めに参るものですが、御前を通りまして、慧音師兄から、點石大法師が、今の善知識で入らせられる事を伺つたものですから、御目にかゝりたくつて御邪魔をした次第です。」

と云ふと、案内の僧は、

「さやうでございますか。大法師は今、禪房で靜養中で、人には御逢ひにはなりません。が、しかし、あなたは天使で入らつしやいますから、申し上げましたら、大方、堂から出て御逢ひになりませう。」

と云ひつゝ、澤山の果物、菓子類を出した。その中時が経つと、大殿上に太鼓が響く。案内の僧は、「殿上で太鼓が鳴ります。法師が御出ましになるのです。」

と云ふと、三遍太鼓が鳴ると、音楽が聞こえ出す。それが段々と近づいて来る。半偈がその方に眼を遣ると、音楽の響の中に、一隊、一隊、幢、幡、寶蓋などが見えて来る。これが百隊以上もある。堂の外に来ると八字形に分れて、中から點石和尚が、二十人ばかりの小和尚を連れて堂に這入つた。刺繡のある毳盧帽を被り、珠の垂れた衣を着て、満月の様に肥えて、頭は圓く、頸が直い。全く羅漢の有様である。で、堂の中まで来て、半偈を見て、案内の僧に問ふ。

「この方が、唐朝の天使の法師か。」

「さやうでございます。」

點石は叮嚀に禮をする。半偈は點石の仕方が氣に入らないが、止むを得ず、進み出て禮をした。で、主と客と座を分けて坐つた。點石は、

「侍者の言ふ事はつきりしません、あなたは勅命を受けて何處に行かれる？」

と云ふ。半偈は答へて、

「私は、勅命で、西天大雷音寺に往つて、如來の御目にかゝつて眞解を載いて、眞經を解かうとするのでございます。」

と答へると、點石は、

「それはどうでせうか。三藏の眞經は天下に流布して、高僧たちは十分講説して居る。別に眞解と云ふものがありはしません。それを取りに行かれると云ふのは、外に、何か譯わけがありません。」

と難じる。半偈は、すぐ答へる。

「さやうでございます。眞經はもはや流布して居りますし、講説もされて居ますが、まだ本當の解釋は出来て居ません。佛の世を救ふ法門が、果報の方に説かれて、民を損じ、道を害たぶらつて居ます。佛はそれを御憐みになつて、旃檀功德佛陳玄奘法師を長安城に御遣はしになり、朝堂で原の形を現はして、神通力を示して、闘戰勝佛孫悟空に天下の經文を皆封じて、少しも開ひらかない様にせられました。また「佛の御手許には、眞解がある。以前の様に、また人を遣つて、それを求めて来て、本當の解釋をしたならば、世も人も救ふことが出来る。」と奏せられましたので、天子は「私に行け。」と命じられました。これが事實で、外に何も譯わけはありません。」

點石は聞いて、「經の開かないのはさう云ふ譯わけだな。」と思つた。が、また「自分の弟子、孫弟子たちは、三四千人もある。みんな經の講説をして暮らしを立て、居る。この人の云ふ通りだと、これらはみんな壞こわされてしまふのだ。大變な事になる。」と思つた。

「御話は一應御道理です。が、私は、承知されません。」
と難ずる。と、半偈が反問する。

「どうして、承知されませんか。」

點石は云ふ。

「もし、三蔵の眞經は一切虚言で、別に眞の解釋があるとすれば、それでよろしいが、三蔵は皆眞經で、經の解釋もすつかり明らかになつて居る。それで、佛法も尊まれて、天下の人も利益を蒙つて居る。それに拘らず、『間違つて居るから、講じては悪い。別に眞解があるから取りに行く。』と云ふのは、全く妖僧が佛門を壞さうと思つて、面倒な事を云つて、天子を御欺し申し上げたに過ぎない。これが伴でなくて何でせうか。」

半偈は答へる。

「玄奘法師がちゃんと壇に来て、經を封じたのは、みんなが見たので確かな事。決して虚言ではありません。」

點石が云ふ。

「さうは仰しやるが、玄奘法師は久しい以前に法門寺で入定して、佛骨佛牙がその塔中にちやんとある。それがどうして壇に上つて、經を封じるのですか。さう見えたとしたのは、妖僧が幻術を

使つたのに相違ない。あなたはそんな事を信じないで、遠方まで行つて苦勞するのを止めて、長安に歸つて、私の申した事を奏聞なさい。そして、今まで通り、經の講説を御興しなさい。自然に國が榮え、民が安樂になりますから。」

半偈は笑つた。

「正しいものは妖しいものを妖しいと云ひ、妖しいものは正しいものを妖しいと云ふ。これは道理な事で、をかしくはありません。が、眞經に眞解のないのはどうしてもいけません。口先の議論は、どこまで行つても止るところがありません。私は勅命で解を求めに西天に行くのですから、その外の事はどうあつても構ひません。」

と云つて、立つて出ようとする。と點石は、

「遠方に行くのに急いではいけない。こゝから靈山までは遠い。まあ急がずにゆつくりなさい。切角御出で下さつたのだから、齋でも上つて。」

と云ふ。半偈は、

「それには及びません。齋は御弟子の處で戴きました、弟子も山門に馬を牽いて控えて居りますから。」

と云ふと、點石は、

「御弟子があるなら、御招きして来い。御一處に齋をあげるから。」

と命じるので、侍者は小行者を呼びに行つた。小行者はそれで、馬を門前の樹に栓ぎ、荷物と、その中の木棒を并せ持つて客堂に来た。半偈はそれと見て點石に逢はした。小行者はたゞ挨拶だけして側の椅子に著いた。點石はそれをよく見ると、すぐ、あの經を講説して居た時、出て来て經を封じた毛臉で雷の様な口をしたものを思ひ出した。「さては、經を封じたのは、この和尚の幻術だな。こゝで逢つたからには、その術を破つてやらう。」と考へたので、一方では立派な齋を用意させて二人を優待し、一方では三千の弟子孫弟子を集めて、「齋が濟めばみんな這入れ。」と命じて居た。その中、齋が濟むと、三千人が一齊に這入り込んで、轟々とわめき立てる。半偈は譯が分らない。

「一體これはどうした事です？」

點石が云ふ。

「それはかうだ。こゝは、河州衛の土地だが、却つて西番の哈泌國の支配になつて居る。こゝの役人も人民も、佛教信仰で、經の講説を聞くのが好きだ。自分の下の三四千の弟子どもは、皆その講説で暮らしを立てゝ居る。今だしぬけに、眞解を求めると云ふので、經を封じられたのは、これは唐朝限りのことで、この哈泌國の事ではない。唐朝の以外のものまで封じて、衣食

の道を絶たれては堪まらんと云ふので、皆が、「封皮を取つてくれ。今まで通り、講説させてくれ。」と云ふのだ。もし聞かないとすると、どうなる事か分かりませぬぞ。」

半偈は驚いた。

「經を封じたのは佛のなされた事。私と關係はない。私にどうして判がれるものですか。」

點石が云ふ。

「さう云はれるが、隠してはいけない。經を封じたのは、あの御弟子ではないか。私はちゃんと見て居る。あなたと關係がないものか。」

小行者は笑つた。

「こりやをかしい。もう一度御覽下さい。それは私ではない。間違へてはいけません。」

「いや、間違へない。間違へない。毛臉、雷の口、ちゃんと覺えて居る。」

小行者はまた笑つた。

「さうでせうが、年が違ひますぞ。」

點石はまた見た。

「成程、さう云へば、少し年寄だかつたかな。」

小行者は猶笑つた。